
屍ヶ台

骨休め

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屍ヶ台

【ZINE】

Z-532-X

【作者名】

骨休め

【あらすじ】

屍ヶ台と揶揄される、過去より食人を重ねてきた土地。知らずにその一角に住むことになつた姉を襲う悲劇に立ち向かおうとする水嶋涼一。死者の惡意に翻弄されながら、家族の絆を保とうとする彼が、最終的に選ぶ道は……。現実感のある設定。全編に渡つてシリアルです。ライトな要素はありません。

姉貴の家の訪問者（前書き）

この章にはグロい表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さい。

「もう、本当に腹が立つ！」

結婚して家を出でている姉貴の、今日の第一声はそれだつた。

少しそ前から頻繁に実家に電話をするようになつてゐる。なんでも、新居として住み始めた賃貸マンションの隣室から、子どもを虐待するような怒鳴り声が、毎晩、響くのだといつ。

「深夜の1時とか2時に、延々1時間ぐらい喚き続けるのよ、その母親。異常すぎじやない？」

そんな報告を聞けば、無関係な独身男の俺としても、なんとなく心がざわつくものである。

「児童相談所に通報すれば？」

無難ながらアドバイスすると、俺よりはるかに血氣盛んな姉貴は、「隣の子をつかまえて学校とクラスを聞き出したから、まず小学校に連絡してみる。それと、隣の家の玄関先で、『いい加減にしてよね、毎晩毎晩！』って大声出してやつたわ」と鼻息を荒くした。苦笑しながら、でも俺としては隣人トラブルで刺されたりしねえだろうな、と心配になつてみたりもした。

その姉貴の本日の怒りの要因はこれだ。

学校に連絡を取つてから数日、隣家の声は聞こえなくなつた。一昨日には地区の民生委員も訪問していいたそうだ。地域絡みで虐待阻止に乗り出したんだな、と安心した姉貴は、昨夜も達成感から健やかに熟睡していた。

深夜2時。なにかが聞こえたような気がして目を覚ました。夜中の物音には敏感になつていて、耳を澄ますと、ぼそぼそと喋る複数の人間の声が聞こえる。玄関先から。

仕事で疲れている旦那を起こす前に、正体を見極めてやろうとした姉貴は、こつそりと玄関に歩み寄つた。覗き窓から外を覗くが、暗いばかりで動くものは見えない。声は途絶えている。気配もない。

氣のせいだつたかと身を離したとき、突然インター ホンが鳴つた
そうだ。重ねるが深夜2時。尋常じゃない。

「へタレだと思うけど、怖くて玄関、開けられなかつたわよ」

そう意氣消沈する姉貴に、

「絶対開けんなよ」

と釘を刺して、その口の会話は終わつた。

次の連絡は翌々日。

会社から帰ると、お袋が受話器を握り締めながら青い顔をしてい
る。何事かとそばに寄ると、姉貴からだといつ。精神的に弱いお袋
と電話を換わつた。

「俺。今、帰つた。どうかしたの？」

「あ、リョウちゃん？ ちょっと氣持ち悪いことになつてゐるのよ」

姉貴は、珍しく取り乱した様子で、畳みかけた。

「昨日、話した深夜のインター ホンだけど、電話したその夜も昨
日も、続けて2時から3時頃に鳴らされるの。カイさんに出てもら
つたんだけど、こいつの動きを察したみたいで逃げられた後だつた。
今夜も来そうで、ちょっと滅入つてゐるの」

カイさんは姉貴の旦那だ。大手の自動車部品会社に勤める
技術者で、毎日のように帰りが遅いと姉貴がこぼしていた。

「今度は調べに行く前に警察を呼んだら？ もしくは監視カメラつけ
ようぜ」

そう提案すると、

「監視カメラがあ……やつてもいいけど、明日になつちやうよね。
今晚、カイさん出張でいないので。どうしよう……」

と答える。

結局、お袋の後押しもあつて、俺はその晩、姉貴の家に泊まりに
行くことになつた。

引越しの手伝い以来、久々に訪ねた新居は、すでに綺麗に片付け

られていた。姉貴はむしろ潔癖症に近い性格で、俺の部屋が汚れているのも我慢ができず、よく勝手に物を捨てられた。非難する俺を、

「部屋の汚れは心の汚れ！」

と汚物扱いしたのも、今となつては、なんだか懐かしい。

「一応、ここに入る前に隣の家の物音を探つてみたけど、怒鳴り声とかはしなかつたぜ」

と開口一番に言うと、

「うん。声は聞こえなくなつたね。でも、だからつて虐待が止んでるとは言い切れないじゃない？非常識な嫌がらせするような母親なんだし」

と答える。姉貴は深夜の訪問者が隣家だと確信しているようだ。

「複数の人間の会話が聞こえたんだろ？隣つて家族何人？」

「母親と小学生の女の子だけみたい。お父さんは見たことない」その説明に、俺は首を傾げる。深夜2時、母子家庭にわざわざやつてきて嫌がらせに加担する物好きがいるんだろうか。

「ふうん…。まあいいや。捕まえりやはつきりするし」

そう言いつと、姉貴はホツとした顔をして、

「よかつた。リョウちゃんが逞しくなつてくれてて」と微妙な表現で褒めた。

「あ、でも、番してくれるのは嬉しいけど煙草は吸わないでよ。お風呂の排水口の髪の毛はちゃんと拾つてね」

釘を刺すのも忘れない。

相変わらずうるせえなあ。それが人にモノを頼む態度か。

0時を回つて姉貴が消灯の時間に入つた。俺も明日の出勤のために眠つておかなければならぬが、なんだか目が冴えてしまつた。電気の消えた部屋の中で携帯をいじりながら、耳を澄ます。

隣家からは何のアクションもなかつた。もしかしたら、この後の悪戯に備えて誰かが訪問して来るんじやないかと疑つたが、気味が

悪いぐらい静まり返つている。

「訪問者、か」

姉貴に聞こえない声量で呴く。なんとなくゾクッとする響きだ。相手の顔が見えないから無闇な想像をするんだろう。インター ホンが鳴つてドアを開けたとき、そこにいるのが目を釣り上げて怒りの形相を顕わにした母親だつたらOKなんだ。いや、それ以外ありえないか。姉貴はお節介だが、間違つたことをして他人の恨みを買うような奴じゃない。

少し眠気を感じ始めた俺は、布団を持つて玄関先に移動した。音を聞き逃して、姉貴に、また明日から怖い思いをさせるのもアレだし。

…足音がした。ような気がした。

慎重に起き上ると、俺は手元の携帯を見た。時刻は2時を少し回っている。

狭い玄関を挟んだ先にドアがある。その向こうから、やつぱり何かの音がする。妙に乾いた響きだ。足音とは違う。布団から這いでて、厚い鉄製のドアに耳をつけた。話し声はない。カシンカシン、と、耳慣れないそれは、移動する気配もなく、この家の前に留まっている。

枯れ枝でコンクリの床を叩くような音だな、と思った。水分の抜けた物体が奏でる軽い振動。わずかの衝撃で簡単に折れそうな脆い質感。

唐突に思い出した。大学時代、ワンダーフォーゲルの部活動をしていた俺は、2年生のひと夏、先輩に連れられて山岳救助に携わらせてもらった。天候の良い日に限り、行方不明者の捜索に山々を歩きまわる。一般的な登山者が行かないような深い谷や雪渓にも足を運んだ。

「こんなことしても見つかる可能性はほとんどないんだよね」とあきらめムードのプロに混じつての捜索の結果、1体だけ遺体を

見つけることができた。鮮やかな赤いリュックの傍らに、完全装備した服装を身につけたそれは、すでに皮も内蔵も残つていなかつた。風化したスカスカの骨になつていった。

骨の音だ…。穴だらけの石灰質の棒の羅列を思い描いて、吐き気がこみ上りてきた。表にいるのは、本当は何なんだ？人間なのか？インターホンが鳴つた。俺は飛び上がつたと思う。ドアノブを掴もうとしたが、痺れたように腕が伸びない。人間じゃない。そうとしか思えなかつた。人間の気配じやない。

どれぐらいの時間、葛藤していたのか。

気づくと表の音はなくなつていった。それと入れ違いに室内から控えめな足音が近づいてくる。姉貴が不安そうな顔を覗かせた。

「いま、インターホン鳴らなかつた？」

俺は弾かれたようにドアを開けた。

共用通路の常夜灯が、すでに誰もいなくなつたコンクリートの床を照らしているだけだつた。

生者か死者か（前書き）

この章には遺体の表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さい。

生者か死者か

寝不足の日をこすりながら出社した。地方都市のオフィス街に、俺の仕事場はある。

地下駐車場に車を突っ込み、エレベーターの上昇ボタンを押すと、急に脱力感が来た。睡眠不足のせいじゃない。過度の緊張感から解放された自覚が芽生えたせいだ。

朝まで姉貴宅で過ごした俺は、ちゃんと主婦をしているらしい彼女手製の朝飯を食つて、マンションを出た。ドアを開けるときに、まざまざと深夜の物音を思い出す。見送りに出ていた姉貴を何度も見返ると、

「何よ？ うつとうしー」

とケチを付けられた。心配してやつてんのに。

骨…いや、俺の妄想の中で、訪問者はもっと確実な姿を持つている。口を大きく開けた頭蓋。欠損している肋骨。粉を吹いた骨盤。折れた大腿骨。山の中で見つけた遭難者は生きて帰りたかった未練を全身で表していた。玄関の向こうにいた、あの質量の軽い存在は、生きている人間と同質の立場に見せようとしていた気がする。

「幽霊や妖怪なんものが本当にいたとして…なぜ、それが姉貴のところに現れたかが謎だよな…」

あちらを立てればこちらが立たず。超常現象で推理してみても答えは出ない。

オフィスのドアを開けると、すでに出社していた先輩社員が、

「おはよっす。なんだ？ 汗えない顔だな」とからかってきた。

「ちょっとあつてね…。あんまり寝てないんですね」と答えると、

「一晩中、何があったのかなあ?」
と下卑た笑いをぶつけてきた。

「そんない話じや…」

苦笑しながら言い訳する。

そういふすうのうに、後輩の彩ちゃんあやが出社してきた。俺の顔を見るなり、

「どうしたんですかあ? 顔色が、青いつて血つよつ白こですよ」

と驚いた。そんなに病的な症状なのか、俺。

「あんまり追及するなよ。一晩中の作業で衰弱しきつてるんだから」

俺が答えるより早く、先輩が茶々を入れる。

「違うつ。泊まつたのは姉貴のとこだつて!」

彩ちゃんの前で恥をかいたことに感情的になつて、思わず声を荒らげた。

「お姉さんつて、この前、結婚した? 新居に泊まるなんて仲がいいんですね」

屈託なく笑う彩ちゃんは、その後、このそつと、

「妬けちやうなあ

と呴いた。大きな瞳を伏せる仕草にドキッとする。

朝の定例業務をこなし、次の波が来るまでの時間をぼんやりと過ごしていた俺に、先輩が話題を蒸し返してきた。

「お前つて彩つぴ狙いじやなかつたの? 本当はビリに行つてたんだよ? 姉貴の家で寝不足つて変だろ」

こそつと耳打ちに忍び寄る小太りの体を押し返して、

「だから違うつて」

俺は半ば笑いながら否定した。

「隣人トラブルつてやつですよ。真夜中にインターホンを鳴らす非常識な馬鹿を捕まえようと思つたの」

「そりやあ悪質だな。姉ちゃん、そんな馬鹿に絡まれてんのか」

「あの人も喧嘩腰なとこあるから…」

身内として、少々、姉貴に厳しい評価を下すと、彩ちゃんが聞きつけて寄ってきた。

「お姉さんに何かあつたんですか？それで泊まつたの？」

結局、俺は2人に顛末を話すことになつた。

「なんだか妙な話だなあ。嫌がらせなら、もつと恫喝的なことしてもおかしくないんじやないか？相手は複数なんだろ？」

先輩が珍しく真面目な顔で反応する。

「でも、お隣さんですし、自分の正体を知られるのは嫌なのかも」

彩ちゃんの意見も、至極、的を射てると思う。

「自分の立場を守りたいなら、俺なら、むしろもつと恐怖感を『え

て話もできないようにさせんば』」

「先輩は過激すぎですよ」

俺は割つて入つた。彩ちゃんの先輩を見る目が変わりつつある。

「訪問者が誰だつて、今日にはまつきりします。姉貴、今ごろ監視カメラを買いに行つてるはずだから」

そう説明すると、

「よかつた」

と安心する彩ちゃんの横で、

「誰も映つてなかつたりしてな」

とニヤつく先輩。

…もし、本当にそうだつたら…。

…幽霊が訪問してくるなんてこと、本当にあるんだろ？…

一笑に付されると思つて黙つておいた仮説を、思わず口にした。

「マジで受け取つたの？んなことあるわけないだろ」

嘲る先輩に対し、意外なことに彩ちゃんが俺を肯定した。

「そういうの、ないとは言えないんじやないでしょ？…」

今朝の水嶋センパイの顔、生気が抜かれたみたいな色してた…

俺は自分の顔を触つてみた。ちゃんと体温も持つてる。疲れも回復している。

「とり憑かれたみたいだつた？」

笑つてそう聞くと、彩ちゃんは、

「ちょっと心配になりました

と控えめに微笑んだ。

その流れを傍観していた先輩が、いきなり俺に受話器を突きつけた。

「あのさ、ちょっと面白くない、そういうの？『実録お化け屋敷！』みたいな」

「人事だと思つて…」

調子のいい言葉に苦笑しながら、俺は受話器を受け取る。

「それでどうすればいいんですか？寺にでもかけて悪霊退治頼めつて？」

「違う違う。かけるのは不動産屋

先輩は自分のノートPCを手繰り寄せながら言つた。

「よくあるだろ。そのマンションが建つ前は墓場だったとか沼地や井戸があつたとか。それ、確認してみろよ

「不動産屋なんか知りませんよ」

受話器を突つ返そとすると、先輩はそれを遮つて続ける。

「マンション名ならわかるだろ。検索してやるよ

結果。大手の住宅情報会社がヒットし、俺も悪ノリで事故物件の是非を追及することにした。

会社を退社すると、そのまま姉貴宅に向かう。監視カメラの設置をしてやらないといけない。

「意外に安いのね、こういつの」

警告灯付きの丸いフォルムのカメラには数千円の値札が付いていた。それを玄関のすぐ上に取り付けたあと、別売の受信装置を室内のビデオに繋ぐ。

「これって録画OKなんだよな？」

確認すると、

「つて店の人は言つてたわよ。白黒だけど」

答えが返る。録画機の電源を入れると、接続したモニターに外の様子が映し出された。

「よし、成功。明日の夕方また来るから、そのときに一緒に確認しようぜ」

促すと、姉貴は怪訝な顔をした。

「その前に見ちゃだめなの？」

不動産屋からは、特に手がかりは得られなかつた。しつこく粘つてみたが、マンションが建つてているのは山地を削りとつた岩盤の上で、災害にも人災にも見舞われたことはなかつたらしい。その回答を聞き、俺もいつたんは「やっぱり隣か」と納得したんだが、このマンションに戻つてみると、言いようのない胸騒ぎが襲つてくる。ビデオに映つた『もの』を、姉貴一人のときに見せたくなかった。

「もし想像しないものが映つてたらショックだろ？」

軽口で『まかしながら』そつ答えると、姉貴は、奇妙に真剣な表情で尋ねた。

「それつて…鳴らしてるのが、隣の母親じゃなくて子どもの方つてこと？」

「は？」

質問の意味がわからない。

「深夜2時だぜ？子どもが起きてるわけないだろ」

否定すると、

「でも…」

と言いあぐねる。続きを促すと、姉貴はぐもつた声で呟いた。

「なんていうか…気配がね、小さいのよ。大人の大きさじゃないみたいな…」

「……」

心当たりは…あつた。軽い骨のような音の羅列は、子どもが跳ね踊つているようなリズムを刻んでいた。

俺は姉貴に向き直つて、俺の想像と不動産屋の回答を伝えた。顔をしかめて聞いていた姉貴だったが、一瞬、パッと目を見開いたあと、

「そうだ！」

と笑顔になつた。

「そういうこと知つてそうな人が近所にいるわ。95歳のお爺ちゃんなの。おそらく分けに行つたりして顔を繋いでるから、話も聞かせてくれると思う」

次の俺の休みに合わせて、その老人宅を2人で訪問することにした。

屍ヶ台 1（前書き）

この章には食人の表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さい。

順調に週末の休みが取れた俺は、この日、95歳の長老宅を訪問するために、姉貴の家を訪れた。世間一般的にも休日に当たる曜日だからだろう、いつもすれ違つてばかりの義兄あにきにも挨拶することができた。

「カイさん、久しぶり」

姉貴と同じ呼び方で馴染むと、若干、小柄な義兄は背中を丸めて、「久しぶりだね、リョウくん。君までサチの酔狂に付き合つとは思わなかつたよ」

と妙に引っかかる返事をよこした。

俺は実はこの人をよく知らない。熱心に姉貴にプロポーズしていたのは見ていたけど、姉貴はむしろ、最初は冷淡だった。カイさんの情熱にほだされたのだろうか。男の俺から見ての彼の魅力は…まあいいや。結婚した後に論じる話題でもない。

「すぐにそういう冷めたことを言つ。虐待の声を聞いたときもうだつたよね。関係ないからほつとけ、とか。カイさんは人間的に冷酷だと思う」

義兄の反応に噛み付く姉貴。義兄は軽く肩をすくめただけだった。夫婦げんかに巻き込まれるのも不毛なので、姉貴を促して早々にマンションションを出る。

入り組んだ住宅街の路地を、いくつも曲がった。

「ここらへんは古くからの居住区みたいで、道が狭いのよね」

姉貴が言った矢先に、侵入してきた車が体側ぎりぎりのところを掠めていく。マンションから見るかぎりは、一面のススキ野原に囲まれた開放的な土地だと思っていた。でも一步奥に入ると、こんなにゴミゴミとした風景になつてたんだな。

近所という触れ込みだったが、ずいぶんと歩く。

「結構遠くない、その爺さんの家？」

姉貴の生活圏から外れようとしているのを見咎めると、振り返った姉貴は笑顔を作っていた。

「だつて、うちのマンション評判悪いんだもん。近くの人はあんまり親しくしてくれないのよ」

「……何それ？」

意味がわからず問い合わせる。

姉貴の話によると、引っ越しした当初から感じている違和感があるそうだ。マンションのそばには戸建ての家屋がいくつか散在している。近所に顔を繋いだほうがいいと思った姉貴は、それらの家々に、機会があるときにに向いて交流を計つたらしい。最初はにこやかに対応してくれていた相手は、姉貴がマンション名を口にすると、急に表情を曇らせた。中には姉貴自身に距離を置く態度を見せ始めた家庭もあるようだ。

「それ、かなり重要な情報じゃねえ？ 姉貴のマンションが近隣に疎まれていろいろつてことだろ？ その原因と訪問者の件が結びつくんじやないか？」

勢い込んで言う俺に、姉貴は、

「うーん… そうかな…」

と懐疑的な返答をした。

「だつて、うちのマンション、『ゴミ出しのマナーも悪いし、不良学生が夜中に溜まつたりもするのよ。そういうことで嫌われるんじゃない？』

現実的な理由を突きつけられると、俺自身の考えも尻すぼみになる。

『幽霊屋敷』なんて遠因より『迷惑行為の横行』のほうが、近所にとつては、みっぽうに敬遠する原因になるだろつ。

両脇に立ち並ぶ家屋が、やや歴史がかつてきた。住宅地の奥は、古くから人が住み着いていたとの説明通り、5、60年は経つていて、その趣を連ねている。車が入れないぐらい細い小路。幹の黒ずん

だ路傍の柿の木。一軒一軒の敷地が広い。通り過ぎた屋敷の立派な門構えの奥には、日本庭園が覗いていた。

「爺さんの家もこんななんなの？」

ちょっと不安になってきた。親父を早くに亡くした俺たちは、金持ちの生活に縁がない。今日の服装は思いつきりカジュアルだし、それらしい話題も用意してない。

「お爺ちゃん…芳賀さんつていうんだけど、芳賀さんの家はこのへんで一番大きいよ」

構えたふうもなくそう答える姉貴の格好は、エプロンを外しただけの内着だった。

「俺、失礼に当たらない態度なんか取れないぜ？」

そんな爺さんにどうやって話しかけろつていうんだよ？ 憽していることを伝えると、姉貴は高笑いしながら、

「大丈夫よ。リョウちゃんがビビるような人に、私が話しかかれ るわけないでしょ？」

とフォローした。俺はお前のほうがよっぽど肝が座つてると思つて るよ。

瓦屋根の乗つた格子戸の門扉を開けると、姉貴は慣れた調子で、砂利の敷かれた庭先を横切つた。平屋の堂々たる日本家屋が目の前にそびえている。磨りガラスを嵌め込んだ引き戸に手をかけてから、思い直したように、すぐ横に設置されたインター ホンを鳴らした。

「いつもは挨拶してそのまま玄関に入っちゃうんだけど、今日はあんたも一緒だもんね。一応、礼儀」

人懐っこい姉貴の態度は、出迎えてくれた芳賀氏の家人の対応で納得が行つた。

「やつと来た。待つてたわよ。お爺ちゃんも朝から」機嫌だつたんだから。さ、上がって」

50前後の穏やかな雰囲気の女性が俺たちを招き入れてくれる。年代と会話からいって、芳賀の爺さんの孫つてところか。軽く会釈を

してついていく俺の前で、姉貴と女性は華やかな声を上げながら世間話を始めた。そつか。そういえば姉貴は独身時代から男女問わず人気のある性格だったな。

襖で仕切られただけの部屋が、奥に向かっていくつも並んでいる。「本当は客間に上がつていただきたかったんだけど、お爺ちゃんがどうしても自分の部屋に来てほしいっていうもんだから。『めんなさいね。こんな薄暗いところまでお通して』

女性、やはり芳賀氏の孫娘だと名乗る彼女は、俺に向かつても親しげな声をかけてくれた。

「いえ。こついう造りは珍しいので、拝見できて喜んでいます」

俺が答えると、姉貴が口を挟んだ。

「歴史に興味が有るくせに、資料館みたいなところはあんまり行かないのよね、リョウちゃんは」

そうだ。今日の俺の立場は『歴史好きで郷土の古老に史料を提供してもらつているアマチュア』だったな。

「江戸の宿場町の本陣みたいな資料館にはよく行くさ。でも、実際

に人が住んでいる家屋は貴重だろ」

そう言い訳すると、孫娘は感心したように、

「本当にそういうものが好きなのね。わたしなんか、こんな家に住んでいても、ちつともありがたさがわからないから、尊敬しちゃうわ

と言つてくれた。本当はボロが出ないように内心ヒヤヒヤしてるんだけどね。

10以上の部屋を通つた気がする。どの部屋も縁側から差し込む陽の光が、障子を通して室内に流れ込んでいた。現代家屋のようなサッパリとした明るさはないが、控えめな白い波長の光源が心地良い。

爺さんの居室は一番とつづきにあつた。孫娘が襖を開けると、そ

こだけ、障子窓のない陰気な闇が漂っている。

「こんなちは、サチさん。待つてたよ」

床の間を背にした老人が、ゆっくりとした動作で立ち上がった。背が高い。高齢を感じさせない姿勢の良さに、俺は目を奪われた。90を越えて生きる人間っていうのは、やはり、こんなふうに頑強なのかもしないな。

「こんなちは、芳賀さん。」口が話してた私の弟です。今日はお世話になりますね」

姉貴の紹介に、雰囲気に呑まれて呆けていた俺は、慌てて頭を下げた。

「涼一といいます。時間を取つていただいてどうも」
間抜けな挨拶を後悔しながら老人をちらりと見ると、無表情だった顔に笑みが差していた。

「サチさんに似て礼儀正しい弟さんだね。しかも、若いのに勉強家なんだろ? 会うのを楽しみにしていたよ」

とりあえず批判的な態度を取られなかつたことに安堵しつつ、でも姉貴の囮々しさと同列に評価されたことに対する不満を感じた俺は、「姉よりははるかに礼儀は心得ているつもりです」

と爺さんの言葉を訂正した。即座に姉貴から無言のパンチが飛んできた。

大きな座卓に出された茶と菓子を脇によけ、爺さんが古書の類を次々と積んでいく。町の郷土史。古地図。古文書。そして先代が書いていたという日記まで。

まさかマンションに現れるお化けの由来を調べたいとは言えなくて、便宜上、俺の興味と引っ掛けての来訪だったが、歴史に対して、俺はあながち無知でもない。と言つても高校の日本史レベルだが。学生時代、史跡巡りを趣味としている教師に授業を受け持つてもらえた縁で、教科書の活字でしか情報を与えられなかつた同年代よりは明るい知識を持っている。：はずだ。

「この辺りは、昔、山だつたと聞きました。それを削つて宅地にしたとか。いつ頃のことなんですか？」

尋ねると、古老は、それがつい昨日だつたかのような俊敏さで記憶を取り戻した。

「儂が生まれる数年前だから、明治の末期の頃だらう。それまで、この土地は、山というよりは小高い台地だつた」

なるほど。俺は頷いた。不動産屋の説明と一致する。今では周辺の土地との標高差はないに等しいが、山地だつた頃は、木も生えない硬い岩盤の斜面が覆う、ハゲ山、だつたそうだ。

「芳賀さんは、その明治末期の開拓以前からこの場所に住んでみえたんですか？あまり住居には向かない環境だつたと聞いていますが」踏み込んでみると、爺さんは能面のよつな無表情になり、黙つて古地図を開いた。手書きの細かい地名がびつしりと書きこまれている。『荒谷』『石神』などの文字が複数見えた。

「この辺りは粘土質で米が取れず、水はけも悪かつたから、雨が降るとよく浸水したらしい。儂らのご先祖も、他所の土地を追い出されたのでなければ、こんなところには住み着かなかつただろう」言葉の端に微かな悪意を乗せて、そう生き字引は切り出した。

そして、数百年にも及ぶここでの過酷な生活を語り出した。

屍ヶ台 2（前書き）

この章には食人の表現があります。耐性のない方は、重々、お気をつけ下さい。

明治45年7月30日。岩盤の掘削に当たつていた鉱夫たちは、その手を止めて新聞に見入つていた。『天皇崩御』の大きな見出しが一面に謳つてある。

「具合が悪いとは言われていたが……やつぱり亡くなつたんだなあ……」「明治はどうなるんだ？次の天皇は嘉仁よしひと様か」

「年号は変わるだろう。そういう決まりだ」

思い思いの話題に終止符を打ち、また鍬を振るい出す。明治天皇、睦仁むつひとが病床に倒れてから、自肃ムードの蔓延する中で仕事ができなかつた。予定よりずいぶんと遅れている。

「こんな住みにくい村を開拓してどうしようつていうんだ、お役所は？」

自然とこぼれる愚痴。硬い地面を掘つても掘つても、現れるのは岩の亀裂だけ。麓には集落があつたが、総勢で60人ほどの過疎地である。手を入れる意味はないよう思えた。

「なんでも、ここは屍体の投棄場だつたつて話だ。役所としても、そんな土地を残しておきたくないんじゃねえか」

年嵩としかさの行つた鉱夫が抑えた声で言つと、反論する者もいなかつた。

この土地に芳賀氏の一族が住み着いたのは室町時代だつたらしい。当時、芳賀氏は別の土地で地頭代を務めていた名家だつた。

地頭というのは、と爺さんが改めて説明してくれた。平安末期から室町にかけての動乱の時代、時の権力者たちは、自分たちの優位性を安定させるために、穀物の取れる土地の所有権を欲しがつた。幕府はそういう権力者たちを統率し、支配下に置くために、忠誠を誓つた大名に、それまでに各々が手に入れた土地の所有を維持する保証を行つた。つまり、絶対的な力を持つ公的機関が、曖昧だつた不動産に対して登記を行つたということだ。

土地を与えた権力者（当時の言葉で御家人と表現したらしい）の中には、自分の住居のある都から遠く離れた場所の管理を強いられる者も少なくなかった。それはそうだ。群雄割拠の中で手当たり次第に略奪してきたものなんだから。幕府が確立し、都に中央政権が集中したからといって、都合よく近場の土地とトレードするなんてわけにはいかない。そういう地方の僻地を管理するのに、本来なら、御家人自身が該当地に出向き、生活をするのがもっともシンプルな方法だった。けれど、幕府との連絡を密にする必要があったために、当人が都を離れられないケースも多かったのだ。そういう場合に、御家人は自分の親族などで構成した『管理者』を現地に赴任させた。それが『地頭』である御家人の代わりを務めた『地頭代』である。

初期の頃こそ、本領者である御家人の指示を忠実に聞いていた地頭代たちだったが、時代が下るにつれて、自身が土地の所有者であるかのような横暴ぶりを見せ始めた。年貢を納める際に本領者に申告する出来高を過少申告したり、法外な課税を小作人（実際に耕作していた百姓）に課したり。また、徴税だけでなく治安の安定に対しても権力を与えられた結果、年貢に反対する小作人たちを武力で制圧するようなことも行われたようだ。

大きな財を成し、栄華を極めた地頭代の時代が終わりを告げたのは、豊臣秀吉が行つた太閤検地によってだった。秀吉はこの制度改革で、年貢を本領者に直接納めさせるという手法を取つた。このため、中間管理職の地頭代は職を追われる羽目になる。

典型的な搾取者であつた芳賀の一族は、本領者である御家人の元にも受け入れてもらえず、管理の厳しい豊臣、徳川の支配下の中、耕作に向かない荒地への定住を余儀なくされた、とのことだつた。

「因果応報とはいえ、酷い時代だつた」

爺さんは、話を始めた時と同じような凍りついた表情を、皺だらけの顔に浮かべていた。俺は、その中に、伝えてはいけない言葉を口

にしようとする決意を感じた。犯罪を告白する前の人間は、きっと、こんなふうに無情な冷たい風貌を覗かせるんだろう。

「儂らの先祖が住み着いたこの土地には先住者がいた。樹木の恵みのないここは、常に風害と水害の脅威に晒されていたそうだ。そんなところに定住していた先住者がまともな人間たちじやないのはすぐによく知れたが、それでも先祖たちは、やつと受け入れてくれた土地を離れることができなかつた」

自らも多大な罪を犯してきた一族が共存した相手は、でも、話が進んでいくうちに、俺の想像をはるかに超えた醜怪な輩たちであることが伝わってきた。姉貴は心なしか青ざめながら、吐き気をこらえるかのように口元を覆っている。

室町時代末期。太閤検地が浸透してから数年が経つていた。国を追われたときは50人からの大所帯であつた芳賀一族は、放浪を重ねるうちに死別や逃亡を繰り返し、20人ほどに集団に目減りしていった。経過途中、盗みや追い剥ぎに走つたこともある。彼らは生きることに貪欲になつていた。

先住者はそんな芳賀一族と同じ目をしていた。地区を分けてではあるが生活を共有していくうちに、彼らのそれまでの行状が明確になる。ざつと言えば、彼らは野盗だった。戦国の乱世において大きく膨れ上がつた犯罪集団。織田信長の治世以後の駆逐で勢力を削がれてはいたが、多くの者は未だに近隣の山野に潜み、山賊を生業としていた。

気性の荒い彼らとの関係は、自然、芳賀一族の弱体化を招いた。なにせ、彼らの集落の女に誘われて手を出しただけで、問答無用の斬撃に見舞われるのだ。わずかな芋畠の占有権も、当然、彼らの物だった。芳賀一族は常に困窮していたが、彼らの悪事に加担することで、なんとか餓死者を出さずに済んでいたといつた惨状だった。

台地の上を強い風が吹き荒れる。江戸時代中期。

この集落に一人の旅人が訪れた。いや、旅人だつたものが入り込んだ。疲労から瀕死状態だった彼は、すぐに息を引き取る。集落の人間は、彼から金目の物を奪い、着物を剥ぎ、髪まで剃った。売れるものをすべて切り取られた彼の惨めな遺体は、どの家屋の敷地にも捨て置かれるのが嫌だという理由で、台地の上まで運ばれた。当時、相当の標高のあつたその場所は、秋口に取れた野菜の乾燥所になっていた。湿気が低く風の絶えない環境は、岩盤を突き抜けたほどの強さを持った野草や収穫物を、1日で干物へと変えてくれたからだ。

冬の保存食の傍らで干からびていく遺骸。遺棄当初は猪の餌にでもなるのだろうと思われたそれは、どんな運が働いたのか、捕食されることもなく、綺麗なミイラとなつていった。

真冬。集落にとつて一番辛い季節。もともと、わずかしかなかった食料の備蓄は、早い段階で底をつく。山賊稼業も思わしくない。旅人が雪深い山を避けて正規の街道を通るからだ。村の男たちは、その街道辻まで遠征する口が多くなつた。当時は、大通りとはいえ、日が暮れてからの往来はごく少数だつたそうだ。特に足並みの乱れるポイントを狙つて待ち受けければ、リスクを最小限にして成果を得ることができた。

残された女や年寄りはじつと待つしかなかつた。生まれたての赤ん坊が凍死や餓死するのも珍しいことじやない。そのために女はたくさん子どもを産んだ。現代では到底イメージできなければ、貧困の中の人間の苦みは、動物のそれと変わらなかつたようだ。

そんな中、寒風荒ぶ台地に、何か飢えを凌ぐものがないかとやつてきた先住者の一人が、臀部を切り取られた例のミイラを見咎めた。明らかに人の手による損傷。村へ下り、仲間を問い合わせたが、誰も事情を知らないといつ。先住者たちは、今度は芳賀の一族のエリアにやつてきて、同じように詰問した。子を生んだばかりの母親が、当たり前のように答える。

「ああ、食つた。食わなければ乳が出ない」

「食餓の時に、人間が同族を食つことは、たまにあつたらしい。けれど、こここの集落ではそれは禁忌だった。許せば、お互いを食い合つことになる。だが、少人数で定住せずに放浪してきた先祖には、そういう理屈がわからなかつたんだな…」

爺さんが力のない声で呟いた。

街道での強盗稼業を終え、村に戻ってきた男たちが見たのは、怯えて家に引きこもる芳賀の一族の面々と、腹を割かれて放置された母子の遺骸だった。

緊急で合議が開かれる。食人に対する強い嫌悪感を示す先住民に、芳賀が懐柔にかかる。

「儂らの先祖が治めていた土地では、時折やつて来る薬売りが、人間の肝や心の臓から作つた丸薬を売つていた。手先のできあがつたばかりの胎児を見たこともあるらしい。今も、江戸城下では、幕府がそういう物を許可していると聞く。仲間を殺して食えとは言わん。だが、行き倒れや襲撃で絶命した者を食つことは許してもらえないだろうか」

芳賀の一族の中には『生きることが価値』といつ信念が根強かつた。このような惨劇があつたとしても、時が経てば、また同じ事をする輩が出るだろう。

「そのような話は信用できん。薬売りなど、この集落には來たことがないし、話も聞いたことがない。人間が人間を食つなどと、幕府が認めるものか」

一方で先住民の懷疑心も強固だった。

「だつたら江戸へ出て確かめようではないか」

芳賀の提案に先住民も乗る。

そして、江戸に出た彼らが見聞きしたものは、処刑した罪人の肝臓が労咳（結核）の薬として高値で取引されているという事実だった。

「なぜそんな知恵をつけてしまったのかのう…」

芳賀の言い分が通つたはずなのに、爺さんは暗い表情を変えなかつた。

死体が金になると知つた先住者は、江戸市中で商いをしていた薬売りに声をかけた。集落にはたくさんの死体がある、と。それはそうだ。略奪を生業としている彼らは、他所者を殺すことを厭わない。事情を知らない薬売りは興味を示した。結局、それが買い手の第一号となつた。以降、噂を聞きつけた同業者が途切れることのない訪問を繰り返す。

集落は潤い、人々は活気づいた。台地の上には、いつも、腐らせないように戸板に並べられた遺体が、かさかさと萎んだ音を立てていたそうだ。

「明治政府が正式にそれを禁止してから、この土地は忌地として扱われるようになった。儂らの子どもの頃に、もう台地の高さは半分になつておつたが、それでもここは、屍の台地、『屍ヶ台』などと揶揄されていたよ」

老人の話が終わる。

俺は芯から冷えた自分の腕を無意識にわすつていた。…姉貴のマシンションの住所は『川根ヶ台』と言つた。

「芳賀さんの一族は、この辺りに居残つたんですね。なぜ?」

死体売りで潤沢な資金を得たはずの彼らが、忌地を出ることもなく留まつていていることに、疑問を持つ。

「儂らは罪を償つていかねばならんからな」

老人は、やつと明るい笑顔を取り戻して答えた。

「この話も次の世代に伝えていかねばならんのだが、家族でさえ聞きたがらん。まったく情けない」

サチさんと涼一くんが聞いてくれて良かつたよ、と話を振られて、俺は頭を搔いた。姉貴もバツが悪そうな顔をしている。

「あ、もう一つだけ聞いていいですか？先住民の方々は、今はこの土地には？」

芳賀一族にとつて微妙な立場だったはずの彼らの行く末が気になつた。

「大方は他所に行つたが、一部分だけ残つていて。サチさんのマンション周りに固まつてあるよ」

爺さんの説明で、俺にはすべての事象が繋がつた。

屍ヶ台 2 (後書き)

荘園制度（地頭や地頭代）や労咳の薬等の記述は、一応、史実を元にしています。ただ、この話のケースは完全にフィクションです。

屍ヶ台 3 (前書き)

『屍ヶ台』の章のラストです。

芳賀さんの邸宅を出て、また細い小路を歩き始めた俺と姉貴。頭上から降ってきた氣の早い落ち葉に、姉貴の肩がビクッと震えた。

「…んなビビるような話じやなかつたろ…」

過剰な反応を咎めながら、でも俺自身も重苦しい気分を払拭できなかつた。

「だつて…」

姉貴は苛ついた様子で、目の前の小石を蹴る。

「私のマンションの建つとこで、よりによつて食人があつたなんて…。今度から肉料理が嫌いになりそうだわ」

「ほり、その程度の認識だろ?」

どこかズレてる姉貴の感覚を笑いながら、俺は言つた。

「同じ土地とはいえ、時代が違すぎるんだよ。気にする」とじやない

「でも、江戸時代つてそんなに昔でもないのよ。たかだか…えつと何年前?」

「自分から反論しておきながら、答えを俺に求めるなよな「呆れる。子どもの頃からこいつだ。負けず嫌いの姉貴が吹っかけたトラブルを収束するのが俺。西暦換算して、差分を出す。

「2011-1868…150年ぐらいだな」

「ほり。芳賀のお爺ちゃんのお祖父さんが生きていた年代ぐらいじゃない」

「芳賀の爺さんを基準にするかあ?」

95歳の長老は、平均寿命82の日本においても特殊だと思つぞ。

「一般的なサイクルから見て、六代か七代ぐらい前の先祖の頃の話だよ。そう思えば、ものすごく昔じゃないか」

「そうね…一代前も、そろそろ記憶が薄くなつてるわ

「親父のことぐらい、覚えといてやれよ」

姉貴がボケで言つてゐると思つたが、お袋といい姉貴といい、親父に對しての姿勢は、未だに辛辣だ。本当に忘れようとしているのかもしれない。

「酒に溺れたくなる時期つてのは、あると思つからや…」手の付けられないアル中だつた親父。飲酒中に運転した車で他車を巻き込み、自身と3人の命を奪つた。残されたお袋は、被害者からも親父の親族からも、自分の身内からさえも非難されまくつて、結局、未だに精神を病んでいる。

「リョウちゃんはよく知らないから肩が持てるのよ。早死してくれたのはありがたけど、最後まで大迷惑な人だつた。大つ嫌い」まったく『記憶が薄れてはいない』様子の姉貴は、忌々しそうに吐き捨てた。

「俺は、親父についてほしかつたと思つ」」とが、たまにあるよ
ぼそつと呟くと、姉貴は、
「代わりに姉を頼りなさい」
と虚勢を張つて反り返つた。

苦笑しながら、それはもう無理だ、と内心で拒否する。まだ親父が存命だつた小学生低学年の頃、母方の親戚の家にあつた大きな柿の木の収穫を手伝う家内行事があつた。脆い幹先の実を取るのは体重の軽い子どもの仕事。でも、俺は怖がつて登らなかつた。親戚連中が揶揄する中、3つ年上で、そろそろ体も大きくなりかけて姉貴は、俺の名譽を回復するために、注意喚起も聞かずには枝に取り付いた。鮮やかなオレンジが地面に落とされたのとほぼ同時に、姉貴の体も骨折の音を響かせて落ちた。鎖骨と上腕と肋骨にヒビ。それ以来、俺は姉貴がしゃしゃり出そつになるたびに、怖気を吹つ切つて自ら行動するようにしてゐる。

「とにかくで、お爺ちゃんの話、参考になつたの？」

考え事をしながら歩いていた俺の前に、急に姉貴が立ち塞がつた。

「この土地に幽霊が出てもおかしくない日くがあるのはわかつたけ

ど、それが私の家に来る理由は、やつぱりないと思つたのよ。だとしたら、夜中のあれはお隣じやないの？」

「もちろん、俺もそれが、一番、合理的な解釈だと思つてるよ」

「そう断言しつつも、気の晴れないしこりが依然として残ることを、姉貴に伝える。

「なんて言うか…。相手が生身だとすると、しつくりこない感覚つていうのがあるんだよ。さっきの爺さんの話の、死体を並べた、つて表現を聞いたときには、これだつて思つたんだけど」

「ミイラ？ 確かに音は軽い感じだつたもんね。でも、忍び足で来てるのかかもしれないじゃない？ ゾンビの訪問よりは、私にはしつくり来るわよ」

姉貴はおどけたように肩を竦めた。

「音だけじゃないんだ」

自分の中にくすぐる警鐘を説明しあぐねて、俺は無意味に指を空回りさせた。

深夜に、ドア一枚を挟んで対峙したあの存在は、俺にひとつでは『恐怖』の対象ではなかつた。『恐怖』だつたんだ。強烈な悪意を發するそれに、体が痺れたように動かなかつた。ドアを開けて姿を見てしまえば、自分が破壊される。それぐらい、絶対的な脅威だつた。

「お前に説明してもわかんねえよ」

脳天気な顔の姉貴に悪態をつくと、

「わかるように説明できないあなたのアタマが悪いのよ」と即座に言い返された。

来た時とは逆に、入り組んだ住宅街を抜けると、突然、農村地帯のような緩やかな風景が広がつた。比較的、車通りの多い道路を挟んでの向こう側は、菜園や耕作放棄の田園が広がつてゐる。スキの群生が真昼の太陽を受けて金色に透けていた。冷たさの交じる秋風がその穂を揺らしていく。

「「」うちの賑やかな方が、芳賀一族の住処で…」

背後を振り返つて確認する俺の隣で、姉貴が反対側を指さす。

「「」うち側が先住者の居住区つてわけね。私のマンションも含めて？」

確認するので、

「当然そうだろ」

と肯定しておいた。

「だったら、先住者同士で、もつと仲良くしてくれればいいのに古い家屋の庭先に、腰の曲がった老婆が立っている。こちらが会釈をすると、礼儀程度には反応が帰つてきたが、すぐに目を逸らされた。

「自分たちが虜げてきた芳賀さんたちが、すぐ目の前で繁栄しているんだ。先住者同士が繋がれば、芳賀さんたちを刺激するとでも思つてるんじゃないの？」

俺は自分の至つた結論を姉貴に話した。

明治以降の近代に入り、屍ヶ台の人々は、それまでの行為を非難される立場になつた。今でこそ芳賀の爺さんは『償い』を口にするが、当初は、そんな余裕はなかつただろう。人殺し、人食いと蔑まれた彼らが、その非難から逃れようとするとには、お互に罪をなすりつけ合う必要があつたのではないか。

初期に力を持つていたのは先住者の方だったのかもしれない。だから、集落で温存していた資金を持ち出して、他所に移ることができた。その波に乗れなかつた芳賀氏は留まることを余儀なくされる。そのうちに先住者の数が少なくなつてくる。居残つたのが先住者の中でも力のない家庭だつたのも容易に想像できる。そうなれば立場の逆転が起こるのは必然だ。

芳賀氏の台頭。それに対しての先住者の弱体化。開拓地の中で大きく敷地を広げる芳賀氏の横で、細々と田畠を営む先住者たちが、芳賀氏の視線を現在まで気にして暮らしてはいたとしても、俺はそれ

ほど不思議には思わない。田舎には往々にしてある現象だ。

芳賀の爺さんが、この土地の歴史を広めようとしていることにも、関連があるのかもしれないな。実際の爺さんの話は、芳賀氏にも先住者にも偏らない、かなり中立な立場を取っていた。けれど、周囲はそう見ないだろう。芳賀氏によつて継承された事実が、芳賀氏に有利な内容に傾いていると見るのが普通だ。一方的に悪にされると思い込んだ先住者たちが、ますます萎縮してしまつのは、仕方がないことだと思う。

そうなると、芳賀の爺さんと交流を持つ姉貴は、自分で思つてゐる以上に、この地区で孤立してゐるのかもな。芳賀の爺さんから、いろいろ吹き込まれてゐると誤解されて……。

「なあ姉貴……、カイさんつて……頼りになるの？」

夜中の訪問者の件だけじゃない。こうこうしがらみの強い土地で、姉貴のように社交的に暮らしていくには、家族の支えが必要だらうと思つた。

「カイさん？」

突然の話題転換に戸惑つたような姉貴は、すぐに苦笑して首を振つた。

「……よくわからない。虐待の声が聞こえ始めてから、ずっと相談はしているのだけど、自分には関係ないだらう的な反応ばかりで……」
表情を曇らせて、視線を落とす。

「結婚前は、あんなに精力的だったのになあ」
変貌ぶりが、俺にとつても腹立たしかつた。

「カイさんにとっては、私を手に入れることが一番の目的だつたみたいよ。ほら、私つて意外に誰にでも好かれるじゃない？そういう相手と結婚したら優越感に浸れるんでしょう」

茶化しながら、でも寂しそうな本音を、姉貴は覗かせた。

「うちに戻つてくれば、と言いかけて、やめる。

「また泊まりに来てやるよ。カイさんがいなきに連絡くれ」
言外に義兄への嫌悪感を滲ませて言うと、姉貴は明るい顔になつて、

「ありがとう。あんまり何度もリョウちゃんを使うのもなあ…と思つてたけど、そつ言つてくれるなら遠慮なく」

と笑つた。

「いいよ。ヒマだし」

普通に忙しい毎日だったが、なんだか俺も依怙地になつた。体たらくな義兄と同列に成り下がりたくない。

姉貴の失踪 1（前書き）

この章は5000文字を超えてます。短気な方はお気をつけ下さい。

翌日勤田に会社に出向くと、いつものように先輩が先に出社していた。今度は俺のほうから挨拶して、にじり寄る。

「おはようございます。アレって解析できました?」

先輩はパソコンの画面を睨みながら、言葉だけ返した。

「おう。できたが、あんまり効果なかつたな。暗いのはどうしようもないぜ」

「まあ、仕方ないですね」

俺は礼を言つて、忙しそうな先輩から離れた。実は、姉貴の家に取り付けた監視カメラの映像、ビデオを、彼に預けてあった。

というのも、生憎、監視を始めたその夜から廊下の常夜灯が切れてしまい、映像には暗闇しか映つてなかつたからだ。

「こんなタイミングで明かりが切れるのが厭らしいな」

姉貴と2人で、そう零したが、マンションの共用廊下の備品では、ありがちなことなのかもしれない。安物の解像度しか持たない白黒画面は、時折、目障りなノイズが走るぐらいの変化しか捉えていたかった。

その話をすると、先輩が、

「俺、映像解析ソフトを持つてるぞ。ビデオをハードに落とし込んで、解析してみてやろうか?」

と提案してくれた。喜んで預けたのが5日前だ。

自分の席につき、仕事の段取りを準備し始めていると、一段落つけた様子の先輩が話しかけてきた。

「そつちの状況はどうなんだ?長老から面白い話は聞けたのか?」

「うん。かなり手応えのあるのを」

先輩には逐一の報告がしてある。芳賀の爺さんの話を搔い摘もうとしたとき、入口が開いて、彩ちゃんが顔を出した。

「おはようございます。今日は寒いですね」

まだ10月の内だというのにコートを着込んで、手袋までしていた。

「寒がりなんだ？」

と聞くと、

「はい。冬は苦手」

と、ピンクに染めた頬を緩ませて、微笑んだ。こんな女の子の前で食人の話はできないよなあ。先輩に目配せし、話題をいつたん打ち切ることにする。

昼休憩時、彩ちゃんを連れて外に出た。先輩は奥さんの手弁当だし、事務所を空にするわけにはいかないんで、1人で居残つてもらつていて。だいたいはこのパターンで、俺は彼女とのプライベートな時間を楽しんでいた。

4つ年下の彩ちゃんが今年の4月に配属されたとき、人手不足の事務所で先輩と陰気な顔を付き合わせる毎日を送っていた俺は、彼女をどう扱つていいかわからず、最初は会話を避けてすらいた。女に免疫がなかつたわけじゃない。特に、口うるさかつたり、ウツ気味で気遣いが必要なタイプには、身内柄、精通していたと思う。彩ちゃんは、むしろそういう要素のまったくない娘で、明るくて賢いし、優しいし、可愛いしで、完璧すぎて馴染めなかつた。そんな俺に、警戒心のない彼女から積極的に近づいてくれて、仕事を通し、良好関係を構築していった。

…恋人とかいるのかな…。ものすごく気になつてはいるが、聞いて肯定されるのもショックなので、未だにその課題には手をつけないでいる。

昼食には事務所のそばの喫茶店を選んだ。ここは窓が大きくて、太陽の熱がよく入る。少し眩しいけど、窓際の席を取つた。まだ暖房のかかる季節じゃない。寒がりの彼女にとつて居心地の良い場所が、ここしか思いつかなかつたんだ。

「水嶋センパイって、神様とか宗教とかに興味あるんですか？」
着座してすぐ、彩ちゃんはそんな質問を投げてきた。

「え？ なんで？」

彼女とその手の会話をした覚えのない俺は、記憶を辿りながら聞き返した。

「なんとなくです。ほら、お姉さんのマンションの話のとき、すぐに『幽霊』とかって発想してたでしょ？ 神秘的なものに興味があるのかなと思つて」

大きな瞳を輝かせながら、彩ちゃんは付け足す。

俺は少し考え込んだ。『神秘』とか『空想』とかは、興味の範疇じゃない。むしろ現実的な理屈を大事にする方だ。

「幽霊だと思ったのは、人間と仮定するには無理があつたからだよ。普段は、そういう『都合主義』な発想はしないよ」
そう伝えると、明らかに彼女は不満そうな顔をした。

「そつなんだ……」

「？」

「どうこう答えが望みだつたのかな……？」

注文を済ませた後も、質問は続く。

「神社とかに行くのも……嫌い？」

ねだるように言われると、なんだか無碍^{むげ}にするのも可哀想な気がしてきただ。

「そういうのは神秘とはまた別の話。寺なんかにはわりと立ち寄るよ。土地の由来を調べるのが好きなんだ」

寺社は初期の頃から人間の生活圏に置かれることが多い。だから、創建時の謂れなんかを調べると、思わぬ歴史を知つたりする。でも、彩ちゃんは、

「お寺じやなくて、神社、です」

と依怙地にこだわつた。…意図がよくわからない。

「何かの宗教に興味があるか、つてことを聞いてんの？」

強引にでも思い当たるのは、彼女がある種の信仰にハマつていて、その話をしたがつてているのかということだった。

「う……その……、そういうの、嫌いだつたり……します……？」

言いにくそうにテーブルに視線を落とす様は、図星だと見ていいんだろう。

…彩ちゃんが宗教かあ…。そういえば、彼女の誠実な性格とか、他人との関わりの深さなんか、ちょっと特殊な気もするな…。

「嫌いってほど、よくは知らない。ただ、少し警戒は持つてる」俺は正直に答えた。新興宗教の脅威は見聞きしている。彩ちゃんがその類いの宗教に心頭していたとしても、同調する気にはなれなかつた。ただ、彼女の成り立ちを見ると、全否定する気は起こらない。だから、

「彩ちゃんが好きなものを非難する気はないよ。今の君から変わってほしくはないからさ」

とフォローを入れておいた。

「そういうことじや…」

まだ彼女は納得しない。なんだろう。もっと積極的に勧誘されたほうが良かつたかな？

うううだと煮え切らない咳きを繰り返す彩ちゃんの前に、ランチメニューが運ばれてきた。華奢な体のわりに大食いの彼女は、「えつと…今はいいです。今度、また続きに付き合つてください」と表情を一変させて、嬉しそうに箸を握つた。

まだ続くのか、この話題は。……ま、でも、見てて面白いから、いつか。

事務所に戻り、午後の仕事を手早く済ませて定時を待つた。先輩は解析済みの映像を持参してきていた。彩ちゃんの退社を待つて、再生する約束になつていてる。

簡単に説明してもらつたところによると、ビデオには、はつきりとした『異変』は映つていなかつたようだ。録画したのは、姉貴が就寝する23時から朝までの7時間ほど。問題の時間も稼働していはずなんだけどな…。インターホンは鳴つたのかと姉貴に確認したら、

「鳴ったと思つたけど、こここのところ神経質になつてて、昼間でも幻聴が聞こえるのよ。だから、確信はできない」と答えられた。精神的に参つてきてるんだろうか…。

「お疲れさまでしたあ

と、にこやかに帰る彩ちゃんを見送つて、先輩を急かした。事務所にある37インチのテレビにPCからケーブルを繋ぎ、

「7時間は付き合つてられないから、先に送るぞ」と2時間ほど再生をすつ飛ばす。午前1時頃の映像が大写しになつた。

「何も見えないですな」

思つていた以上に闇の濃い処理画像に、少し、がつかりする。

「室内灯を消すか。そのほうが目が慣れる」

先輩は立ち上がり、入口横にあるスイッチをフル消灯した。

音のない黒い画面が延々と流れしていく。監視カメラにはマイクがついていない。時折、白い帯が現れて画面が揺れた。その時だけ、わずかに背景の固体物が浮き上がる。

「アナログのノイズ除去は難しいな。プロックノイズならある程度は行けたんだが」

言い訳する先輩が咥えた煙草の火が、暗い室内に火の玉のように浮いていた。

「プロックノイズ?」

聞き返すと、

「モザイク」

と返つてくる。

「普段、何のビデオを解析してんだよ?」

つっこむと、

「そういう指摘を受けるから、彩つぴを先に帰したんだろうが」と低い笑い声が響いた。

30分ほどが何の変化もなく過ぎた。確かに、目の慣れのせいか、

背景が認識できるようになつた。玄関ドアの上部に取り付けたカメラは、向かい側の高さ1・5メートルほどのコンクリート塀に向いている。塀の上辺が、真っ直ぐな横線となつて、画面の中央を切り裂いていた。

「何か動きましたね」

塀の向こう側の風景に当たる闇の中で、俺は、手招きのよつた仕草を見せる物体を見つけた。

「でも、人間の動きじゃないよくな…」

それは単調な動作を繰り返す。前に倒れ、後ろに倒れ、また前に戻る。

先輩は黙つたままだ。

俺はまた注視を再開した。白っぽい色をした、本当に、ちょうど人間の掌ぐらいの大きさだつた。他のパーツは見えない。塀の向こうに、によきつと腕だけ出している。そんな印象だつた。何だらう

…。

「…最初に、うちの妻が気づいた。それ、ススキじやねえか?」

先輩が奇妙に抑えた声で指摘した。

「ああ、なるほど」

俺も納得した。マンションの周囲、特に共用廊下の面する裏手は一面のススキ野原だ。そうやって見ると、何の不思議な光景でもなかつた。

「疑心暗鬼で見ると、それらしく見えるもんだな。正に『正体見た
り枯れ尾花』だ」

自分の網膜がいかに信用に値しないかを知つて、苦笑する。

「案外、インターホンが鳴つたのだつて、風で何かが当たつていたのかもしれない」

ビデオに映る深夜の時間帯が、ススキの穂を揺らすほどの風を伴つてゐるのだと知つて、そつこじつけることにも成功した。

先輩は黙つたままだ。

俺の導いた答えに不満を持っているのがありありと感じられた。

でも、他にどんな解釈があるだろう。何かを見落としているか、俺？

「お前のお姉さんの部屋、マンションの高層階じゃなかつたか？」

意味ありげな声音で聞かれて、俺は、暗室の中、首を縦に振つた。

「そうです。3階にある」

高層といつほどではないが、あのマンションの最上階に位置する部屋だつた。質問の真意を掴もうと先輩を見返ると、テレビ画面からの僅かな反射に映えた黒い顔が、無言で顎をしゃくる。

「もういつべん、しつかり画像を確認してみる。お前がおかしいと思わないんなら、それでいい」

「……」

少し巻き戻し、言われたとおり、もう一度、テレビを凝視する。黒い画面の中央やや上部寄りに、コンクリート塀の上辺が映つている。コンクリート塀が真つ黒な障壁となつていて向こう側、マンションの敷地の外に当たる場所で、白っぽい植物の穂先が、よく見ると大量に揺れている。

「…遠近感がちょっとおかしいですね」

本来なら、3階から地面に生えたススキを見ているのだから、もつと小さく感じてもいいはずだ。

「でも、ここまで暗い動画だと、おかしいとも言い切れないな。脳が勝手に錯覚してるのかもしれないし」

自分の感覚に、自分で反論してみる。と同時に、田のあるうちに見た姉貴の玄関先の光景を反芻した。3階から見下ろした場所にススキの原は見えていたか。…見えていた、と思う。

「もつとはつきりとした…例えば、いるはずのない子どもがいたとか、骸骨やミイラが立つていたとかいう証拠が出てほしかつたんだけど」

理想を呟くと、先輩が、やつと自分の意見を口に出した。

「俺も奥さんも、その遠近感には引っかかりを覚えたよ。でも、俺たちは現場に行つたことがねえからな。お前がそれほど違和感を感じないんなら、大したことでもないんだろ？」

「違和感を感じたとしても状況の説明ができませんよ。姉貴の部屋がススキの原っぱの真ん中にワープしたとでも思つたんですか？」俺は笑つて、先輩の疑問を杞憂とした。

そのとき、いきなり事務所の入口あたりから、第三者の声が聞こえてきた。

「あの…何やつてるんですか…？」

入口脇のスイッチに手をかけたまま、点灯をためらつていたのは、もう30分以上も前に帰つたはずの彩ちゃんだった。俺は、反射的にテレビを消した。

「なんだ、まだいたのか」

先輩も所在無げに腰を浮かしてから、彩ちゃんにスイッチを入れるように指示する。

明かりがついた。蛍光灯のちらついた光線が目に染みる。彩ちゃんが近づいてきて、俺の隣に放つてあつたビデオの空パッケージを持ち上げた。

「これ、なあに？仕事のビデオ？」

どうやら、俺と先輩で勉強会を開いていたと勘違いようだ。向上心の強い彼女は、新人だからと、残業を免除したり、講習から外したりすると、逆にいじける。

「違うよ。いたつてプライベートなもん」

俺がやんわりとパッケージを取り上げると、猜疑心の拭えない視線で見返された。

「男同士の鑑賞会つていやあ、わかるだろ？」お前も見たいのか？」

先輩が迷惑なほど絶妙なフォローをしてくれたお陰で、

「いえ、いい、いらない」

彩ちゃんは真っ赤になりながら、俺たちから距離を取つた。…「…」やつて評価が墮落していくんだろうな、俺…。

「んで、なんで戻ってきたんだよ？忘れ物か？」

俺がデッキからビデオを取り出している間も、それと平行して先輩が2本目の煙草に火をつけている間も、彩ちゃんは、少し離れたところに佇んで、特に何をする気配もなかつた。

「忘れ物じゃなくて…その…水嶋センパイを待つてたんです…」

縮こまつたような仕草を見せながらそつ答える彼女に。

俺の思考は停止した。

代わりに、先輩がニヤつきながら背中を叩く。

「良かつたなあ、ミズシマくん。彩っぴが『君と2人で』帰りたいつてさ」

「え、べ、別に約束してたわけじゃ…」

慌てて言い訳しかけたが、でも考えてみれば、約束もないのに待つてくれた彩ちゃんの心情は、充分に喜んでいいものだと思い直す。

「…ちょっと待つて。すぐ支度するから」

自分のパソコンの電源を落としながらそう伝えると、ウインドウの落ちていく画面の中に、弾けた笑顔で頷く彩ちゃんが映つた。

親父が他人を殺したと聞いたとき、俺は、俺にはもう誰かに好かれる資格なんかないんだと覚悟した。今まで、他人の好意に触れる機会が皆無だつたわけじゃない。でも自分からそれを拒絶した。関わることで、周囲に親父の罪が知れるのが怖かつた。非難され続けて、だんだんと狂つていつたお袋のようになるのが怖かつたんだ。それなのに、…何故だろうな…、彩ちゃんだけには、その冷え固まつたガードを解くことができる。信頼、というのは、こういう感情のことだろうか。なかなか心地良い。

「お待ちどう。行こうか」

抑えてはみたが、どうしても浮かれる声で、俺は彩ちゃんの横に並んだ。先輩に挨拶したかったが、直前にかかってきた電話が深刻そうな様子なので、ジェスチャーだけ見せて帰ろうとする。

「待て！…水嶋、お前に電話…」

突然、先輩が声を荒らげた。険しい表情で受話器を突き出す。

「え？」

戸惑うと、

「お袋さんから」

と補足が入る。それから、こう付け足した。

「お姉さんが、隣人を刺したらしい」

意味が頭に入つて来なかつた。

姉貴の失踪 2（前書き）

この章には警察の調査の場面が出てきます。経験者はお気をつけ下さい。

「水嶋センパイ、前…」

助手席からの控えめな声で、俺は急ブレーキをかけた。田の前に赤く点灯している信号がある。辛うじて、停止線の手前で車を停められたようだ。

「ごめん、考え方してた」

シートベルトを握りしめて心配そうに見ている彩ちゃんに謝ると、

彼女は微かに微笑んで、

「一緒に来てよかつた」

と囁いた。

お袋の話は、お袋自身も事実を飲み込んでいないみたいで、よく要領を得なかつた。俺に電話する、つい10分ほど前に警察から電話があつたこと。その警察から、姉貴の隣人が腹部を刺されて重症で見つかり、姉貴に容疑がかかっていると教えられたこと。姉貴の家の電話に連絡がつかないこと。そんな断片的なことを早口でまくし立てられた。

姉貴が他人を傷つけるというのが、まず信じられなかつたが、トラブルの件もある。口論の弾みでそんな事態に発展したと予想するのは、無理ではなかつた。

ちらつと車内の時計を確認する。7時を回つたところだった。力イさんは…まだ会社だろうか。あれだけ取り乱していたお袋が、力イさんにまで連絡を取つているはずはないだろうな。

「彩ちゃん、ごめん。俺の携帯、荷物の中から出してくれる?」

「あ、はい」

後部座席に手を伸ばしてカバンをたぐり寄せている彩ちゃんの安全を、少しスピードを落として囁きながら、俺はせり上がりてくる焦りを圧し殺した。落ち着こう。大丈夫。姉貴が傷害を犯したとして

も、背景には刺した相手に不利な事情がある。大丈夫。姉貴の立場は守つてやれる。

「携帯出しました。あの、ダイヤルしましょつか？」

彩ちゃんが俺の携帯を抱きながら聞いてきた。

「ありがとう…。それじゃあ、『ごめんだけど、自宅にかけてくれる？お袋と話がしたいんだ』

彼女を使うのは申し訳なかつたが、注意力が散漫な今の俺が携帯操作まですれば、さらに余計な心配や迷惑をかけかねない。

「はい。わかりました」

彩ちゃんは遠慮がちにアドレス帳を開いて、通話ボタンを押したようだ。

「…繋がらない」

ホール音が俺の耳まで届いていた。30秒は鳴らしている。自宅の固定電話は、子機がお袋の部屋に置いてある。気づかないわけはなかつた。

「お母さん、もしかして警察のほうに？」

「かもな」

彩ちゃんの推測は当たつている気がした。

入れ替わりに俺の携帯に電話がかかってきた。

「前川さんです」

彩ちゃんが先輩の名前を着信表示に見る。

「出でてくれる？」

頼むと、頷いて内容を仲介してくれた。つい今しがた、会社にお袋から電話があつたこと。お袋は、警察から呼び出されて、刺された隣人が運ばれた総合病院に向かっているとのこと。

「なんで直接水嶋センパイの携帯電話に連絡しないんだろう、って前川さん、言つてます」

もつともな先輩の疑問を伝える彩ちゃんに、俺は頭を搔いて答えた。

「あの人、長い数字を、覚えたり、打つたりすることができないん

だよ。だから局番の短い固定電話回士で話したがるんだ」

「そうなんですか。じゃあ、前川さんには、お母さんと会話するまで会社にいてもらひたほうがいいですね」

てきぱきと先輩にまで指示を飛ばしてくれる彩ちゃん。心底ありが

たく思いながら、甘えついでに愚痴まで聞かせちまつた。

「お袋、中度の鬱病なんだ。だから、こんなふつに、普通の人間にできることができなかつたりするんだよ」

「ごめんな、と付け加えると。

彼女は、しばらく無言で前方を見据えた後、俺に軽くもたれかかってきた。

「水嶋センパイ、謝つてばっかり。なんにもセンパイのせいじゃないのに」

「……」

「……」

「……」

総合病院に進路を変更する。会社と病院が同じ街中にあるため、自宅に帰るよりはだいぶ早い到着になった。

一般診療の時間が終わつた病院は、正規の玄関が閉められ、救急搬入口と隣り合わせた夜間診療口に動きが集まつてゐる。受付で事情を説明すると、救急搬入口のほうに回れと指示された。搬入口すぐの処置室に警察が待機しているらしい。

赤いランプが照らす、妙に薄暗い入り口を入れると、廊下の長椅子に見知つた顔が座つてゐた。カイさんだつた。

「来てたんだ。なあ、どうなつてんの？」

今まで連絡の一つも寄越さなかつた氣の利かない義兄に苛つきながら、俺はカイさんに詰め寄つた。彼はぼんやりと濁つた顔を上げて、皮肉つぽいセリフを返す。

「サチが傷害事件を起こしたんだよ。聞いてないの？」

「聞いたよ。それはわかつてゐる。どうしてこんな状況になつたか聞いてんだよ

嫌味なんか言える立場じゃないだろ、と、内心、憤慨した。カイさんがもつと親身に姉貴の相談に乗つてやつていたら、こんな事件は起こらなかつたんじやないかと思えたから。

「サチが勝手なことしたんだよ。だから言つただろ。他人なんかに関わるなつて。隣がどんなことしていようが、うちには関係ないじゃないか」

カイさんの吐き捨てるよつた言葉。俺は、わざと乱暴な音を立てて、義兄の隣に腰を落とした。

「姉貴は間違つたことはしていない。俺には、あんたのほつが、よっぽど、みつともない人間に見える」

率直に感情をぶつけると、カイさんは声を2トーンぐらじ上げながら、

「犯罪者のくせに偉そつに言つなよー。」と喚いた。

俺に對して言つたセリフではないと思つ。俺は犯罪者じゃないから。だから余計に許せなかつた。姉貴を、あれだけ執着して妻にした女を、簡単に断罪するカイさんが。

「あんた、肩だな」

言いたいことが多すぎて、それだけしか言えなかつた。

「お前らのほうが肩だ」

義兄はそう呟いて顔を覆つた。

カイさんと話しても埒が明かないでの、早々に座を辞して処置室に向かつ。

後ろからついてきた彩ちゃんが、ためらいがちに俺の腕にまとわりついて、心配そうに覗き込んだ。

「センパイ、大丈夫？ いつもと違う…」

…いつも…いつもは、俺、どんな態度を取つてたんだっけ？ それすらも思い出せない。駄目だな。冷静なつもりだけど、頭に相当、血が上つてゐる。

「義兄とは、普段から仲が良くないんだ」

特別にカイさんと仲違いしていたわけじゃないが、そう言い訳する。

「その…彩ちゃんには、変なところを見せて…悪い」

無関係な彼女に対して、申し訳なく思つ。恐縮して彩ちゃんの表情を伺うと、彼女は目を細めて、

「また謝る。そういうの、要らないですよ」

と笑つた。感謝より罪悪感で胸が痛くなつて、俺は彼女の頭を、やや乱暴に撫で回した。

「謝るぐらー、させてくれ」

そう頼むと、彩ちゃんは、びっくりしたような顔をした。

「だからセンパイは…」

と何かを言いかけたが、結局、続きを言わず、黙つて、頭に乗せている俺の手を強く握り返した。

小さなプレートを掲げただけの殺風景なドアをノックすると、中から若い看護師の女性が顔を出した。

「すみません、警察の人は…？」

事情を聞くだけだ。そう思つていても、警察とコンタクトを取る羽目になつたことに、内心、怖氣づく。…我ながら情けないな。

「警察の方なら、もう被害者に連れ添つてICUに行かれましたよ」看護師は答えて、2階の奥にあるという集中治療室の場所を丁寧に教えてくれた。礼を言つて場を離れようとしたとき、処置室の中から、かすかな雑談の声が聞こえてきた。

「どつち？加害者の身内？被害者の身内？」

「加害者っぽいわよ。さつき、廊下で言い争いをしてたつて。やっぱり身内もそういうタイプなのね」

… 事実だから、そう認識されても仕方がない。でも…なんだか…。必要以上の悪意が周囲を締めつけてきているように感じじる…。

1階には夜間外来の患者の姿も見られたが、2階に上ると、冷たい廊下の先にも後にも人影はなくなつた。

「あ、そういうえば」

唐突に彩ちゃんが寒がりだつたことを思い出した。と同時に、俺は自分の上着を脱いで、彼女に渡していた。

「冷える前に着ておいて」

自分が笑顔を維持しているのが自覚できる。彩ちゃんは、また驚いたような表情をしたが、すぐに、

「ありがとう」

と受け取つて、それを羽織つた。

「…センパイ、大丈夫？」

せつきの質問を繰り返す彼女に、機械的に、

「うん。大丈夫」

と繰り返す。いや、本当に大丈夫だ。まだ、彩ちゃんに配慮するぐらいの余裕はある。

複雑な造りの建物を、案内されたとおりに進んでいくと、急に光量を落とした一角に出た。壁沿いにいくつか部屋が並ぶ。磨りガラスをはじめ込んだドアから光が漏れる部屋があった。案内プレートを見ると『親族控室1』。目を転じると、廊下の先には右側に曲がる大きな角があつた。『ICの先IC』と、手書きの注意書きが貼らされている。

「警察もICにまではついていかないだろ? だから、ICの辺にいるんじやないかな」

『親族控室1』の前を未練がましく通り過ぎた俺は、角を曲がつてからも、そこに関係者が溜まつているんじやないかと、人の気配を探した。けれど、『集中治療室 (Intensive Care Unit)』と表記された看板が掲げられた、じつい自動ドアの前には、誰の姿もなかつた。

「インター ホンで聞いてみますね」

彩ちゃんが自動ドアの脇にある送信機に走り寄る。気を使ってくれているのが、ありありとわかつた。喉に詰まるような重苦しい空気が、そんな行為1つで薄れていく。

彩ちゃんがいてくれて、よかつた。カイさんは、すでに俺たちの味方ではなくなっている。お袋には、もともと力がない。頼みの綱だつた姉貴が当事者として身動きが取れない今、俺が放棄できる分担は1つもない。深呼吸をして、何度も、大丈夫、の言葉を飲み下す。平気だ。俺が危惧しているのは最悪の事態だから。姉貴の正当性が認められずに懲役に課せられて、自己防衛のためにお袋まで姉貴を見捨てて、なんて結果にはならない。いや、しない。

彩ちゃんが、応答してきた病院関係者と会話を始めた。その瞬間、親族控室のほうから、つんざくような悲鳴が聞こえた。お袋の声だつた。

叫び声が断続的に続く。俺は急いで控え室まで戻り、ドアノブを握った。開閉までのわずかな躊躇の時間に、室内からは別の怒号が響いた。

「キチガイの言い訳なんか誰も聞いてないんだよっー・せりたとミナミを返せっ！！」

女の声、それも、お袋と同年代ぐらいに思える。お袋の泣き声が大きくなつた。俺は反射的に部屋に飛び込んでいた。

中には、応接テーブルにもたれて床に崩れているお袋がいた。その横に仁王立ちしている、ガリガリに痩せた茶髪の女が、憎々しげな表情を露わにしてお袋を見下ろしていた。女を抑えるように腕を取っているスース姿の若い男は警官だろうか。他にも、制服を着込んだ巡査が1人、ドアのすぐ脇に待機していた。

巡査が俺のプライベートエリアに踏み込んできて、厳しい声で質問した。

「君は？関係者か？」

「そうです。そこの……」

俺はお袋を指さした。

「泣いているのは、俺の母親です」

自分の親の醜態を言葉に出すのは、かなり気分が悪い。しかも警官

の態度は威圧的だ。不快さから逃れるために離れようとするとき、彼はさらに距離を縮めてきた。犯罪者を逃すまいとしているような態度だった。

「…姉が大変なことをしてしまったようで、すみません」
俺は、警官の態度を緩和させるべく、そう謝った。司法に曇みついてもいい結果にはならないだろう。

「弟さんかね。事情は聞いていると思うが、飯塚幸子には傷害容疑がかかるつている。被害者は重症で意識不明だ。場合によつては、罪状は殺人未遂に」

けれど俺の思惑は外れて、警官は畳み掛けるように責め立ててきた。スーツ姿のほうが、

「高見さん、そのへんと
と歯止めをかけると、舌打ちをして離れていく。

まだ。さつきの処置室の奥にいた看護師たちの会話が重なる。なぜ、こんなに誰からも敵視されるんだ？

動揺を抑えて、お袋に近寄った。お袋は顔を上げることもなく、ヒヒヒヒと掠れた声を床に向かって吐いている。背中をさすつて体を起こさせ、俺は、未だに憎悪の色を浮かべる60代ぐらいの女に向き直つた。

「飯塚幸子…加害者の弟です。あなたは？」

予想はついたが確認してみる。女は応えず、横柄な態度で向かい側のソファに腰を沈めた。スーツの警官が間を取り成す。

「被害者のお母さんです。事情を聞くために、関係者を同室に集めてしましました。すみません」

頭を下げる、俺より若干、歳若い彼に、俺も謝罪を返した。

「いえ。お世話をかけたのはこちらですから」

お互い、冷静に話ができる相手だと認め合えた俺たちは、警戒を解いて会話を進めた。

「家族の方にも調書作成のご協力を願いたいんですが、よろしいですか？」

「わかりました。ただ」

「俺は頷いて、それから、お袋を田で示した。

「母は精神を病んでいます。できれば別室で休ませてやりたいんですけど」

「そうでしたか。それは本当に申し訳なかつた。すぐ手配します」
警官は制服の巡査にその顔を指示した。すぐに看護師が来て、弱つて歩けなくなつていてお袋を抱えていつてくれた。

調書というから、姉貴の家族構成や生い立ちなどを、俺の視点で聞かれるのかと思つたら、警官…栄生さんは、姉貴の現在の友人関係などに踏み込んできた。

「よく遊びに行かれる友だちとか親戚とかのお話を聞いていませんか？」

「親戚は疎遠になつていて、姉貴が立ち寄るような相手は思いつきません。友人は…結婚してから、それまでの関係のほとんどが消えてしまつたと、以前、言つてました」

カイさんがヤキモチを焼くから家庭外の人間とはあまり交流できない、と、姉貴は笑つていた。聞いたときは惚氣の一種かと思つたけど、こうなつてみると、むしろ呪縛だつたんだなと同情する。

「唯一の心当たりは、同じ町内に住むお爺さんですが…遊びに行く相手というよりは近所付き合いの域を出ていないように、俺には思えています」

芳賀さんのことも、念のために伝えておいた。栄生さんの疑惑がわからぬからだ。

「お爺さんですか…。他に…例えば、男性の知り合いなどに心当たりはありませんか？」

具体的になつてきた栄生さんの疑惑に、俺は不当なものを覚えて、語氣を強くした。

「今回ることは、以前からあつた隣人トラブルが発展しただけのものです。隣人…姉が刺してしまつた相手は、普段から自分の子ども

を虐待していたようでした。姉はそれを苦にして、いろいろと手を尽くしていたんで、被害者も、きっと姉に対してもいい感情を持つていなかつたんだと…」

俺は栄生さんと、それから、向かい側で目を光らせている被害者の母親に向かつて訴えた。けれど言い切る前に、母親の激しい反論を浴びせられる羽目になる。

「うちの娘が虐待なんかするわけないだろつーお前んとこのキチガイが毎日毎日嫌がらせをしてきたんじやないか！！」

「虐待は事実です。学校にも相談しています。民生委員も訪問したとか。学校のほうに問い合わせてもらえばわかります」

俺は、今度は栄生さんだけに向かつて説明した。この母親には、きっと何も通じない。

「確認しておきましょー」

栄生さんは請け負つたが、あまり重要視はしていなかった。

「お姉さんが被害者の間部まなべさんと諍さわぎつ原因は、以前からあつたといふことですね」

そう言いながら、パサパサの髪を搔き上げる老女に視線を送る。味方を得るどころか、むしろ揚げ足を取られたような流れになつて、俺は絶句した。

「…なんだろう、この不条理なシナリオは。姉貴は善意から…、と、恐らく、子どもに対する保護欲から、こんな厄介な隣人と関わることになつた。事情としては、それでいいはずだ。目の前の凶暴な『母親』に是があるとでも言いたいのだろうか。

「…姉は他人に簡単に手を上げるような性格ではあります」
「…フオローしていいのかわからなくなつて、俺は、今回のことが『事故』に近い行為であることを、改めて強調した。

「被害者…間部さん、ですか？彼女はどういう状況で刺されたんでしょ？姉に一方的な非があるような状態だつたんですか？」
確認すると、栄生さんは、少し顔を曇らせて、答えた。

「飯塚幸子さんの旦那さんから、何も聞いていませんか？」

「いえ、何も…」

カイさんがその辺りを知っていたのか。でも、さつき廊下であった彼には、そんな説明をする素振りはなかつた。

「そうですか」

栄生さんは溜息をつくと、

「ちょっと外へ出ましょうか」

と老女の不信に満ちた視線から逃れる場所へと、俺を誘つた。

暗い空間を、来た時とは逆の方向に戻つていった。相変わらず廊下は無人だ。白い無機質な蛍光管からの光が、長い道先を照らしている。空調が最小限に抑えられていて、俺にとつても寒く感じた。彩ちゃんを先に帰してやればよかつたな。そんな考えが頭を掠める。彼女は、今、お袋に付き添つてくれているはずだ。

栄生さんは、途中にある、すでに照明の落とされた休憩室に入り、奥の席を俺に勧めた。それから自分は長テーブルを挟んだ向かい側に座る。

「正確に言えば、お姉さんが間部さんを刺した現場は、誰も見ていません」

そう切り出す彼。真意が測れず、俺は慎重に問い合わせた。

「でも、姉が刺したこと間に違ひはないんですね？」

「十中八九」

微妙な言い回しで逃げる警察機構に苛立つた俺は、コントロールできぬ感情をぶつけた。

「姉は何と言つてるんですか？！嘘だと思われていてもいいから、姉の言葉をそのまま聞かせてください！」

栄生さんは、そんな俺を無表情で観察する。

強い、いや、怖いぐらいの違和感が襲つてきた。そうだ。ここに来てから、姉貴の存在を感じていない。カイさんはなぜあんな外れた場所で孤立していたのだろう。お袋はなぜ姉貴を守るための反論もせずに弱りきっていたのだろう。

「あの……こえ……」

嫌な考えが頭を掠めて、俺は栄生さんへの質問をためらつた。被害者は腹部を刺されて重症だといつ。俺は、刺したほうの姉貴は、少なくとも身体的には害されていないないと思い込んでいた。でも、そうじやなかつたら……。姉貴も危害を加えられていたとしたら……。

「……姉は無事なんですか？」

言葉を搾り出すと、栄生さんは、ふと息を漏らした。

「本当にお姉さんの行き先を知らないようだね」

「は？」

思わず答えるに、我ながら間抜けな声を出した。栄生さんは、やや厳しい表情をして、先を続ける。

「お姉さんは現場から逃走したんです」

うろたえる俺に、さらに重ねる。

「間部さんのお嬢さんも一緒に失踪しました。たぶん、行動を共にしていると思います」

頭の中が疑問符だらけだ。姉貴が逃走？ しかも、虐待されていた子どもを連れて？

「エスカレートした虐待から子どもを守るひつとして、逃げたつてことじや……」

後先の事情をすつ飛ばして俺がそう推理すると、栄生さんは苦笑した。

「母親を刺したのが、子どもを守るための正当防衛だつたとして、なぜ一緒に逃げる必要があるんですか？」

もつともだ。

「重症の母親を見て動搖した子どもを、放つておけなかつた、とか」姉貴ならそんなこともやつそうな気がした。自分が傷つけてしまった母親を見てショックを受ける子ども。その子どもを現場に放置しておけなくて連れ出した……。

栄生さんは頭を振つて、また小さく笑つた。

「どんな事情であれ、お姉さんが行なっていることは犯罪です」
「そうだな。俺も納得する。姉貴は間違っている。逃げた時点で、子どもを巻き込んだ時点で、弁解はできない。」

「姉を…捕まえてはもらえるんでしょうつか？」

「俺から尋ねると、栄生さんはゆっくとした仕草で、全力を尽くしています」

と頷いた。

なんだか妙に落ち着いた。諦めがついたんだろう。自分でもわかる。

姉貴の名譽を守つてやりたいと、ここに来るまで、ずっと思つていた。でもそれが破綻して、俺は少しホツとしている。姉貴にだつて悪いところはある。すぐにヒステリックになって泣き出すお袋も、世間知らずで小心者の俺も、欠点だらけの人間なんだ。アルコール中毒の親父を詰つていてるうちに、自分たちだけは、そんなつまらない人生を送る」などと、どういうわけだか思い込んでいた。つまらない人生を送らせてはいけないと、ずっと気負つっていた。

栄生さんは、パネルの照明の消えた、でも辛うじて動いている様子の自販機から、「コーヒーを2つ買い込んで、1つを俺の目の前に置いた。

「すいません。気を使つてもらつて。払います」

財布を取り出そうとする、笑つて、

「僕からの敬意です。普通は、家族が加害者になつたら、もつと見苦しく足搔くもんです」

と言つた。俺も笑つて軽口を返そうとしたが、予想せず、声が震えて、コーヒーをこぼした。

「…すみません。勝手だとは思つたが、姉貴のことが心配で、言い訳すると、

「そうですね。当然だと思います」

と慈悲のイントネーションが返ってきた。あくしょう…。本当に情

けないな、俺は……。

携帯が鳴った。栄生さんのものだ。

「失礼」

立ち上がり隅に移動する彼をぼんやりと見送つていると、暗い休息室の中、

「えっ、ほんと？」

と若い警察官の本性が現れた物言いが響いた。

電話を切った後、栄生さんは走り寄つて来て、空になつたコーヒーハンガーのカップを握つた。

「間部アリサが目を覚ましたそうです」

『アリサ』という聞き慣れない名前に戸惑つていると、

「被害者ですよ。あのお母さんがつけた名前らしいでしょ?」

と笑つた。俺も釣られて顔を緩ませかけてから、

「え? 意識が戻つたんですか? !」

と一気に覚醒した。

被害者が回復してくれた。それがこんなに嬉しいことだとは思わなかつた。巡査に脅されていた言葉が消滅していく。『殺人未遂になるかも』。いや、罪状は軽くならないだろう。でも、姉貴を人殺しだけにはしなくて済んだ。

「医師から許可が出たので、話をしに行つてきます。水嶋さんはさつきの控え室に戻つていてください」

栄生さんから、そう指示されて、俺は大きく頷いた。

控え室に戻ると、入り口の横に彩ちゃんが佇んでいた。

「あ、センパイ…。どこ行つちゃつたのかと思つた

俺の顔を見ると、明らかに安堵の顔で駆け寄つてくる。

「うん、ちょっと警察の人と話を…彩ちゃん?」

俺の腕を掴んでうつむく彼女。

「どうかした?」

聞くと、

「あの…お姉さんの行方が…」

と切れ切れに答えた。ああ、お袋から聞いたのか。

「今、警察から教えてもらつたよ。大丈夫。きっと、動転して逃げただけだと思うから。姉貴、普段は偉そうなことを言つたけど、いついうのに耐性がないんだ」

犯罪に耐性もクソもない、自分でも思つたが、彩ちゃんの不安を軽くしてやりたくて、表現を碎いた。彼女は微かに笑つて、「すぐに見つかりますよね？」

と念を押した。

「うん」

身内の俺と同じレベルで心配をしてくれる彩ちゃんが、いつもの20割増ぐらいたに可愛く感じた。

10分ほど待つたところ、エエエのほつから大勢の話し声が聞こえてきた。

部屋には入らず、廊下にいた俺に、栄生さんが歩み寄つてくる。その後ろには間部アリサの母親が、相変わらずの凶悪な面相を浮かべてついてきていた。彩ちゃんを暴言の餌食にはしたくなくて、俺は彼女を背中に押しやり、自分から彼らに近づいた。

「完全に持ち直したんですか？」

被害者の覚醒が一時的なものでないことを祈る。栄生さんは笑顔で、

「ええ。もう大丈夫です」

と請け負つた。そつか…、よかつた…。

栄生さんは、俺たち、俺と彩ちゃんと母親に部屋に入るよう促すと、彼自身は、

「署に報告してきます」

と離れていた。間部アリサの口から何か進展が聞けたんだらう。姉貴の行方に関することはなかつただろうか。

少しでも早く結果を知りたかった俺は、さつさと同じじようにソノ

アにふんぞり返る対面の母親に話しかけてみた。

「アリサさんは、事件のことについて、証言できるぐらいいに落ち着いたんですか？」

「はあ？」

苛ついた様子の母親は取り付く島もない。仕方なく口をつぐむと、彼女は、なぜか急にそわそわしだした。彩ちゃんに向かって気味の悪い猫なで声を出す。

「ねえ、あんた。その兄さんの何なの？」

「へ？」

予想外の言葉を投げられた彩ちゃんは、目を丸くしながら俺を見た。俺にも母親の意図がわからない。

「か、会社の先輩です」

つっかえながらそう答える彼女に、母親はさらに質問を重ねる。

「兄さん、会社ではどんな仕事してるの？ 有能？」

「え、あの…」

うろたえる彩ちゃんに、俺は、

「答えなくていい

と断じた。なんだ、この人。想像以上に下衆な人間性を持つていそうだ。

母親は、今度は俺に向かって話しかけてきた。眉が八の字に歪んでいる。先刻の居丈高な顔つきとは明らかに一変していた。

「アリサがミナミのことを虐待したって言つてたけど、ねえ、あんた、悪いけど、学校にそういうことはなかつたって断つてくれない？」

文体がおかしい。でも言いたいことは分かつた。

「そんなことはできません

今さら娘の体裁を取り繕つて何になるんだよ。そもそも、娘が虐待をしているって認めてないんじゃなかつたのか。

「できる、できないじゃなくてさ。あんたのお姉さんがうちの娘を通報したんだろう？ だつたら、お姉さんから取り下げてもらえればいい

じゃないか」

「虐待の通告はそういうシステムではないんです。それに…」

行方不明という深刻なことになつてている姉貴に、そんな些細な不利益の尻拭いをさせる気か？憤りをなんとか抑えて、俺は続けた。

「…虐待がないことになれば、姉がアリサさんを刺した理由に整合性がなくなります。俺は姉を、無意味に隣人に刃物を向けるような人間と見せる気はない」

あんたの娘より姉貴のほうが大事だ、と言外に込めるとい、母親は、そういう理屈にはすぐに反応した。

「じゃあ、あたしの娘が刺されて当然の人間だと言いたいのかい？」

「！」

特に反論はしない。

「アリサは虐待なんかしてないよー//ナ//の出来が悪いから、叱らなきゃ、マトモに育たないだろ…！」

罵倒の矛先を孫にまで向ける彼女に、軽蔑の沈黙しか返せなかつた。母親は再度、彩ちゃんに向かつて、まくし立てる。

「あんたもこんな男と付き合つてると、泣き寝入りすることになるよ。人の娘を陥れておいて平気な人間なんだからね。それとも、あんた、マジなの？ああ、そういう顔してるわ。あんたみたいな女が、優しさの欠片もない男を作つてるんだ。自覚しろ、ばかっ！」

聞かないようにはしていたが、いい加減、こっちもキレてきた。怒鳴りつけようとした瞬間、彩ちゃんの間延びした声が割り込んだ。

「それでも、わたしはセンパイが好きですけど？」

思わずまじまじと見返すと、彩ちゃんはちよつと赤面しながら、

「あ、でも、マジじゃないと思います」

と俺に向かつてはにかんだ。

「…わかってる」

我ながら間抜けな答え。何がわかつてたんだろう。

「男性に優しくしてほしいと思うなら、お母さんも、もうちょっとお孫さんに愛情を持つてあげてください。今の話を聞いていると、

なんだか…センパイのお姉さんのほうが、ずっとミナミちゃんに親身になつてあげていたみたいに感じます」

穏やかな物言いの裏の皮肉に、母親は反論してこなかつた。

栄生さんが戻つてきた。開口一番に、一いつ貫いつ。

「安心してください。お姉さんは無実です」

俺と彩ちゃんは意味がわからず、反応できなかつた。母親だけが、バツが悪そうな顔で横を向く。

「被害者を刺したのは被害者の娘です。小学2年生の女の子。水嶋さんから虐待の話を聞かせていただいたので、今、学校のほうにも事情を問い合わせました。体罰の痕跡はなかつたのですが、子どもの精神状態から何らかの障害が見受けられたそうです」

栄生さんはすらすらと説明して、それから、俺に頭を下げた。

「長い時間、ご協力いただいてありがとうございます。今日はお帰りいただきていいですよ。また連絡するかもしだせんが」「姉貴は…どうなるんですか？」

状況は飲み込めたが、今後の予測が未だにつかない俺は、栄生さんに確認した。

「一応、無関係ということになります。ただ、加害者…間部ミナミさんと行動を共にされているのでしたら、保護した後に、立場に変化があるかもしません」

慎重に言葉を選ぶ彼に、今度は俺が頭を下げた。とにかく見つけてほしい。母親を刺してしまつてショックを受けているだらう女兒を、懸命に宥めている姉貴の姿が浮かぶ。善意がこれ以上こじれないようここ、俺にできるることは、これぐらいしかない。

姉貴の失踪 2（後書き）

原稿用紙にして36枚の長丁場になってしましました。あえて感情の機微を丁寧に書きましたが、「そこまで要らないよ」と思われた方は、感想欄にでも書いていただけると嬉しいです。

姉貴の失踪 3（前書き）

この章には管理人の罵倒の場面が出てきます。大家さんと「うまく行つてない方」はお気をつけ下さい。

彩ちゃんを帰すために、一旦、会社に戻ることにした。カイさんにお袋を預けたかったが、すでに病院内に姿がなかつた。仕方なく、後部座席に乗るように指示して、助手席を彩ちゃんに勧める。すると、彩ちゃんは、

「お母さんのそばにいます」

と、生命力の流れ出たような体たらくを見せるお袋の隣に座つた。

「ありがとう……」

お袋の手を握つてくれる彩ちゃんに、俺は感謝以上の感動を覚えて涙腺が緩んだ。慌てて運転席に乗り込む。弱つた年寄りは、身内の俺の目から見ても醜怪だ。その体に抵抗もなく触れてくれる彩ちゃんは、優しいというより強い人間に見える。

会社に着くと、先輩はもう帰つていた。当たり前だな。時間は午後10時を回つていて。彩ちゃんが自分の車に乗り込んで発進するのを見届けた後、先輩の携帯に電話した。

「おっ、帰つてきたか。お姉さんには会えたか？」

わざとらしく闊達な大声で対応してくれる先輩に、事の次第を話すと、急に声を潜めて、

「妙な話だなあ」

と言つた。

「お姉さんが、その…ミナミとかいう子どもと母親の修羅場に出食わしたんなら、慌てて子どもを保護しようとしたつて、普通は家の中に連れ込むもんだりつ？」

「家には…」

無理解な夫が同居している。それで姉貴は外に連れ出そうとしたんじゃないか。先輩にそう伝えると、

「だったら計画的な逃走つてことか？財布とか上着とかを持ち出しているか、確認しておいたほうがいいぞ。何の準備もしていないなら、

「そう長居はできないだろ？からな」

とアドバイスされた。確かにそうだ。俺は冷えてきた夜氣に上着の襟を合わせながら頷いた。この寒空の中、万全の支度がないなら、そろそろ帰る必要が出てくるはずだ。それに、と、思いつく。子どもは母親の返り血を浴びているんじゃないか。そんな格好で遠くまでうろつけるわけがない。

「もしかしたら、すでにマンションに戻ってるかもしれないですね」

希望的観測を口に出すと、

「おう。お前もマンションに向かつたほうがいいぞ。迎えてくれるのがそんな旦那じゃ、お姉さんも可哀想だ」

と先輩は笑った。礼を言つて、車に飛び乗る。

姉貴のマンションと自宅は10キロほど離れている。本当は真っ直ぐにマンションに向かったんだが、お袋を家で休ませなければならない。俺は電話を取り出して、カイさんにかけた。お袋を送り届けている間のことを頼みたかったからだ。けれど、数度のメールの後、

「この電話はただいま出ることができません」

というアナウンスが流れてきた。俺からの着信だと見たカイさんが、通話終了ボタンを押したんだろう。…まったく、あの人は…。

「お袋、姉貴のところに少し寄るよ」

と後部座席に向かつて声をかけると、お袋は未だに掠れた声で、

「まっすぐ家に帰つてちょうどいい。今回のことでの、幸子はご近所に顔向けできなくなつたんでしょう？そんなところに行きたくない」と答えた。ちょっとむかつ腹が立つたが、努めて態度に出さないようになって説得する。

「でも、姉貴が帰つてきてるかもしれないんだぜ。お袋が近所の白い田にそらうされるのは嫌だつて思うなら、それは姉貴だつて一緒だろ。家族なんだからフォローしてやつよ」

けれどお袋は、

「幸子は自業自得じやないの」「受け付けなかつた。なんでだよ……。

お袋を自宅に着け、俺は車から降りることもなく、姉貴のマンションに向かつた。11時を少し回つていて。

マンション周辺の住宅街はすでに寝静まつていた。車をフリースペースに停めようとしたが先客がいる。仕方なく見回すと、姉貴の部屋の割り当てスペースが空いていた。そこに突つ込み、運転席から出ようとして気づく。この場所には、いつも、カイさんの自家用車が停まっている。それがないということは、カイさんはマンションに戻つてないのか……。

俺はもう一度カイさんの携帯にかけてみた。出ない。かなりの時間、待たされる。そして通信が繋がつた。

「はい」

不機嫌そつな低いカイさんの声。

「俺です。今どこに？マンションにはいないの？」

聞くと、

「そんなところに帰れるわけないだろ！」

と怒鳴つてきた。

「でも、カイさんが帰つていなきや、姉貴が戻つたときに独りになるんだぜ……」

俺も負けずに大声を出そうとして、なんとか自制する。もう夜中だ。「なあ、あんたが姉貴を怒つてるのはわかつたよ。だけど、こんな状況なんだ。もっと協力的になつてくれてもいいんじやないか？」

そう説得すると、カイさんはブツブツと何かを言つた後、

「あーあ、でも今晩は帰れねえよ。もう飲んじまつたもん」と声のトーンを跳ね上げた。

……怒りで視界が歪んだような気がした。俺は握り潰す勢いで携帯を切つた。目の前にこの馬鹿がいたら殴つてのこころだ。

少しの間、動くことができなかつた。深呼吸を繰り返して、なん

とか足を前に出す。階段を上り、3階の共用廊下に出ると、姉貴の部屋の隣、つまり事件現場の玄関に黄色のテープが幾十にも貼りつけられているのが見えた。それを横目で通り過ぎながら、姉貴の部屋のドアノブを回す。ガキ、とすぐに硬い手応えが邪魔した。：鍵がかかってる。

：… そうだな。… それはそうだ。… 家主が外で飲んでるんだから、誰も帰つてないこの家の施錠が開いているわけはない。

「くそつ」

俺は我慢できなくなつて壁に拳を叩きつけた。大きな音を立てる鉄扉を避けたのは、我ながら賢明だと思った。コンクリートの殺風景な外壁は、俺の憤懣ぐらいじやビクともしない。

「親父…」

どこかに救いを求めたかつたが、言葉の続きを飲み込んだ。親父は死んでいる。死者にしか頼れない自分の立場を認めるのは、情けなかつた。

ドアに背を向けると、眼下にススキの群生が揺れているのが目に入つた。俺はその体勢のまま座り込んだ。膝の中に顔を埋める。見たくなかつた。何百本という干からびた手のような陰が、普通の生活のすぐ隣に広がる異界に、俺を引きこもるとしているように感じたから…。

結局、翌日までマンションの駐車場で留まつた。朝方早くに戻つてきたカイさんを捕まえて、

「今日はどうするんだよ？」

と聞くと、カイさんは俺の方を見向きもせずに、

「しばらく実家から仕事に通うことにする

と言つた。それを聞いて俺も諦めた。

「じゃあ、俺がこのマンションで姉貴を待つから、鍵を渡して」と手を出すと、自分のキー ホルダーから玄関の鍵を抜いて差し出す。戻つてくる気がないのか、と理解した。

朝一で先輩に休みの連絡を入れた。お袋の面倒を見なければならないのと、マンションの管理人に謝罪に行かなければならぬからだ。先輩は快諾してくれた。

9時を待つて、まず事件を起こしたのと反対側の隣家に寄る。母親らしい若い女性と2歳ぐらいの子どもが出てきた。騒がせたことを詫びると、

「びっくりしたけど、もういいの。解決したんでしょ？」「と尋ねられる。適当に言葉を濁すと、会話の流れで、事件時の状況を少し教えてくれた。

昨日、夕食の少し前ぐらいの时刻に、鋭い悲鳴が聞こえたそうだ。不審に思ったこの母親が、声のした共用廊下を覗くと、事件現場の玄関先に姉貴が立つていて、その足元に間部アリサが這い出てきていた。最初はアリサが勝手に転んだのだと思った、と母親は言った。けれどよく見ると、彼女の体は血まみれになっていた。

「サツちゃんが『救急車を呼んで！』って叫んだから、あたしも慌てて家の中に入つたの。119番して、また外に出たら、今度はサツちゃんの旦那さんが立つてて、間部さんは相変わらずだつたんだけど、サツちゃんがいなかつたのよね」

母親は姉貴と面識があるらしい。愛称で呼んでくれる関係を築いてたんだな、と、俺は姉貴に感謝した。

「姉貴は…サチは、間部さんと揉めていた感じでしたか？」
そう確認すると、母親は大きく首を横に振つて、

「警察の人にも、間部さんを刺したのはサツちゃんじゃないか、つて何度も聞かれたけど、サツちゃんがそんなことするわけないじゃない。ミナミちゃんのことで間部さんに怒つてたのは知つてるけど、でも、もし間部さんが児童虐待で警察に捕まつたりしたら、一番可哀想なのはミナミちゃんでしょう？だから、間部さんに嫌がられても、虐待を未然に防ぐんだって言ってたもの」

と説明した。

俺は礼を言つて母親から離れた。姉貴はやっぱり間違つていない。

「サツちゃん、今どこにいるの？実家？」

背を向けた俺に、母親が聞いた。逡巡したが、伝えておいたほうがいいと思つて、答える。

「姉は昨日から行方不明なんです。たぶん、あなたが119をしてくれている間に、どこかに行つてしまつたんだと思います…」

「ええ？！」

驚きの声を上げた彼女は、でもすぐに気を取り直して、

「あ、そなな…。あたし、旦那さんに怒られて実家に帰つてもんだとばかり…。心配ね…。もし戻つてきたら、すぐ保護してあげるね」

と言つてくれた。俺は深く頭を下げた。

マンションの脇の一軒家に住むという管理人を、次に訪ねた。竹林の囲む敷地への入り口を入れると、急に視野が開ける。芳賀さんの邸宅ほどではないが、広い屋敷だつた。古い板壁の平屋が重厚な質量を持つて据わつている。

玄関に回つて声をかけると、未だにサッシになつていない引き戸が、耳障りな音を立てて開かれた。小さな80代ぐらいの爺さんが立つている。目付きは…とても友好的とは言えない…。

「飯塚です。昨夜はお騒がせして…」

謝るうとするが、問答無用に目の前で引き戸が閉められた。中から、

「婆さん、塩！」

と怒鳴る声がする。

正直、ここまで拒絶反応が強いと思わなかつた俺は、呆然として、しばらく声もかけられなかつた。玄関先では老人が忙しなく動き回つている気配がする。

「大変、申し訳ありませんでした。姉が戻つてきたら、必ず、また

気を取り直して、もう一度、呼びかけた。

「大変、申し訳ありませんでした。姉が戻つてきたら、必ず、また

一緒に謝まりにきます

謝罪の言葉を重ねようとしたとき、再度、引き戸が軋み、たつきより憤怒の形相を強めた爺さんが出てきた。

「あなたたちには今日限り出ていってもらひついでう来んでいいわ！」

一方的に会話を切られて、俺は途方に暮れてしまった。

自宅に戻ると、お袋が布団に転がっていた。

「何か食べたのか？」

そう聞いて台所に向かう。そういうえば、俺も昨夜の騒ぎから何も食べてなかつたな。

「要らない…。食欲がない…」

拒絶するお袋に、

「食わなきや駄目だろ」

と諫めて、水を張った鍋を火にかけた。

背中を支えて起こし、粥を啜らせる。お袋と同じ物を食べる気にならなかつた俺は、台所の隅で茶漬けを搔きこんだ。

頭が重いな…。何を考えたらいいのか、わからない。

「また幸子のところに行くの？」

布団の中からお袋が弱々しく尋ねる。

「うん。今は母さんより姉貴優先だ」

そう答えると、お袋は小さく泣き出した。

もし管理人にあのマンションを解約されたら、姉貴はどうなるんだろう。そんなことを考えながら、俺は車を走らせていた。

姉貴が何かやつたのか？刺したのは隣の子どもだ。親子喧嘩に巻き込まれただけじゃないか。それとも、隣人が刺されて死にかけるのを放つておいたほうが良かつたのか？苛々で、思考が前を向かない。みんな、姉貴が悪いとでも言いたいのかよ…。

車を、空きっぱなしのカイさんの駐車場に入れてから、俺は呼氣

を吐き出した。そういえば、息を吸うことさえ忘れてたな。なんだか可笑しくなつた。普段から、意識して呼吸なんかしてないじゃないか。

運転席から半身を乗り出すと、背後から近寄つてくる足音が聞こえた。振り返ると、芳賀の爺さんが、孫娘を伴つて立つていた。

「サチさんが大変なことになつたつて聞いて…。どうなつてるの？」

彼女は、こんなときでさえ穏やかな口調を崩さずに、聞いた。

「うん、あの…」

誰を信用していいのかわからなくなつていた俺は、懷疑の本心をなんとか隠して、慎重に状況を説明する。

「まあ。お爺ちゃん、藤原さんの言い分、あんまりじゃないですか孫娘は管理人の話を聞き咎めた。爺さんも厳しい顔をしている。

「一言、言こに行つてやりましょ。涼一さん、大丈夫よ。お爺ちゃん、この辺では一番強い力を持つてるの。解約なんかさせないから」

請け負つてくれる彼女の笑顔を見て、それから俺は爺さんに頭を下げた。

「よろしくお願ひします」

爺さんたちを信用しているのか、自分でもわからない。この2人の言葉を喜んでいいのか、それすら迷う。

部屋に上がりこみ、玄関先に転がつた。現実的なことは、もう何も考えたくない。

姉貴と子どもはどこに消えたんだ？隣の母親が通報している間のことだから、そんなに長い時間じゃない。事件時、姉貴は救急車を呼ぶように指示したと言つていた。冷静な行動に思える。その姉貴が、取り乱して、子どもを現場から連れ出したりするだらうか？

間部アリサを刺した間部ミナミのことを、ぼんやりと空想した。虐待されて鬱屈を溜めた小学2年生。小さな体で母親を瀕死の重傷に追い込むには、相当の思い切り…恨み…が必要だろう。そのミナ

ミが、逃げ惑う母親を追つて玄関先まで来ていたとしたら…。出へ
わした姉貴にも見境なく刃を向けたとしたら…。

「まさか」

俺は体を起こした。ミナミは姉貴をも敵視したんだろうか。そして

…。
でも、すぐに自分の考えの馬鹿馬鹿しさを認めた。もし姉貴が刺されたのなら、すぐに見つかっているはずだ。

「負けんなよな、サチ…」

姉貴の強さを信じたかった。俺もがんばらなきやな、と頭の片隅で思いながら、意識が睡魔に呑まれていった。

心地良い声がする。彩ちゃんを想わせる優しい声音だ。

「センパイ。風邪引きますよ。ちゃんと奥に行こ？」

小さな掌が俺の肩を掴んでいた。目を開けた俺は、すでに電灯の付いている玄関で、彩ちゃんに振り起こされていた。

「え? なんで?」

一瞬で覚醒して起き上がる。彩ちゃんはホッとした顔をして、「センパイの自宅に行つたら、お母さんこじつけだつて教えてもらつたの。来てみてよかつた」と微笑んだ。

居間に移動して、彼女にも座を勧めると、彩ちゃんは台所に留まつて、

「ううん。先に食事の支度します。キッチン借りるね、お姉さん」と架空の住人に向かつて断つた。窓から外を眺めると、真つ暗になつている。

「仕事帰りに寄つてくれたんだ?」

確認すると、

「はい。前川さんがフライングして退社をせてくれたんですね」と笑つた。そつか。先輩が配慮してくれたのか。

現実との辻褄が合つてくると、彩ちゃんが食事を作りはじめて

れている事実が、やつと頭に入ってきた。

「あ、『』、『』めん。飯はいいんだ。家に帰つて、お袋の支度もしてやらないといけないから…」

慌てて台所に行くと、彩ちゃんは包丁を離して振り向く。

「お母さんのほうは、もう用意してきました。きっとね、家族であるセンパイが行くよりも、他人のわたしが行くほうが、お母さんも気が張ると思うんです。だから、しばらく家政婦さんやってみますね」

首を傾ける様が雛鳥みたいに可愛い。俺は田のやり場に困つて、視線を彷徨わせた。

「そ、そつか。助かる…。でも、彩ちゃんに甘え続けるわけにも行かないよ。今日だけにして」

そう提案したが、

「駄目です」

と即答で却下された。…どうじょうか。抑えていたタガが外れそつなんだけど…。

炊事場に立つ彩ちゃんの背中を、俺は台所のテーブルに座つて、ずっと見ていた。口は会話をしているけど、頭には何も入つてこない。入つてくるのは、視界が捉える彼女の姿だけだ。華奢な撫で肩にかかる髪が電灯に透けて柔らかく絡んでいる。固い雰囲気の仕事シャツを身につけているが、その上から着込んだ姉貴のエプロンが、妙に色っぽい。左右に動くたびに、細い足首がくるくると回った。我知らず、視線を足元から上にずらしていた俺は、自分の浅ましさに気づいて、こつそり頭を抱えた。

「そういうええばさ、前に話してた神社がどうのつていう。あれって何を言おうとしたの？」

できるだけ危うい状況にならないよう、俺は『カミサマ』に話題を預けた。

「ああ、あれはですね…」

彩ちゃんはちよつと考えこんで、

「水嶋センパイが神様を好きになつてくれたらいいな、って思っただけです」

と、困つたような、照れたような笑いを浮かべた。

「神様かあ…」

正直、そんなものがいるなら、姉貴を返せと言いたい。

「してくれるといいな

曖昧に濁すと、彼女は、

「いますよ」

と断言した。ああ、そうだ。彩ちゃんは信者だつたな。

飯を食つて他愛のない雑談をしているうちに、ロミットが来た。

帰るという彩ちゃんを送ろうと玄関先に出向く。

「お袋の晩飯のこと、本当に任せてもいいの？」

気が引けたが確認すると、彩ちゃんは嬉しそう、

「はい。センパイの役に立ちたいもの

と答えた。頭の中が沸騰して、理性が消滅しそうになる。彩ちゃんに向かつて伸びやうになつた腕を、俺は、本当に必死で、抑えつけた。

「ありがとうございます。あ、明日は会社に顔を出すよ。そのとき、また…」

尻すぼみになる声をえて張り上げると、彩ちゃんは、

「待つてます」

と軽い調子で受け答えた。

駐車場で彼女を見送つてから、戻ってきた玄関で、俺はまた氣力が尽きて転がつた。この自制が、今日、一番に辛かった。

姉貴の失踪 3（後書き）

『姉貴の失踪』の章、最初3話で終わらせるつもりでしたが1話1話が思ったより長いため、分割させていただきます。

姉貴の失踪 4（前書き）

この章には救じようのない葛藤が出てきます。影響を受けやすい方はお気をつけ下さい。

翌朝になつても姉貴は帰つてこなかつた。夜中に何度か起き上がりて玄関から出てみたが、しんと静まり返つた寒氣の中、隣家の黄色いテープだけが毒々しく目に映つた。

「そういえば、インターホン鳴らねえな…」

今さら、どうでもいいことが思い出された。幽霊でも聞部アリサでも、…聞部ミナミだつたとしても、『結果』が出た以上、もう訪問する必要はないんだろう。

姉貴の上着も財布も家の中に残されていた。どうやつて、一晩も寒さと飢えを凌いだんだろう。電話の1本でいいから連絡ぐらいよこせないんだろうか…。

出社前にお袋に電話して、朝の支度ぐらい自分で何とかしりと言つた。お袋は、前日よりは元気な声で、「あなたの会社の人が世話をしてくれたから、こつちは大丈夫よ」と答えた。安堵して車に乗る。

会社に着いて、先輩にまず礼を言つと、「とりあえず本社に1人応援を頼んでおいた。お前もプライベートを優先していいぞ」

と処置してもらつた。また礼を重ねる。

昼休みにカイさんの会社に電話した。携帯にかけても無視されるからだ。嫌々という態度を隠しもしない義兄に、姉貴の失踪時の話を確認すると、声を潜めてこんな説明をされた。

「昨日は、俺、休みだつたんだ。夕方の5時過ぎ頃、サチが、隣の家で物が割れたような音がした、つて騒ぎ出して。サチはすぐに

玄関から出て行つたんだけど、俺はまたかと思つて放つておいた。なかなか帰つてこないんで、おかしいと思つて出て行つたときには、隣があんなふうになつてて、サチはいなくなつてた

「え？ 一度も戻つてくることなく、姉貴は消えたの？」

カイさんに聞きたかったのはそこだつた。いくら否定的な夫がいるからつて、小学生の女兒を連れて、自宅にも帰らず突発的に逃走するなんて、普通には考えられない。

… 昨日の妄想が再燃する。間部ミナミの狂気に歪んだ姿が、姉貴に襲いかかつてくる。

「そつか…。わかつた。教えてくれてサンキュー」

カイさんには、当然ながら、そんな話はしなかつた。儀礼的に返事をすると、彼から意外な言葉が返つてきた。

「サチを行方不明にしちやつてごめんな

びつくりして反射的にフォローする。

「それはカイさんのせいじゃない。いなくなつたのは姉貴の責任だ」だけど、カイさんの言つたのは、そういうことじやないらしい。小声のまま、彼は続けた。

「サチは、俺から逃げてるんだと思つ」

「え？ どういふこと？」

思わず声を大きくする。すると、義兄は、少し吹つ切れたよつな歯切れのよい口調で告白した。

「俺、サチにはずいぶんと自分の考えを押し付けてた。：涼一くん、君は内心では俺のことを疎ましく思つてただろう。わかつてたんだ。サチとの結婚が決まつた後も、君は俺に友好的ではなかつたからね。俺、結婚してからも、ずっと、君たち家族に負い目を感じてた。サチだけでも俺の味方につけようと必死になりすぎてたんだな。それがサチにとつては苦痛だったのかもしれない」

カイさんの話は、俺にとつて心当たりがあるような、ないような、という感じだつたが、新しい家族として必死で馴染もうとしていた彼をないがしろにしてしまつていたのかと認識すると、罪悪感は沸

いた。

「…そつか…。カイさんは謝らないといけないな…」

呟くと、義兄から、

「謝るなよ。本当に俺のこじと鬱陶しく思つてたのか?」

と笑い声が返ってきた。

「いや、そんなことは…」

慌てて否定してから、

「…でも、姉を取られた弟の発想なんて、友好的にはならないぜ」と正直に伝えた。カイさんは、ちよつと間を置いてから、また笑つた。

夕方になつて、彩ちゃんにお袋のことを頼むべきか迷つていると、「お姉さんのマンションに行つてあげてください。お母さんのまつは任せて」と彼女から言い出してくれた。頭を下げると、

「あ。その後でセンパイのとこにも寄つていいでですか?」と聞かれた。昨夜の一の舞になりそうな気分だつた俺は、「来るなら、それなりに覚悟してきて」と言つたが、

「何を?」

彩ちゃんには通じなかつたようだ。

無用に危機感を募らせる隣家のがんじがらめのドアをやり過(ハ)し、姉貴の部屋の玄関に腰を下ろす。帰ってきた気配はない。今晚も、またあの不安な夜を過ごすのか…。

「なあ。姉貴が何したんだよ」

誰にぶつけていいのかわからない苛立ちを、外出用の靴が並んだ狭い土間に投げつける。

「いい加減、返せよ。連れて行くなら、他にもふさわしい奴がいるだろ」

間部アリサがいなくなればよかつたのに。考え方やいけない発想が浮かぶ。なあ、ミナミ、なんで自分の母親じゃなくて姉貴を連れていくんだ？

本格的な夜になつて、彩ちゃんが訪れた。

「センパイ、顔色が悪いですよ。待つてね。今、食事を作るから」昨日と同じようにHプロンを付けて台所に立つ彼女を、今度は見ないように、俺は居間に引つ込んだ。

「俺のことはいいって。本当に大丈夫だから」

本当はかなりの氣だるさを感じていたが、意地で元気な声を出した。「それより、毎日、こんな遅くまで付き合わせてるほうが気がひけるよ」

と言ひと、彩ちゃんは、

「責任とつて、もひつてください」

と笑つた。

足が勝手に立ち上がりつて、彩ちゃんのほうに向かつ。

病院で、彼女は俺のことを『好き』と言つてくれた。今も思わせぶりな言葉を吐く。でも……なんていうか……、空気が軽い。本気じゃない気がしてしようがない。

「……もらつてもいいんだ？」

彩ちゃんの隣に立つて、そう探ると、困ったような表情で見上げてきた。

「……冗談だよ」

やつぱりな……。落胆して、俺は居間に戻つた。すぐに、彩ちゃんの包丁を捌く音が聞こえてくる。

「センパイのバカ」

少し怒つてゐるよつだつた。

事件から3日が経つた。まだ姉貴は帰つてこない。

今日は栄生さんから電話があつた。自宅にかけたらしげが、お袋

が対応しきれなかつたので、俺の携帯番号を聞き出した、との「」。

「間部ミナミの搜索を公開に切り替えることにします」

今まで、姉貴が絡んでいる事情を鑑みて、非公開としてもうつて

いた。それが公にされるという意味を、俺が把握できずについと、

「マスク」に「お姉さんの名前が流れるかもしません。」承知くだ

さい」

と言われた。

夕方、戻つた姉貴のマンションで、さつそくミナミのコースを見た。事件当時の服装と年齢背格好は報道されていたが、アリサの傷害事件については触れていなかつた。ホッとして、睡魔に身を委ねる。

インター ホンが鳴つた。夢の中だ。

玄関を開けると彩ちゃんが立つていて、白いシャツが返り血で真っ赤に染まつていて、右手には子どもの頭部がぶら下がつていた。コースで見た間部ミナミの顔だつた。

「センパイ、この子が憎かつたんでしょう？」

彩ちゃんは喜色満面でそれを差し出した。

叫ぼうとして。

俺は目を覚ました。

「違う。そんなことをしたいんじゃない。ミナミに對して、俺は殺意なんか持つてない…。

4日目の夕方に芳賀さんの孫娘が訪ねてきた。そついえば、あれから管理人に何も言われていない。
「その節はお世話になりました」と礼を言つと、

「いいえ。…わたしたちはサチさんの味方よ」と強調された。昼のゴシップ系コースで、姉貴は誘拐犯と同義に

報道されていた。

1週間が過ぎても姉貴の行方は知れなかつた。月が変わって寒さが厳しくなつた。

3週間が過ぎた頃、お袋が言つた。

「幸子はもう駄目かもね…」

俺は怒鳴りつけた。

「何にもしてやつてないくせに、そういうことだけ言つなよつ…」

お袋は泣きながら言つた。

「きつとお父さんのバチが当たつたのよ」

親父の罪を姉貴がかぶらなきやならない道理はないだらう。腹を立てて自宅から去ろうとすると、お袋はボソリと呟く。

「あんたはいいわね。何も知らないんだから」

「…知らないって、何を…」

以前、姉貴にも同じ事を言われた気がする。『リョウちゃんはよく知らないから肩が持てるのよ』。

ある程度、泣いて、落ち着いたお袋が話し出した。飲酒運転で事故を起こして3人の人間を殺した親父。俺は、親父もその事故で死んだと聞かされてきた。けれど。

「お父さんは軽症だつたの。病院に運ばれて診察を受けた後に、わたくしと幸子が面会したんだけど、わたしたちは…」

お父さんを、責めて責めて死ねと詰つた、とお袋は零した。

「お父さん、その病室のドアノブにベルトを巻いてね」

看護師が気づいたときには、すでに絶命していたらしい。

「わたしと幸子がお父さんを殺したようなものだつた。幸子はすぐに平気になつたけど、わたしは、ずっと、忘れられなかつた。だから、お父さん、薄情な幸子にバツを『えたんだと思う』

俺は黙つてお袋から離れた。口を開くと、同じ呪詛をお袋に浴びせてしまつそうだったから。お前なんか死ね、と。

1ヶ月が過ぎた。仕事には出ていたが、自分が何をやっているのかわからなくなっていた。

先輩が言った。

「顔色が最悪だ。もう帰れ」

「すいません」

詫びて鞄を抱えると、背中に、先輩の眩きが突き刺さつた。

「彩っぴ…今日、見合いなんだ」

俺は、欠勤している彩ちゃんの机を見て、それから頭を下げて退社した。今日が、この事務所の見納めのような気がした。

姉貴の失踪 4（後書き）

『姉貴の失踪』の章は終わりです。次は結末に入ります。

小刻みに行きます。

「トーン、という音がして目が覚めた。何かが落ちたのかと思つたら、床に転がっていたのは俺自身だった。たしか、居間の簡易座卓にもたれかかって寝ていたはずだ。

ビール、何本飲んだけ…？プライベートな空間で酒を飲むのは初めてだった。アル中の親父の癖を嫌つて、自宅にはその類いが置かれない。

姉貴が帰つてくるまでに空き缶を片付けないと大玉玉を食いそうだ。そんなことを思つてから、

「馬鹿馬鹿しい」

と口に出した。姉貴が帰つてこないから、やりきれなくて、こんなことをしてゐんじゃないか。

天井の照明が眩しくて、手をかざした。指の輪郭から溢れた光が、妙に躍動感を伴つて見える。…だいぶ酔つてゐるな、俺。彩ちゃんが光の中から手を差し出しているように錯覚してゐ…。

見合ひはうまく行つたんだろうか…。相手の男が、長身のシルエットとなつて頭に浮かんだ。

俺よりもランクの高い『好き』が、彼女の意識に芽生えている気がして、悔しさに歯噛みした。

猛烈に眠かつた。通常の睡眠欲以上のだるさが襲つてくる。酒のせい…だけ、だろうか。なんだか、正常な空間の向こうから誰かに引っ張られてゐみたいだ…。

正気を放棄してしまいたい欲に駆られる。

「まだ駄目だ…つ…」

俺はあえて大声を出し、強引に起き上がつた。まだ『あっち側』には行けない。俺がいなくなつたら、やつと繋いでいるお袋と姉貴の

関係が崩壊する。

トイレに行つて、胃の中の物を全部吐いた。胃液の苦い味が口に広がつたところで、やつと、はつきり目が覚める。

気分を変えるためにシャワーを浴びて、風呂から出ると、また強い欲求が駆け上がつてきた。冷蔵庫を覗くと、6巻パックで買った缶ビールが、あと2巻を残すだけになっている。

「ずいぶん飲んだんだな…」

俺はそれらを持つて行つて、流しに捨てた。目に付くと、また口に入れそうだ。

居間の絨毯に転がつて、天井を見る。室内でもすでに寒い季節に入つていた。眠気覚ましにはちょうどいい。

「姉貴が帰つてこなかつたら、ここも解約か」

現実的な発想が、抵抗なく口を突いた。

「カイさん、再婚するのかな。すぐにでもしそうだな、あの人」苦笑して、天井から目を背け、横を向く。感情が湧いてこない。カイさんや姉貴やお袋の存在が、紙みたいて薄く感じた。諦めかけてるんだな、俺も…。

「涼ー！」

突然、耳元でそう呼ばれた気がして、俺は跳ね起きた。

「…………？」

誰もいるわけはない。ベランダに続く窓のカーテンを開けて、眼下の駐車場を見回したが、聞き間違えるような騒ぎも起きていた。

もう一度、部屋の真中まで戻つて座り込む。…姉貴の声…ではなかつた気がする。が…。

ぞくつと寒気が背中を駆けた。虫の知らせ…という現象が、思考を占拠する。

小さな痛みを感じて見ると、掌に血が滲んでいた。知らずに拳を握りしめていたせいで、爪が皮膚を抉つたらしい。

最悪の想像に耐え切れず、俺は栄生さんの連絡先にダイヤルした。すぐに本人が出た。

「あの…姉貴の行方なんですが…」

しどろもどろで尋ねると、栄生さんは同情的な声で、「手がかりがなくて…」

と言葉を濁した。

「たぶん…もう死んできます」

なぜ、こんなことを言つたのか、自分でもわからなかつた。栄生さんは驚いた様子で、

「水嶋さんだけには、そういうことを言つてほしくないんです」と諫めてきた。

電話を切り、立ち上がり天井を見上げた。照明が眩しくて、闇を溜める隅に目を轉じる。一瞬、姉貴の顔を見た気がした。土氣色に強張り、白く変色した唇を固く結んでいた。

俺は、思わず、手近にあつたビールの空き缶を投げつけた。高い金属音を響かせて、ひしゃげた缶が転げ落ちる。

「うるさい！」

壁の向こうからヒステリックな女の声が聞こえた。いけね、騒音…と慌てて壁に駆け寄つてから。

…再度、ゾッとした。壁の向こうは間部アリサの家だ。無人のはずだ。

声はまだ続いていた。どうやら俺に対して言つたのではなく、家内でやりとりをしているらしい。

「なんでいつもいつもいつも…言わなきやできないのよ、あなたはっ…！」

若い女の声がヒステリックに叫ぶと、子どもの泣き声が重なる。

「ごめんなさい、お母さん。ごめんなさい」

「謝るなっ！謝るぐらうなり出で行つて！あんたなんかうちには要らないんだから…」

子どもの声が号泣に変わる。

…何だ、これは。なぜ虐待が再現されているんだ…。

「あんたがいるおかげで、あたしがどれだけ不幸だと思つてんの？！あんた、人を不幸にして楽しいの？！なんで生まれてきたのよつ…！」

鈍い殴打の音が聞こえた。子どもの声が小さく、ぐぐもつた。厚い布越しのような悲鳴が上がる。

俺はまたカーテンを開けて、今度は窓も開け放した。ベランダ越しのほうが、よりはつきりと状況がわかると思つたからだ。けれど、その途端、音は止んだ。壁越しにも静寂しか伝わってこなくなつた。

玄関を出て、隣家を確認する。キープアウトのテープは剥がされている。ためらつた末、インターホンを押してみた。もしかしたら、アリサが帰つているのかもしれない。

でも出てくる気配はなく、外から窺える限り、室内は無灯だった。

自室に戻り、呆然と壁を見つめた。夢だつたのかと思つたが、小さくついた新しい傷は、俺が投げた缶のせいだ。

そのとき、床が傾いた気がした。横揺れの地震に見舞われているような不安定な感覚が、足元を迫り上がる。思わず壁に手を着くと、冷たい平らな壁紙ではなく、さくれた細い固体物に当たつた。驚いて、つい力を入れると、それは掌の中で簡単に砕けた。白い、脆い質感の棒。骨だ…。

背後に強い風が吹いた。冷や汗が吹き出る。振り返ることができ

なかつた。漂つてくる身を冷やすよくな臭いには覚えがあつた。親父の死臭…。

…そうだ。思い出した。

首にくつかりと残つた痣を不思議がつて、当時、小学生だつた俺は、姉貴にこう言つたんだ。

「お父さん、首吊つたみたい」

姉貴は泣きながら、

「うん。お姉ちゃんが絞め殺したの」

…姉貴にしてみれば、そんな気持ちだつたんだつ。

どれぐらいの時間が過ぎたのか…。気がつくと、すべての怪現象が収まっていた。ゆっくりと振り返った俺は、足から力が抜けるのを自覚しながら、へたり込んだ。

室内に異変はない。電灯が、若干、光を薄くした気がしたけれど、恐怖を誘うほどの暗さは感じなかつた。

手を、見た。碎いた骨の感触が、またありありと残つてゐる。ただ、痕跡はない…。

幻覚？いや…。こんなに鮮明な白昼夢を見るほど、俺は参つてはいなはず…。

「…屍ヶ台、か」

強い風に晒された屍の束を想像した。この土地に住んだ野盗たち、それに、芳賀さんの先祖たちに、殺されて、食べられた彼らは、成仏することができたんだろうか。人間の恨みは、たかだか150年ぐらいで風化されるものなんだろうか。

いや…、と考え直してみる。食われたのが俺だつたら、この世にそんなに執着はしない。貧しい時代だつたんだ。誰かの犠牲は仕方のないことだつたんだ。

「…姉貴が『犠牲』になるのは…嫌だな…」

現実と史実の境目があやふやになつてきた。床の絨毯に目を落とすと、乾いた台地の光景が広がつた。

行商の薬売りを案内する村人が、戸板の上のミニイラを指差す。

「女のは珍しいでしょ。腹ん中も全部残つてますよ」

長い髪を残したままのそれは、口を大きく開けて、生きて帰りたかつた未練を全身で表していた

「胎児はないのかね？」

薬売りが尋ねると、村人は首を振った。

「もう生んじまつた後です。子どもの方は、ほら、隣に」

体が震えだした。耳を塞ぎたい。なのに指が痺れて、うまく動かなかつた。呼吸が気道の入り口でヒターンして、酸欠を起こす。

姉貴は妊娠していんだらうか。それで、他人である間部ミナミに對して、あんなに親身だつたんだらうか。

失くしたものの大きさに愕然とした。親父が減り、お袋が半病人になつた後の、やつと祝福できる家族の存在が、誰かの胃袋に収まつてゐるなんて…。

「…俺が代わる、代わるから…。だから姉貴を返してくれよ…」

会話する2人に何度も訴えた。が、反応は、ない。

…夢か…。起きているつもりだつたが、目を開いた自分を自覚して、眠つていたことを認識した。

どこまでが現実だつたんだろう。壁を見上げると、傷を確認することができる。

やつぱり、夢だけじゃ…ないんだ。いや、むしろ、現実に耐え切れずに意識を落とした、というほうがしつくり来た。この部屋は繋がつてゐる。過去の屍ヶ台の次元と。

「…んなこと…」

あるわけない、と、言えなかつた。もしかしたら、姉貴は『あつち』にいるのかもしれないんだから。

未だに震える足を叱りつけ、立ち上がって台所に向かつた。コップの水を一息で飲んで、なんとか落ち着く。

「冷静にならう」

自分に對して説得する。

「冷静になつて、固定観念じゃなく、可能性だけ考えるんだ」

言い聞かせる。

屍ヶ台はこの場所にあった。それは事実だ。死者を粗雑に扱つたこの土地が、現代、何の制裁も受けずには…考えてみれば都合のいい話だ。以前から、何らかの『こうこう現象』があつたのかかもしれない。

問題は、なぜ姉貴の家に、突然、兆候が現れたかってことだ。もともと幽霊の出る部屋に住んでしまつた、というならわかる。でも、姉貴が引っ越したのは4月だ。すでに半年以上経つている。

そうなると、きっかけは、やはり、間部母娘に関わつたこととか思えない。ミナミはアリサから『お前なんか要らない』と言っていた。母親しか慕うものがない女兒には辛い言葉だろう。その強い負の感情が、正常な世界を飲み込もうとする屍の台地とリンクしたとしたら…。

「姉貴についてきてほしかつたのかな…」
ミナミの心情を思つと、その結論が出た。怒鳴り散らす母親を巻き込むことをしなかつたミナミは、その代わりに、自分に心を碎く姉貴を連れていつたのかもしれない。

上着を引っ掛けた。どうすればいいのかなんてわからない。ただ、部屋に籠つっていても解決はしないと思う。
勢いで外に出ようと玄関に向かつたとき。

インター ホンが鳴つた。

あくつとして足が止まつた。

何時だ?まだ『正常な』訪問者があるような時間なんだろうか。動けずになると、ドアの向こうから、聞き覚えのある声で呼ばれた。

「センパイ…起きていますか…?」

…彩ちゃん…。

慌ててドアに駆け寄つた。ノブを回す手が痺れているのがもどかしい。体を押し付けるようにして扉を開き、

「なんだよ、今日は…」

見合いじゃなかつたのか、と続けようとして、再度、俺は固まつた。彩ちゃんの上半身が真つ赤に染まつてゐる。数週間前に見た、ミナミの生首を下げた姿が重なつた。

「どうかしたんですか…?」

不安そうな彼女の顔に、はつとして正気づく。赤かったのは、真紅のタートルセーターを着てゐるせいだ。

「別にどうもしない。あ…その…。何か用?」

慌てて取り繕うと、彩ちゃんは、珍しく、笑顔を見せずに沈んだ表情で、
「センパイに会いたくて…。聞いてほしいことがあるんですね」と俯いた。

居間に通すと、彩ちゃんは、まず座卓の上のビール缶を見咎めた。

「センパイ、お酒飲んでたの?」

「もう醒めてるよ」

素面で話を聞く環境ができていることを伝える。

ちょっとためらつた後、彼女は座卓を挟んだ俺の対面に着座した。

「あのねセンパイ、…わたし、今日…」

言い済る彩ちゃんに、

「聞いたよ。見合いだつたんだろ?」

努めて平静な口調で補足した。彼女に言わせるのは、なんとなく酷な気がした。

彩ちゃんの大きな目が、さらに大きくなる。

「知つても電話もくれなかつたんだ…」

「…」

予想外の返事だつた。まさか俺のほつが責められるとは思わなかつた。

「だ、だつて…何を言えつていうんだよ?見合いがんばれ、とでも言つてほしかつたの?」

うろたえて言い訳すると、彩ちゃんは、座卓に肘をついて、組んだ細い指先を唇に当てたまま、咳いた。

「したくてしたわけじゃないもん。ずっと、センパイが迎えに来てくれないかなつて…待つてたのに」

脳への血流が堰き止められた気がした。耳障りな破壊音が頭の中に響いてる。

彩ちゃんの言葉は、喜ぶべきもの、のはず…。なのに、俺に湧き上がつていたのは、不快感と怒りだつた。こつちは、深刻な逆境の中、必死に自分を保つてゐる。彩ちゃんの気持ちにまで手を回せといつのは、あんまりにもわがままじゃないか。

いや、違う。そういう意味じゃない。考え方直した。

姉貴のことに集中しようと、他を切り捨ててきたこの1ヶ月の間に、俺の中には強固な殻ができあがつてゐた。カイさんやお袋に乱されただぐらいじやビクともしないぐらいに。でも、彩ちゃんに関しては、まったく油断した状態で…。

散々に疲れきつた自分の内側に入り込まれてゐるようで、動搖を隠せない。

「見合いが嫌なら、自分でそう言えればよかつただろ」

刺々しい気分で彩ちゃんに当たつた。心中では『「」めん』を繰り返すけど、それを言葉にすることができない。

「そ……うん……」

彼女は俯いたまま口ごもる。

それから、小さく頭を振つて、無理矢理な笑顔を返した。

「そう言われると思つたんですけど」

その瞬間、ガードが解けた。彩ちゃんの一の腕を掴み、自分のほうに引き寄せる。小さな骨格が俺の胸の中に収まつた。仕事上で一人の人間として見ていた彼女はそれなりに大きな存在だったが、こうして抱きしめると、怖いぐらい頼りない。

最初は強張つていた彩ちゃんの体から、少しづつ力が抜けていくのを感じた。胸に当たる彼女の吐息が熱くなつていく。抱きしめたまま、髪の中に顔を埋め、目を閉じた。柔らかい猫つ毛が気持ちいい。

彩ちゃんの指が、そつと、俺の背中に回つてきたのがわかつた。

…いま、どんな表情をしているんだろう…。

好奇心が働いて、俺はゆっくりと目を開いた。ピンク色の頬に浮かべた照れ笑いを想像しながら。けれど。

そこに予想した光景はなかつた。

真つ暗だ。下も上もない。自分の姿さえ見えない。

床の下から風が吹き上げた。氷を撫でてきたように冷たい。それが天井に向かつて抜けていく。振り仰いでも、物質はなく、虚しい闇ばかりが広がつていて。

屍ヶ台とも違う。寂寥感の漂つ渴いた台地なら、まだ視界は利いた。今は、まったくの無。視神経が脳へのアクセスを止めてしまつ

たような、強制的な暗闇だつた。

引きずり込まれる恐怖に、俺はもう一度きつて目を閉じた。幻覚だ。すぐに元に戻るはずだ。

「センパイ…痛い…」

彩ちゃんの声がすぐ傍で聞こえた。腕の中に、彼女の感触がちゃんと在る。

「あ、ああ…」

知らずに、かなりの力で絞めつけていたらしい。解放しようとしたらが…。

その弾みに彩ちゃんがいなくなつてしまいそうな気がして、できなかつた。

「痛いです、センパイ…」

彼女の体に過剰な力が入つてきた。逃げ出そうとするのを、俺はさらに抑え込む。

「離れるなよ。探せなくなる」

「だつて…」

苦しそうに喘ぎながら、彩ちゃんは俺の体を押し返してきた。

「痛い。もう放して」

渾身の抵抗で離れようとする彼女の苦痛を慮つて、つい腕を緩めた。隙をついて彩ちゃんが逃げ出す。

とたん、何もない空間に取り残された。

反射的に手を伸ばすと、細い体温に触れた。そのまま掴む。手首のようだ。

「きやあ！」

本気で怯えた悲鳴が上がつた。多少、ショックを受けながらも、俺は、再度、彩ちゃんの体を引き寄せた。腰に手を回すと、彼女はバタバタと暴れた。

「やだつ。嫌ですつてばつ。どうしたの、センパイ？！」

そう叫ぶ彩ちゃんには、この異空間が見えていないのだろうか。

「暴れるなつて！治まつたらちやんと放してやるからっ！」

俺も怒鳴り返した。ビクッとした彼女から、やがて泣き声が漏れた。

長い。一向に闇が晴れない。

「センパイ…あの…苦しいんですけど…」

彩ちゃんの息が上がってきた。

「もう少し力を抜こうか？」

自分ではそんなに強く締めているつもりはない。見えないから加減が難しい。

「はい…お願ひします。…逃げたりしないから…」

咳くように答えると、彩ちゃんはぐつたりともたれかかった。

「ごめん…」

片腕だけ彼女の腰から離し、髪を撫でた。身動きした彩ちゃんは、自分から俺にしがみついた。

しばらく、どちらからも声はかけなかつた。俺は失くした視覚を取り戻そうと必死だつた。本当にどうしちまつたんだ。なぜ、こんなに時間がかかるんだ？

絶望的な気分を押し留めて耐えていると、彩ちゃんが不安そうに囁いた。

「…センパイ。センパイの中で…何が起つてるんですか…？」

「？」

初めてその可能性に行き当たつて、俺は恐怖に言葉を失つた。

ここは俺の内部なのか？いつまでも正常な世界に戻れないのは、俺が完全に狂つたからなのか？

崩壊した自覚はなかつた。…でも、妙な開放感はあつた。

よく我慢したと思う。姉貴がいなくなつてから。

…いや、本当はもつと前だ…。家族の中で頼る対象がいなくなつてから、常に重圧と戦ってきた。10歳に満たないようなガキが、

家族の長として振る舞つてきたんだ。精神に祟るのも無理はない。やりたいことは…いくつもあつたよ。正常なお袋の元で、親父に対する野次のない学校生活を送りたかった。痛々しいほどの中止をする姉貴の、のびのびと生きる姿も見てみたかった。どうして俺がこんな家族の一員になつたのかつて、大声で叫んでやりたかった。

彩ちゃんの指が俺の頬を伝つを感じた。…その軌道に水滴が広がつているのも、自覚した。

「センパイが泣いてるところ初めて見た」

優しい声で指摘された。

「そんなに我慢してたんですね。可哀想に」

そう言つて、頭を撫でてくれた。

返事ができなかつた。嗚咽を殺すのに手一杯だつた。

彩ちゃんは、俺の手を握りながら、ずっと話しかけてくれた。

「まだ見えないんですか?」

彩ちゃんの掌が、金色の軌跡を描いて、目の前を揺れる。

「うん。あー…その手の動きは見える」

俺は、距離を図りながら、彼女の手を掴んだ。

「救急車を呼んだほうがいいのかなあ…」

逡巡する彼女に、

「いけね。保険証取りに自宅に戻らないと」

軽口を返す。彩ちゃんからも安堵の笑いが漏れた。

「センパイはすごいね」

そんなことを言われた。

「え? 何が?」

醜態を見せたばかりなのに、評価をされる理由がわからない。

「だつて、我慢強いもん」

なるほど。悪い意味で言い得てる。

「うん、まあ。確かに、いろんなことを我慢してたな」

「冗談で『彩ちゃん』に対しても」と続けようとしたが、先を越された。

「しなくていい我慢もしちゃう」

「……」

彩ちゃんの頭が腕に当たったのを感じた。

「…ねえ、センパイ。わたしがセンパイを好きなこと…知つてました?」

試すように問い合わせる彼女に、

「本気にはしてなかつたけど」

俺は正直に答えた。

「あ、ひどい」

膨れた頬を連想させる声がある。

「そんなに自分に都合のいいことはないと思つてたからね」

言い訳すると、

「それつてどうこつ意味ですか? センパイがわたしのことをどう思つているか、2文字で答えてください」とやり返された。…2文字つて…。答え、決まつてるじやないか。それ。

「うん、まあ…」

でも、その短い言葉が、なかなか言えなかつた。

「つていうか、なんで文字数限定なんだ? 他の答えかもしけないじやないか」

ちょっと捻くれてもみる。

「それ以外の返事を聞きたくないから」

彩ちゃんの声は真剣だった。

手探りで肩を抱き、指先で彩ちゃんの顔をなぞつた。柔らかい

唇を探り当てる。

「今日は来てくれてありがと!」

フェイントをかますと、

「する…」

と非難が返ってくる。最後まで言わせずに口を塞いだ。
田を閉じて、役に立たない視界を自ら遠ざけた。でも、頭の中に
は幸せそうな表情をした彩ちゃんがはっきりと浮かんだ。

「センパイ、こっち

先を行く彩ちゃんの輪郭が、光の粒子みたいに揺れていた。

「もうすぐ玄関ですから。足元、気をつけて」

先導してくれる彼女に礼を言って、記憶の中にある敷居を跨ぐ。

結局、彩ちゃんの車で病院に連れていくつもうことになつた。俺としては、そんなことより彼女を一晩独占したかったが、

「わたしの顔、早く見たくないですか？」

と説得されて、仕方なく腰を上げた。

はつきりとした背景は、依然、掴めないものの、朧な雰囲気はイメージできる。たぶん今の俺は、目が見えないんじゃなくて、目に見えているものが認識できないだけだと思つ。

彩ちゃんの輪郭が沈み込んだ。コンクリートの土間で靴を揃える音がする。

「靴、履けますか？履かせたほうがいい？」

俺の右腕を取つて誘う彼女に、

「大丈夫だよ」

と笑つてから、そういうえば、いつもの言葉で感情を押し込めてきたな、と思い返した。

「…やっぱりよくわからないや。誘導してくれる？」

頼むと、彼女の手が俺の左手に触れた。

「あと1歩前へ出て…」

慎重に引っ張る心遣いが嬉しくて、つい。彼女を引き戻して、抱きしめた。

「…外に出て、今のいい気分を壊したくない」

そう呟えると、彩ちゃんはじつとしたまま、恐るべく、俺を見上げていた。それから、伸び上がって、軽く唇に触れてきた。

「…ダメです。もう…センパイは…」

叱つてゐる口調の中に、笑い声が混じつてゐる。

「だつて、ずっと好きだつたからね」

まったく抵抗なく、そう言えた。

彩ちゃんの腕が首に巻きつぶ。今度は俺からキスをした。瞼の裏に穏やかな白光が広がる。

風が強くなつてきた。玄関の鉄扉に空氣の塊がぶつかつて、どんどんと音を立て始める。

誰かが乱暴にノックをしているよつた響きだ…、と思つた。

「…今、何時…？」

危機感を抱いて、彩ちゃんに尋ねると、

「えつと…2時」

身を離しつつ、そう答える。

「そつか…」

偶然？時刻も一致してゐ…。

彩ちゃんを部屋の中に押し返し、靴を履いた。ドアノブを握つて聞き耳を立てるが、異音は聞こえない。

「…どうしたの？センパイ、怖い顔…」

不安そうな声が背中にすがりつく。

「別にどうもし…」

ない、と安心させようとしたが、これがいけないんだな、と反省して、前言を翻した。

「「めん。説明をすつ飛ばすのは悪い癖だな。インターホンの件、話しただろ？あれ、今と同じよつた状況なんだ」

できるだけ恐怖感を抱かせないよつたインストネーションを心がけたが、それでも彩ちゃんの緊張が伝わる。

ゆつくつとドアを開く。狭い隙間から激しい冷氣が流れ込んできて、甲高い音を立てた。

「ンクリートの共用廊下には誰もいなかつた。常夜灯は相変わら

ず切れたままだ。それでも完全な闇というわけではなかった。正面の壙の向こうに、花の終わりかけたススキの群生がなびいているのが見える。

ほつとして、まだ室内にいる彩ちゃんのほうを振り向きかけた。

「何もない。大丈夫だよ。病院に行こ……」

……。

……視力が戻ってる……。

改めて完全な外に身を置いて、もう一度、周囲の景色を見回した。羽虫の死骸のこびりつく機能を停止した電灯。剥き出しのモルタルで白く浮き上がった廊下。背の高い壙の向こうに迫る荒涼とした枯れ野原の原風景。

大丈夫。おかしなところはない。たまたま回復しただけだ。外気が刺激を与えたのもしれない。

「治ったよ、彩ちゃん」

あえて嬉々として言ってみた。そうだ。喜ぶべきことだ。重苦しい気分に見舞われることはない。

「え？ ほんと？」

彩ちゃんの声も弾んでいた。外に飛び出して、笑顔を見せてくれる。はずだつた。

正常に戻った俺の世界の中で、今度は彼女が見えなくなっていた。黒い雑な粒子の塊が寄り添うのを、俺は、ぼんやりと、彩ちゃんだと認識していた。

「センパイ……」

彩ちゃんの声が泣きそうに震えた。粒子の一部が俺のほうに伸びて、体に触れた途端に霧散する。

「消えちゃだめ……」

今度は『全身』が俺を突き抜けていった。

「彩ちゃん…！」

彼女が碎けたのかと思つて、俺も思わず声を上げた。散らばつた破片が背後でゆらゆらと再生する。

わずかの時間を置いて、粒子が床に拡散した。嗚咽が聞こえる。泣き崩れる彩ちゃんの姿が容易に想像できた。

なんとなく堀の向こうに田をやると、かさついた手を空に掲げたくさんの「骸が、無造作に転がつて」いるのが見えた。3階から見下ろしているはずなのに、その異界がすぐそばに感じる。

『姉貴の部屋がススキの原っぱの真ん中にワープしたとでも思つたんですか？』。以前、先輩に言つた自分の言葉を思い出す。

そうか…。

溜息が出た。あの底のない暗闇は、この前兆だつたんだな…。

姉貴と間部ミナミは、この堀の外にいるんだろう、と自然に理解した。屍ヶ台の『住人』に引っ張られたんだ。

そして俺も…。『姉貴と代わる』と宣言したことを、今さら思い出す。

彩ちゃんの傍らに座つて、触ることもできなくなつた存在を、少しの間だけ悲しんだ。

それから、声だけでも奪わないでくれたことを、『神様』に感謝した。

「見合いの相手、いい奴だつた？」

聞くと、彩ちゃんは顔を上げたようだつた。

「俺の時みたいに、ちゃんと大事にしてもいいんだぞ」

言ひ含めて、立ち上がる。

堀の上に体を持ち上げ、対面の大地を見下ろした。固い岩盤は広大で、一目では見渡せない。

「でも、こんな中にいるんだよなあ、きっと
もひ、探すしかないだろう。」

深呼吸をして。

俺は屍の大地に飛び降りた。

着地の感触はなかつたが、氣づくと大地の上に立つていた。

意外なことに、そこは夜じやなかつた。薄曇の空に、控えめな太陽が昇つている。ただ、静かだつた。荒れた風音は連續していたけど、それも、生命の存在を搔き消すという意味では、静謐そのものに感じられた。

少しためらつてから後ろを振り向く。もしかしたら、まだそこには俺のいた世界が残つていて、もしかしたら、彩ちゃんの顔を見られるかもしれない、なんて思つたから。けれど、背後はただの闇だつた。こつちに呼ばれた俺が、あちらの正常な世界の彩ちゃんを『黒い粒子』としか認められなかつたように、その闇も湿つた質量を伴つてゆっくりと動いていた。

後悔は、してゐる。

「当たり前だ」

大きな声で断言してみた。ちょっと吹つ切れたような氣がする。大きく伸びをすると、それでもやる氣は出てきた。

「お袋、姉貴も俺もいなくなつたら泣くかなあ」

口にはしたが、実はあんまり氣にしてもいない。お袋は長い時間をかけずに俺たちのことは忘れるだろう。自分のことで手一杯な人だ。

「なんか身軽になつた氣がする」

こんな形で人生を放棄したくはなかつたが、それでも、辛い気持ちばかりじゃない。

歩き出やうと正面を向くと、厄介なことに氣づいた。明るいのに見通しが悪い。空氣の密度が違うのか、まっすぐの視界が蜃氣楼のように歪んでいた。風景とは思えない人工的な色が散在しているから、何か…まあ、あんまり歓迎しないものだらうけど、それが在るのは認識できる。

姉貴は… どんな姿になつているんだろう…。現実の時間から換算すれば1ヶ月。とても原型を保つてゐるとは思えない。

とりあえず人工物に向かつてみたが、これが意外に難しい。近づけば近づくほど視野が歪む。曲面の鏡の中を歩いているような感じだ。右方向にあると思ったそれが、突然、すぐ左手に現れる。…そのおかげで、2度ほど悲鳴を上げる羽目になつた。ミイラの乗つた戸板に接触して、1回は一緒にひっくり返つた。

今も、肌の色の残つた物体に近づいてる。1体1体、姉貴でないことを確かめていかなければならない。視界の右側に展開するその屍にゆっくりと近づき、前例と同じ要領で反対側を見る。…が、な

い。

「あれ？」

慌てて他所を見ると、すぐ至近距離で……、簡易櫓^{やぐら}に吊るされた、内蔵剥き出しの遺体に出食わした。

我慢できずに、その場で嘔吐した。身がついてるのは勘弁してくれ…。

それでも顔を上げる。長い舌を垂らした断末魔の顔を確認して、男であることに安堵した。

血に酔うつていうのを聞いたことがあるが、死体にも酔うみたいだ。だんだん正常な考えができなくなつてきた。

屍ヶ台の惨状を実際に見てみると、芳賀の爺さんが、いかに美談に仕立てていたかがわかる。ここにあるのはミイラばかりじゃなかつた。明らかに、この場で屠殺した様子の数体も目にした。

旅人を襲う野盗だという話も怪しい。江戸期当時の旅は健脚と潤沢な資金が必要だったと習つた。それなのに、この場所には子どもたちのミイラも数多く残されている。思わず目を背けた1体は、傍らの母親にすがりついた左手を切り取られていた。姉貴とミナミじやないことは確認済みだ。

寒村の生活を守るために、やむなく取つた死体売りの商い。それが、いつの間にか殺戮を目的にしたものにすり替えられていつたんだろうか…。

「はあ…」

涙が出そうになつて座り込んだ。ずいぶん涙腺が緩んだんだな、俺。

…まあ、悪いことじゃない。

「彩ちゃんに会いたい。お袋やカイさんには会いたくない。あ。先輩には挨拶ぐらいしておきたかったな」

わざと子どもみたいな口調でわがままを口にした。大人として、理性的な行動を取る余裕がなくなつてゐる。

彩ちゃんの最後の姿が脳裏に浮かんだ。あんなに可愛かつた娘が、ただの霧になつちまたのがもつたまつたの。

…どんな顔で泣いてたんだろう。キスした時の顔も、そういえば見ていない。…あの世に写メとか…送れるわけないか。自分の考えに笑つた。

寝転がつて横を向いた。頭を抱えて丸くなる。耳を塞いだ。これ以上思考が進まないようにな。

帰りたいとは思わないよつ。

「どうとしていた。目が覚めてからも、鈍つた頭を醒ます気力が湧かない。

手足が重い。起き上がりたくない。姉貴には会いたいけど、もう死体は見たくない。

もう一度、目を閉じた。こんなところまで来ておいて諦めるのも馬鹿らしいけど、やる気が萎えた。

「もうどうでもいいや」

そう言つてしまえば、自分の中に燐る姉貴への未練が消えるかと思つた。

「…んなわけ…なかつた」

でも、うまくは行かなかつた。柿の木の枝が折れて落ちた姉貴の、激痛に耐えて『平氣平氣』と笑つた顔を思い出したから。

「おーい」

溶けそうにだるい体を引きずつて歩き回る。返事なんかあるわけない。わかつてゐる。だけど、人間の声を耳に入れておかないと、意識が霧散しそうだつた。

「サチー！迎えに来たぞー」

と怒鳴つておいてから、

「なんかこれつて、あいつの高校の時みたいだな」

と自分でツツコミを入れる。サチの通学路に動物の死骸が置かれる悪戯が連續したことがあつて、警戒したお袋から、下校時に迎えに行くように言われたんだ。

あの時のお袋は、サチの母親としての役目をちゃんと果たしてゐた。考えてみれば、今回のきっかけになつたインターーホンの事件のことだつて、お袋の勧めで姉貴のマンションに行つたんだよな。

家族を大事にすることだけにエネルギーを費やしてきた中学時代の俺と、自分のために生きてみたいと願う現在の俺が、頭の中で、お互いを打ち消し合つた。

「もつと氣楽に行きたいんだよ」とドライに構える俺に、俺が、

「お前つて、でも実は、姉貴もお袋も大好きなんだろ？」と反論する。

「リヨウちゃん、そこ、あたしの席」

俺が親父の膝に入ると、すぐに飛んできて横入りしていたサチは、あの頃、親父が大好きだつた。

「飲み過ぎはよくないけど、お父さんのお酒は明るいからいいわ
ね」
さり気なく酒の入ったグラスを片付けながら、お袋は親父に笑いかけた。

「涼二、お父さんは、あんまり強い人間じゃない。嫌なことがあ
ると、すぐにお酒を飲んで忘れたくなるんだ。お前は俺のようにな
つっちゃいかんぞ」

と言ひ親父に、

「でも、オレ、お父さんみたいになりたい」

幼児の俺はそう返した。弱い人間性に溺れながらも、必死でそれを
跳ね返して、俺たちを愛し続けてくれた親父の気持ちを、あの頃は
理解していたんだと思う。

回想しながら歩いていたら、いつの間にか周囲の景色が変わつて
いた。行く手に盛り上がった小山が見える。斜面に張りついた剥き
出しの岩が、今にも崩れそうだった。実際、崩落の跡らしい大きな
横穴も開いている。

その麓に。

「… 1体発見」

げんなりしながら、俺は、傾斜にもたれかかって座り込む遺体に目
を向けた。嫌悪感が募る前に、足早に近づく。さつさと確認だけし
て、さつさと去ろう。

遺体の前に屈み込んで、土氣色に変わつた顔にかかる前髪を、そ
つとよけた。

「ミイラじゃない。生前と同じぐらい、綺麗なままの姿を保つてい
た。

腕に固く女児を抱きしめているのが、本当に姉貴らしかつた。

泣くことを思い出させてくれた彩ちゃんには、感謝しても、し足りない。号泣して、疲れ果てなければ、俺は立ち直れなかつただろつ。

姉貴とミナミの体を横たえて、楽な姿勢にせると、ほつと溜息が漏れた。見つかってよかつた！

強風が吹くたびにパラバラと破片をこぼす危険な岩盤の下に、あえて腰を下ろした。次に、彼女たちをあの世まで送つてやらなきやならない。

その瞬間が来るまでの間、姉貴にいろんな話をした。

「カイさんが、姉貴を行方不明にしてごめん、つて謝つてきたよ。あの人、気は弱そうだけど、姉貴に対してそれなりに責任感を持つてたんだな」

「お袋薄情なんだぜ。お前のこと、もう駄目かも、なんて言つてさ。あれ、親失格だよな」

「親父の自殺のこと、聞いた。…ん、でも、責めたかった気持ちはわかるよ。再三、飲酒運転だけは駄目だつて、姉貴もお袋も言つてたもんな。あれは姉貴が殺したんじゃないよ。もう気にするな」

風のせいですぐに乱れる髪の毛を梳き分けてやると、心なしか、姉貴の顔が嬉しそうに綻びた気がした。

「…で死んだら天国に行けるのかな、なんて思つて、空を見上げた。歪んだ大気の向こう側に、晚秋のような寂しい光を放つ太陽が見える。

「親父…ちゃんと迎えに来るかな…」
それぐらい、してほしい。俺も姉貴も、親父のことは大好きだったんだから。

「飲み過ぎで遅刻とか、するなよな」

寝起きの悪かつた姿を思い出して、苦笑する。

風に押されて転がってきた小石が指先に触れた、そんな感触だつた。

目を転じると、姉貴の手が、ゆっくりと、俺の手に寄り添つてきただのが見えた。

親父の葬式が終わってから、お袋が泣きながら言つた一言を、今、思い出した。

「お父さんが最後に残したメモにね、『お前たちは当分うちに来ちゃいかんぞ』って書いてあつたの。3人で、ちゃんと人生がんばろうね」

姉貴の手を怖々握ると、強ばつて冷たくなつた細い指が、力強く握り返した。

「サチつ。おい、サチ、生きてるのか！」

呼びかけても目を覚ます気配はなかつた。でも、また指が、条件反射のように、びくつと動いた。

「死後硬直とか言つたら怒るぞ。なあ、生き返つてくれよ」動きとしてはおかしいが、その可能性もないわけじゃない。過度な期待をかけないように自己を牽制しつつ、それでも込み上げてくる確信を抑えられない。

「どうすれば目え開けるんだよ？」

こちらは微動だにしない風貌を凝視すると、脣がひび割れて厚みをなくしているのに気づいた。

「水分…」

そうだ。まず水を飲ませなきや。

周囲を見回すが、赤茶けた粘土の土壤が広がるばかりだ。

水は、高いところに保水され、下に落ちる。背後の小高い丘を見上げた。露出した岩盤に、亀裂が幾筋も見えたが、水滴すら探すことはできなかつた。

立ち上がりつて、小山に沿つて進む。至る前に遠景として見た、この様子を思い描く。崩落跡が横穴になつてゐる箇所がなかつたか？そこなら蒸発し損ねた水溜まりがあるかもしない。

ほんの数十歩先に目的地はあつた。地面から2メートルほど持ち上がつた壁面に、高さ1・5メートルほどの洞が開いてゐる。飛び上がつて下端に手をかけ、体を持ち上げた。よかつた。ワンゲルの時の筋肉は、まだ落ちてないみたいだ。

…けれど、せっかくやつてきたこの場所は、早々に退散しなければならなかつた。洞窟のすぐ入り口から奥に向かつて、異世界へと

誘うあの黒い粒子が渦巻いていたから。

「いつに巻き込まれたら、姉貴とまた離されるかもしれない。

洞から飛び降りて、いつたん姉貴の所に戻った。こんな危険な場所から遠ざけておいてやらなきやならない。

抱え上げると…驚くほど軽くなっていた…。

「いなくなつたの、夕飯前だつたもんな…」

空腹にどれぐらい耐えたんだろう。それを考えると胸が痛い。

30メートルほど離した場所にサチを置き、ミナミの元に走った。同じ運命を辿つた女兒にも強い同情は感じていた。抱き上げる前に、数度、頬を叩いたが、ミナミのはうに蘇生する兆しはなかつた。

2人を安全圏に置いて、再度、水探しに向かつ。

そういえば、この台地の果てはどこにあるんだろう？屍ヶ台の下には芳賀さんたちの集落があつたはずだ。そこに助けになるものが残されていないだろうか。

できるだけ直進方向に、それもかなりの距離を歩いた。たぶん、3キロは下らない。

唐突に地面が終わつた。視界が正常じやないせいで、危うく崖から転がるところだつた。俺の落とした小石が、切り立つた谷に落ちていく。

「…」の垂直壁を登攀具なしで降りろつてか…

微かに下の集落の屋根が見えていた。フリーで下りられる距離じゃない。

途中の足場で休憩を挟みながら、なら可能かもしれない。

時間と、それから俺自身の体力とを計算する。…どうしても『無理』という答えが出る。が…。

…いいや。もう考えるのはよそう。落ちても死ぬだけだ。姉貴に水を持つて行つてやれなかつたら、結局は俺の運命も決まるんだか

慎重に90度近い傾斜の岩場に足をかける。幸い、風の浸食が岩盤に傷を作ってくれていた。これならルートを確保しやすい。

「あんた、高所恐怖症になつたことあるか?」

山岳救助の折りに指導してもらった民間の救助隊員が、2日目の夜にそう聞いた。

「ならないわけないですよ」

当時、大学の先輩の1人が没頭していたロツククライミングに引きずり回されていた俺は、苦笑しながら答えた。

「そうか。じゃあいい山男になるな」

指導員はそう言つて笑つた。

「2度と山なんか行くか?」

汗の吹き出た額を拭いつつ悪態をつく。

「こんなに苦労して助けてんのに、死んだら承知しねえぞ、サチ!..」

叫んだつて喉が乾くだけなのに、腹が立つて気が收まらない。

安定した足場に会うたびに、身を預けて目を閉じた。10カウントする間だけ、体と脳を休める。時間を気にするのはやめた。焦りが出れば疲れが倍増する。

「…半分は来たな」

上と下の距離を見比べて安堵した。着実に成果を感じられるのはありがたい。ここでも目を閉じて休憩を取つた。気力が疲れを上回つている。大丈夫だ。このまま無事に下りられる。

カウントが0になつた。でも、知らず、俺は深い眠りに陥つていた。気分がいい…。自分が空っぽになつたみたいだ…。

「涼…!」

突然の大声に、びっくりして起き上がつた。…そしてゾッとした。

俺の体は斜面から大きく剥がれて、落ちる寸前だつた。

マンションの部屋で姉貴の生存を諦めかけた時も、同じことが起きたのを思い出す…。

声の正体はもうわかつたけど、もしかしたら姿が見えるんじゃないかと、首を巡らした。だけど田に入ったのは別の現象だった。少し距離を取つた場所の岩肌が、強風に煽られて細かい崩落を起こしている。

…考えてみれば、激しく浸食されているここだけ、同じことが起きてても不思議じゃなかつたんだ。なのに俺の周囲は、見えない膜にでも守られているかのように無風だつた。

『当分こっちに来ちゃ いかんぞ』、と、改めて親父に叱られた気がした。

足の裏に大地の感触が届く。

そのまま地面に倒れ込んで、大の字になつた。
着いた…。

手も足も、もう動かない。ちょっとの間だけ、寝よつ。

目を閉じると、傍らに気配がしたような気がした。確かめる必要はない…な…。

水の音がする。地面の下から。

田を覚まして頭を起こす。その途端に音が消えた。もつー度耳をつける。…やつぱり地下水の流れる気配がした。

水がある！俺は飛び起きて周囲を見回した。井戸があつてほしい。江戸風俗の資料館などで見た水場の構造を思い出す。時代劇では長屋の外にあるのをよく田にするが、一般的な民家では…たしか家屋の中だ。

勾配のある荒れた土地に合わせるように歪んだ小屋が、とりあえず1番手近だつた。走り寄つてみる。

田の前にすると、凄まじく粗末な建物だつた。壁は骨組みに葦を組んだだけの吹きつ晒しで、ところどころ破れている。入り口は板戸だが、腐つて下部が抜けている。広さは8畳分ぐらいだろうか。屋根だけが高くて、住居というよりは蔵のよつな様相だつた。

すぐには入る気にならず、周囲を回つて、隙間から中を覗いた。

餉^すえた刺激臭が漂つてくる。暗いので内情はわからない。

水は…ありそうにない。でも、確認だけはしておかないと。

表の板戸に戻ろうとした時、突然、その板戸が軋む音がした。ぎくつとして、思わず身を潜める。

人がいる…？

足音がしていた。1人じゃない。2人はいる。

…考えてみれば不思議はないかもしない。屍ヶ台の死者たちに呼ばれてここに来たと思つていた俺は、生存者の存在を頭つから否定していた。けど、江戸時代にタイムスリップしたのだと思えば納得が行く。ここには芳賀さんたちの先祖が、今もまだ生活しているんだ。

だつたら、声をかけたほうがよくないか？姉貴を救う可能性が大きくなつてきたことに、内心、躍り上がつた。この集落の住人は台地との間を行き交つていたはずだ。彼らに協力してもらつて、姉貴をここに運び込めば、水だけでなく食事も与えられる。

勇んで歩き出せうとした俺の耳に、聞き覚えのあるセリフが届いた。

「女のは珍しいでしょう。腹ん中も全部残つてますよ」

足が凍りついた。これは、姉貴のマンションで見た幻覚の場面なのか？

会話が続く。

「胎児はないのかね？」

「もう生んじまつたあとです。子どもの方は、ほら、隣に」

「そうか、残念だな。胎児なら全部が商いになるんだが」

「今度は用意しておきますよ」

下卑た笑い声が響いた。

……。『用意しておきますよ』。その言葉が頭の中にリピートする。

妊婦をどこから調達するつていうんだ？野盗稼業でそんなに都合よく手に入るものじゃないだろ？』…。

もしかして、俺はすごい思い違いをしていたのかもしれない、と気づいた。元々は二分した勢力を持つていた、この土地。死体が大きな財を成すことを知つた双方が、協力して他所の人間を細々と狙うだろ？それより、お互いを相対させ食い物にしたほうが、利益は跳ね上がるんじゃないだろうか？

いや待て…。矛盾もある。芳賀さんの一族も先住民の一族も、現代まで系譜を繋いでいる。潰し合いをしたのなら、どっちかが絶滅していくもおかしくはない…。

「若い女が手に入らないのが残念だな。さる方面の奥方衆には人気

があるんだが』

『売人らしい男の声が、まだ続いた。

『仕方ねえです。産むほうがいなくなつちやあ商売はできねえ』
集落の人間らしい声が応答する。

『そりや…。そういう采配がちゃんとあつたのか…。』

完全な余所者の俺がこの場に居合わせるのは、非常にまずい気がした。それに、急がなきやならない。もし集落の誰かが台地に登つて姉貴を見つけてもしたら…。

そつと建物から離れようとすると、中から派手な音がした。固いものがひっくり返つたよつた。

『おうつ。これこれ。暴れたら傷がつくだらつ』

住人のほうの声がする。

『腐る前に胎盤を取り出しておくか。抑えておいてくれ』

『売人の言葉と金属の刃音が重なる。

…ちよ、ちよつと待て…。

体が固まつた。もしかして、『女』つていうのは、まだ生きてるのか？

幻覚の中では、女はミニイラ化して完全に死んでいた。けど…今、

ここが同じ状況だという保証はない。

かちやんかちやんと耳障りな金属音に混じつて、啜り泣きのよつな声が聞こえてきた。やばい。マジでそれっぽい。どうしようか…。いろんな選択肢が頭を巡る。

このままここを離れてしまえば、惨劇の様子を聞かずに済む。それが一番理想的に思えた。俺にはサチがいる。こんなことには関われない。

背中を向けて外に踏み出す。…つもりなんだけど、足が地面に張りついていた。正義感は霧散しているが、良心だけが居座っている。

『せめてここにいてやろう』と。

「ああ、もうつ！」

結果なんか知るかっ。大声を出すと、中からの音がピタッと止んだ。

身構えたまま、しばらく待つた。走り出でてくるだらつ連中とビリ
やつて対峙しよう…。

不安と動搖に身が竦む。喧嘩なんか…したことないんじやないか、
俺？

けれど、いつまで待つても2人が姿を現す様子はなかつた。…な
ぜだろう。俺の声が聞こえなかつたんだろうか？でも、そんなはず
はないような…。

恐る恐る移動し、板戸の隣まで接近した。抜け落ちている下の部
分から覗くが、人の足らしきものは見当たらない。
？どうしたことだ？出ていった気配はないのに…。
疑問だらけの状況に混乱していると。

また声が聞こえ始めた。

「女のは珍しいでしょう。腹ん中も全部残つてますよ

板戸を開けて、中に入った。

何もなかつた。黴の匂いと埃にまみれた何らかの骨組みが残つて
いただけだ。

天井を見上げると、明かり採りから黄みがかかつた陽光が注いで
いた。

…寂しい場所だな…。

今の惨劇は、きっと、本当にここで行われたものなんだ、と思つ
た。生きながらに解体された母親の無念が、この場所に留まって、
救われない回想を繰り返しているんだろう…。

俺の前に幻覚として現れたのは、この母親が、マンションと屍ケ
台を繋いだ怨念の本体だからかもしれない。

「…ひでえよなあ…。これじゃあ、150年祟るのも無理ないな…」肉体的な苦痛と、自分でなく子どもまで『食料』にされた彼女の精神的苦痛を図ると、俺が代わりに復讐してやりたいほどの気持ちになつた。

戸板を外し、取り去れるだけの側壁の葦を引っこ抜く。この陰気な建物から、母親の魂を出してやりたかった。

相當に風通しが良くなつたところで、土がむき出しになつた床に目を転じると、細い骨が頬りなげに転がつていた。

母親のものだと、思った。

俺はそれを拾つて、脱いで腰から下げていた上着のポケットに入れた。

「子ども…見つからないな…」

それらしい痕跡はなかつた。子どもだけ処分されたのか…それとも、上に連れていかれたのか…。できれば見つけて、この骨をそばに添えてやりたい。

井戸を探すうちに、村の現状を把握できるようになつて行った。どの家屋も、屋根が抜け落ちていたり、それ自体が傾いていたりと、廃屋感満載だ。廃村になつて長い年月が経つていてることを連想される。

「実際のこの土地は開発が進んで見違えるけど、こっちの世界では150年の年月がそのまま保たれているのかもしれないな」進歩していく生者の空間に比べて、留まることしかできない死者の村という対比が生々しかつた。

「ずっとここにいたい奴なんて…いないよな…」

ポケットの中の彼女を握り締めながら、誰に、という目的もなく尋ねた。屍ヶ台に縛られている霊たちが早く解放されればいいのに、と思つ。

台地から離れて村落の一番奥まで進んでみると、すいぶんと大きい屋敷に行き当たつた。まだ無事に残っている入り口の戸を開くと、すぐに井戸が目に入る。

「よかつた。水は？」

駆け寄つて確かめると、顔が映るほどの中距離まで満たされていた。

鶴瓶を落として汲み上げ、まず自分が飲み干す。いろんなことがあつたショックで忘れていたが、喉が痛むほどヒリついた。それから、母親にかけてやる。粉を吹いていた表面が流れ落ち、細い骨が更に小さくなつた。

「……」

なんとなく彩ちゃんの抱き心地を思い出す。

「もう一回……じゃなくて……気の済むまで、好きにさせてくれないかなあ……」

もしも帰れたら、とは口にしなかつた。でも、帰れないという絶望感は、もうない。

土間から上がり框を経て、小さな板敷きの部屋に入った。木製、しかも漆塗りと思われる食器棚が、数竿、並んでいる。

「ずいぶん、贅沢な暮らしをしてたんだな……。」

これだけの財力を持つていたということは、ここは、『この村の支配者』のほうの屋敷なんだろう。

無意識に母親の骨に手をやつた。彼女を殺した一族が住んでいた家だ。怖がるかもしない。

水を運ぶ道具を探すつもりだったが、自分でもよくわからない衝動に駆られて、奥に向かつた。小刻みな部屋が連続している。今の日本家屋と違うのは、北側に当たる部分に縁側ができていることだつた。屋敷内を結ぶ通路を兼ねていてるらしく、屋外に出たり家内に潜つたりと複雑な経路を辿つていてる。

道筋に導かれるままに進むと、暗い大きな部屋に出た。今までの建物とは別棟になっているみたいだ。離れだろつ。

部屋の中には、豪華な仏壇があった。上を見上げると、3体の遺影がある。一番新しいと思われるものは写真だった。

「この顔、どつかで…」

と呟いてから思い出す。マンションの管理人・藤原さん、だつたかに、似てる。

「支配者は先住者のほうだつたんだな…」

現代において、彼らがあれほど恐々とした生活していた意味が、よくわかった。こんな残酷なことをし続けたのなら、芳賀さんたちに負い目を感じても仕方がない。

遺影を掴んで、通路から外に投げ捨てた。それから仏壇を引き倒した。紫檀の扉が外れて散乱し、位牌が氣味のいい音を立てて折れる。

「あんまり気は晴れないだろうけど」

骨に触れると、スカスカとした感触だったはずのそれが濡れているのを感じた。満足したのかもしれない。

木工の水筒を8本ほど手に入れて屋敷を出た。水の重さが大したことないとはい、荷物を持ってあの崖を素手で登るのは難しい。どうしようか…。

「ここ」の集落の人間が台地に登るときは…道があつたはずだよな…」

また村内をうろついてみるとする。

俺が下りてきた崖からそもそも離れない壁面に、地均しした細い階段が、かすかに痕跡を留めていた。

「…じつちも楽しそうだ」

苦笑したが、でもクライミングよりは、はるかに体力は使わずに済むだろう。

成人1人がやつと通れる幅の、それも手がかりもない不安定な悪

路を進む。風が吹くたびに体が持つていかれそうだ。必死で絶壁の瘤にしがみつく。

「親父は、もう守ってはくれないのか…、と少し寂しくなった。これぐらいなら自分で切り抜けろってことかな…。」

縄でくくりつけた背中の水が苦痛になつてきた。登山の時は、テントから食器まで、全部持つても歩けたのに。思つたより疲労の蓄積が激しいのかもしない。

「あのさ、水、なんで行李に入れずに、直接、背負つたか、わかる？」

気を紛らわせるために、俺は母親の骨に向かつて話しかけた。

「荷物つてさ、体に密着していたほうが軽く感じるんだよ。行李だと背中から浮くだろ。だから…」

所詮、独り言だから、全部を説明しきる前に黙りこむ。

限界を超えた疲れは妄想を呼びぶらし。いつの間にか、俺は、母親の存在を背中に感じていた。長い髪が風になびいて肩口から覗く。俺の呼吸に合わせて、彼女からも乱れた吐息が上がつた。

「…リアルだな…。まあ、役得だと思えば、いいか…」

水筒よりは女の体の感触のほうが、正直、嬉しい。

「彩ちゃん、立ち直つたかなあ…」

こんな発想をしている俺を、まだあの娘が心配しているんじゃないかと、ちょっと氣の毒になつた。

「ゴールは遠かつたが、姉貴の蘇生する様を思い描いていると、希望だけは湧いてくる。

「あいつ、最初になんて言うかなあ。風呂に入りたいとか言つたら、また水を取りに、ここを往復しなきゃならないな」

笑いながら、姉貴が潔癖症であることを説明すると、背中の母親は楽しそうに頬をこすりつけた。

「それよりも飯が先か。…まさか、姉貴にも人間を食えとは言えな

いもんな

軽はずみに言つてから、

「あ、ごめん」

慌てて謝った。被害者に言つことじやない。

「その……俺のいた世界では、食人つていうのは、ちょっと特殊な……儀式とか嗜好とか……まあ、そんなふうにしか扱われないことでさ」

言い訳を続ける。

「この時代では生存のためだつたんだろう？芳賀の爺さんから、この屍ヶ台のことを聞いたあとに、食人の歴史を調べてみたんだ。飢饉の時に子どもを交換して食つたとか……塩漬けにして保存しておいたとか……だから、俺、……実は、この村の悪習についても、貧しい時代のことだからしうがなないんじやないか、ぐらいに思つてた」背中が濡れたような気がした。母親を泣かしたと思つて、さらにも氣まずくなる。

「だけど、あんたみたいな……生きてるうちから中身を取り出されると、とかつていうのは……、ちょっと、『生活のため』では割り切れないもんがあるんだよな……」

薬の売人の声が過剰な熱っぽさを帯びていたことに、今になつて気づいた。人肉嗜好。長い間、アングラな商売に触れていると、そういう感覚が育つのもしれない。

「可哀想だつたな」

囁らすしも、彩ちゃんが俺に言つてくれたのと同じ言葉で慰めると、母親も嬉しそうに身を震わせた。

そういうえば、こここの時間の感覚つて、どうなつてるんだろ？』一
向に傾く様子のない太陽を見ながら、そう思った。

姉貴はまだ生きている可能性が高いが、ミナミはすでに手遅れだ
つた。遭難でも、栄養の蓄えの少ない子どもは先に死ぬ、と救助隊
員から聞いている。とすると、この世界でも、時間の流れは、ある
程度、正常なわけか…。

実はさっきから強い空腹感を感じている。ここに引っ張られてか
ら、体感的には10数時間が経っているように思つ。『餓死』とい
う言葉が人事じゃなくなつてきた。

「水があれば1、2週間は生きられるはず。…でも、動けなくなつ
たら水も調達できないな…」

その前にここから脱出できればいいが…。

最悪、屍ヶ台のやり方で食料を確保することも考えた。俺が倒れ
たら、姉貴を現代に帰せない。

台地の上に小山が見えた。あれを目印に歩けば、姉貴たちのとこ
ろに苦もなく辿りつける。

「そういうば、子ども、探してやらなきゃいけないか」

ポケットの骨にそう問い合わせた。それらしい遺体はかなりの数に及
んでいたはずだ。

芳賀の爺さんが『女はたくさんの子どもを産んだ』と言つていた
のを思い出す。生命力の弱い乳児の数を補うためだと聞かされたが、
本当は、売買のために強制的に取り上げられた数も少なくなつた
んじゃないだろうか…。

「『』めんな。先に姉貴のところに行く。その後で見て回る」
謝ると、骨の感触が、また湿つたものに変化した。

…気のせいかな。視界が、どんどん、よくなつていいくつに見える。

姉貴とミナミの姿はかなり遠くから見通せた。走つて近づいてみたが、途中で息切れてしまつたほどの距離がある。やつぱり、あの厄介に湾曲した空気は払拭されてるんだ。

晴れやかな気分になつた。だつて、これはいい変化だ。重苦しい閉塞感から解放されたんだから。

もう少し奥に目をやると、遺体の群れが小さく見えていた。ひどく広大な土地を徘徊した記憶があつたが、それほどの面積を持たず、屍ヶ台は端を見せている。

「なんでこんなことが…」

呟いてから、ふと、ポケットを見た。

「もしかして…？」

死者の怨念で歪められた世界が、彼女を救つたことで、正常に向かつたのかもしれない。

「ありがとう」

礼を言つと、母親は、また艶やかに色を変えた。

姉貴とミナミは、なぜか抱き合つて眠つていた。俺、彼女たちを隣り合わせで置かなかつたか…？

「姉貴は、また動いたんだろうけど…」

ミナミの腕が姉貴の背中に巻き付いているのが解せない…。

そつと引き剥がし、少女の頬に手をやつた。俺の拳ぐらいしかない小さな顔は、まったくの表情を消して、冷たく強ばつている。念のため、口元に水を流してみた。固く閉じた唇の上を流れ落ちるだけだ。反応はない。

…今まで、俺はミナミに対して、それほどの関心を持つて来なかつた。むしろ、姉貴を巻き込みやがつて、と、殺意さえ覚えていたほどだ。だけど、こんな小さな実体を見ていると、それが大人としてどれほど冷淡な感情だったかを思い知る。

「お前も、ずっと辛かつたんだよな」

親父の事故のことで周囲からずつと責められてきた自分の子ども時代と、間部アリサの、娘を全否定する言葉を同時に思い出して、この子の耐えてきた重さを理解した。

「…はあ

溜息が出る。姉貴が蘇生しない。

手先の反応はあつた。つねると驚いたように跳ね上がる。水をかけると、嫌がつて払いのけた。なのに、口の中に流し込んだ水分を飲み下そうとしない。業を煮やして強引に注いだが、喉から先に沈んで行かず、口内いっぱいに溢れてしまった。窒息させるんじゃないかと、慌てて横向きして処置する。

呼吸は…よくわからない。心臓は動いたり止まったりしてゐ。マツサージもしてみたが、肋骨を折りかけてやめた。

「もつと簡単に目を覚ますと思ってたよ。」

性格から意固地だつたサチに向かつて文句を言つた。爪先がわずかに持ち上がつたのに苦笑した。聞こえてるのかな。

「俺が来ること、わかってる？」

呼びかけると、これには返事がなかつた。

諦める気はないが、手詰まりなのも確かだ。俺は仰向けに転がつて対策を考えた。

「…姉貴の体には、魂がもう残つてないんだろうか?」

非科学的な言い方だが、この靈魂の支配する世界では、そんなイメージが正しいような気がした。

「捕まえて体に戻す、つてことができたら、生き返るかな?」

虫取り網で人魂を追いかける漫画チックな想像が浮かぶ。

「…馬鹿馬鹿しい」

自分に呆れて横を向いた。神道や仏教にも招魂の方法はいくつもある。なのに、なんでそんな発想なんだか。

視界の隅にミナミの体が入った。なんだか、妙に黒っぽい。

「……」

起き上がって確認すると。

少女の小さな体には、蠢く黒い霧がびっしりとまとわりついていた。

凄惨な光景に、声が出なくなつた。女児の肉体は、わずかずつ形を減らしていた。霧がミナミを『食つて』るんだ……。

黒い粒子の一部が俺のほうに伸びていた。恐る恐る目で追うと、

母親の骨が入つたポケットに繋がる。

慌てて彼女を取り出し、投げ捨て。

…ようとしたが。

触れた途端、体中の血液が一斉に消滅したようなブラックアウトに陥つた。

恐怖に抗う時間すら持たず、俺の意識は拡散した。

…「じーだらり、じーは。

気づくと、見覚えのない部屋の中だった。ずいぶんと汚れたところだ。弁当の空容器や歛の浮いたペットボトルが放置されて、文物の下着や服が散乱している。

姉貴のマンショント間取りが同じだ、と気づいた。エプロン姿の彩ちゃんを堪能した台所の流しを確認すると、同じ照明、同じシンクに、統一感のない食器が、食べ終わつたままの状態で投げ込まれている。

突然、幼児の声が聞こえた。女の子だ。涙声で訴えている。

「明日の遠足、お弁当作ってください…」

母親らしい若い女が金切り声を上げた。

「なんであたしがそんなことしなきゃならないのよつ！面倒かけるなら遠足なんか行くなつ！！」

女児の泣き声が大きくなつた。壁越しに聞いたミナミの声と同じだつた。

視界が暗転する。

開けたと思つたら、また同じ場所に出た。ただ、レイアウトがちよつと違う。カーテンの柄も変わっていた。

目の前にミナミがいた。姿が今より少し幼い。幼稚園児ぐらいたつ。白いブラウスを着て、嬉しそうに歌つている。

小太りの女が、俺に背を向けて座つていた。ミナミを見ている。間部アリサだと思つた。

「お母さん、生活発表会、がんばるね」

幼女は健気な笑顔を見せた。状況がわからない俺の頭に、…誰の親切なのか、経緯が流れこんでくる。幼稚園の行事で歌を披露することになったミナミのクラスは、園側の計らいで全員が同じ衣装を贈

与された。ふだん、母親からの協力が得られず、園で肩身の狭い思いをしていたミナミは、その『みんな一緒』がとても嬉しかったらしい。

「ねえ、あんた、そのブラウス、皺だらけでみつともないよ
アリサの不機嫌な声が、ミナミの歌をストップさせた。

「もうちょっと言いようがねえのかよ」

腹を立てた俺は声に出したつもりだったが、自分の耳にも届かなかつた。

俺の存在は、ここでは実体じゃないんだな、と理解した。アリサもミナミも、すぐそばに立つていても気がつかない。

「アイロン、かけなきゃいけないね」

アリサが重そうな体を起こして、別室に消えた。何か不穏なものを覚えて、俺はミナミに近づき、聞こえるはずのない忠告をした。

「なあ、外に行こう。あの母親と2人でいたら、お前、何されるかわからないぞ」

ミナミは明後日の方に向いたままだ。

アリサがアイロンを持つて戻ってくる。手近のコンセントに電源を差し、熱が上がるまでの時間が待ち切れないともいうよ、何度も手元のボタンを押した。そのたびに蒸気が吹き上がる。

「ちょっとおいで」

アイロンというものをあまりわかつていらない様子のミナミは、アリサの呼びかけに素直に応じた。

「何するの？」

「後ろ向いて」

ミナミが背中を向けた。

馬鹿っ！俺は慌ててアリサの手を跳ねたが、まったく抵抗を感じずにつり抜けてしまった。

高温のスチームを吐き出しながら、アイロンが少女の背中に押し当たられた。

ミナミの凄まじい悲鳴と、アリサの哄笑が重なる。

見ていられなくて、俺は耳を塞いでうずくまつた。

場面がまた変わった。何もない空間に放り出される。

頭を上げると、真っ黒な粒子に包まれた自分の手が見えた。

輪郭が妙に歪んでると思つたら、知らずに泣いていたらしい。

「…何がしたいんだよ…？」

特定の意思が俺の精神を蝕もうとしているのを、もう確信するしかなかつた。助けたはずの女の骨から染み出した惡意が、全身に張りついているのを感じる。

「…関わらなきゃよかつたか？」

理不尽さも覚えたが、余計なことをしたのかもしれない、とも思った。人間としての扱いを踏み越えられた彼女が、人間としての感覚を放棄してしまっていることは、想像できたはずだから。

網膜に30代ぐらいの細身の女が映つた。艶やかな真紅の唇を歪めて…笑つている。

伸ばしてきた手を、払いのけるか掴むか迷つたが、拒絶してここに留まつても仕方がない。腕を差し出すと、俺の指の間に、彼女の指が絡んできた。その感覚は実体そのものだった。

白い着物の胸元から豊かな乳房を覗かせながら、彼女は俺に身を預けてくる。

「現世は希望…」

小さな湿つた声音が、彼女の口から漏れた。

「死ぬのは弱いから…。要らないから…。生きることは強い者に譲つて、あたしはあの場所に還ります」

「…現世つていうのは、生きてる人間の世界のことかな？そっちには希望があつて、あんのいた世界には…何があるんだ…？」

混乱しそうな言葉に注釈を加えて聞き返すと、狂人のように空っぽの笑顔を見せる母親は、

「優しさがあります」

と答えた。

「それは逃げるだけだ」

否定すると、また周囲が暗くなつた。

「いい加減にしてよね、毎晩毎晩！」

視界が戻る前に怒鳴り声が響いた。…サチだ…。

「自分の子どもを何だと思つてるのよ…母親が子どもを大事にしてあげなくて、どうするの？！」

久しぶりに聞いた元気な声だつた。

会いたい。そう思つたとたん、サチのすぐ目の前に移動していた。聞部ミナミの家の玄関口だ。連夜の虐待の声を、アリサに聞こえるようになつたんだろ？

例によつてサチには俺は見えていない。…見えていたら、きっと言い訳しただらうから。

「泣いてないからね？」

と…。

姉貴のことを『サツちゃん』と呼んで親しんでくれた隣家の母親が、サチの頭を撫でながら、慰めていた。

「しようがないよ、サツちゃん。そういう家庭もあるもの」

「『そういう家庭』に育つってきたから悔しいんじゃない。親が責任果たさなきや、子どもは無理をするしかないのよ」

姉貴は泣きじやくりながら吐き出した。

…俺は…姉貴に頭を下げることしかできなかつた。家族の本当の姿も知らず、姉貴一人に全部を背負わせてた自分の体たらくを、改めて痛感した。

どうやら、ミナミの周囲のでき」とを、時系列で追つていふつだ。次に飛んだのは、薄暗い部屋の中だつた。万年床にアリサが寝ている。その隣で、ミナミが膝を抱えていた。

これは、たぶん、事件の起つる直前だ。ミナミが立ち上がり、台所から包丁を持ちだした。

「……なあ。なんでこんなものを見せるんだ?」「

母親の骨に尋ねると、背中に柔らかい肉感が巻きついた。

「知つてほしー…」「

とだけ答える。

ミナミは、でもアリサの布団には行かなかつた。寝室の入り口に立ち、夕飯の支度もせずに寝入つている母親を、じつと見ている。

「お母さん、ミナミね、どうして生まれたのかなあ」

女児の震えた声に、俺のほうが力が入つた。

「生まれ変わつたら、今度は好きになつてもらえるかなあ」

泣くこともなく、その場に座り込み、包丁を掲げる。

俺は背中の女の腕を捕まえ、無理矢理、目の前に引きずりだした。「ミナミが刺したのは母親じゃなかつたのか? あんな子どもにどうしてこんなことまでさせるんだ? !

怒鳴りつけると、女は、やつと焦点の合つた目をして、微笑んだ。

「行つてあげて」

そして、俺に抱きついてから、…ゆつくりと溶けた。

湿つた黒い粒子に変わつた彼女が、俺からミナミへ、橋を渡すよう繋げていく。

大股でミナミに近づいて、包丁を取り上げた。少女はびっくりした顔で俺を見上げた。

俺は…なぜか、まつたくためらうことなく、アリサに歩み寄り、肥満で膨らんだ腹に、刃を突き立てた。

絶叫が響き、暴れ狂つたアリサが室内の物を壊しながら、玄関に逃げていく。

俺はミナミの手を握つて、その後を追いかけた。女児は呆然としながら、黙つて従つている。

玄関を開け、アリサが表に転がり出た。その直後に、姉貴の鋭い声が飛ぶ。

「誰か来てー救急車を呼んで!」

頭の中にあるシナリオは、姉貴にミナミを預けるといつ。でも俺は迷った。事実の通り、ミナミと姉貴を接触させれば、2人は屍ヶ台に飛んでしまう。

「…俺と、ここにいようか…」

ミナミに問いかけると、反射的に領きかけたが、すぐに怯えた顔になつた。

「やだつ。お母さんつ。お母さんつ」

逃げ出す女兒を捕まえようとすると、腕が透けた。ミナミに繋がつていた黒い霧が、俺の元に戻ってくる。もう干渉できない…。

血で汚れた掌を、また粒子が侵食し始めた。
…どこへ連れていかれても、もういいや。自分が人間を刺したといつ驪気なショックと、アリサのような母親がいる世界に住んでいたという嫌悪感に、力が抜けた。可哀想な子どもも、もう見たくなり。

現代も、屍ヶ台の大地と似たようなもんだ。救いがない…。

周囲から景色が消えた頃、近づいてきた女の手が、俺の頬に触れた。そのまま首をなぞつて、服の中に入つてくる。
このスキンシップは、甘えの一種なのかな…。明確な意図がわからず、俺は、戸惑つたまま、手を抜こうとして。

…驚いた。

体温の低い滑らかな皮膚を想像していたが、彼女の感触は、干からびてささくれだつたミイラのものだった。

ああ、そうか…。

「…牡丹燈籠つて怪談、知つてる?」

聞いてはみたが、答えが欲しかったわけじゃない。女の靈魂に魅入られた男が、とり殺される話をしたかつただけだ。

「俺…あんたに好かれたってことなのかな…?」

絶望感に涙が出てきた。こんなところで、負の感情にまみれたまま、俺はこの女と共存していくんだろうか。

女が、俺の脇に身を寄せて、腰に腕を絡ませてくる。漆黒だと思つていた長い髪は、惨めに抜け落ちて頭蓋を晒していた。

気持ち悪い、と本音では思った。

…でも、その頭を撫でてやつた。

こんな姿で執着してくる彼女を、畏怖の感情だけでは見られなかつた。

「… やつを、元の世界に帰るって言つただろ」

声をかけると、黒ずんだ薄皮を張りつかせた顔が、俺を見上げる。

「そこで、また、あの回想を繰り返す気？」

せめて、その行為だけでもやめさせたい。

「俺が一緒にいれば… 思い出すことも… その、減るのかな? だつたら

ら

このままとつ殺してもらつていこよ、と続けよつとして。

やめた。

「あのさ、俺、… 恋人、いるんだ」

彩ちゃんのことを、そう断言していいものかは、正直、微妙だったけど、わかつてもらいたくて引き合ひに出した。女は、感情を現す表皮を失つた顔を歪める。

「だから、やつぱり帰りたい。自分のことばかりで悪いけど…」

彼女が寂しがつた氣がして、罪悪感が湧いた。でも、田を逸らして続ける。

「後な、姉貴も一緒に連れていきたい。サチはこんなところで死んでいい人間じゃないし」

アリサや、アリサの母親のような醜怪な人間が跋扈する現代に、姉貴の正義感は必要だつと思えた。

「それから、ミナミ…。あの子も、もう一度やり直しをさせたい。あんたが見てくれた実情を知つたら、このまま人生を終わらせるのは悔しいだろ」

完全に諦めていた少女の復活を、今さら望むのは後ろめたいような気もしたが、ミナミだけ遺体で連れ帰るのは、もう願い下げだった。女の表面がゆつくりと変化していき、白い肌に無垢な瞳をはめ込んだ造作ができるがる。

唇に朱が乗つたところで、彼女は身を起こし、俺に口づけをしてきた。

ぎょっとしたが、抵抗するよりも、思い通りにさせやうと、そのまま応えた。

頭の中では、必死に本性を思い出す。彩ちゃん、「めん。これは浮気じやないから。

制御も虚しく、理性が溶けかけたところで、衣擦れの音がした。目を開けると、半身をはだけた彼女の乳房が目に入った。慌てて引き剥がす。

「ちょ、ちょっと待つて。それはまずい。俺、カノジョいるんだつて！」

「潤んだ目で見返す視線が、痛い。

「さりや…。つい、逸した視線をこいつさりと戻した。透けるような色白の肌に、丸みを帯びた肩。その下には、思いの外、ふくよかな膨らみがあつて、肉厚で柔らかそうな腹部に繋がっている。急に空腹感を思い出した。

「…食欲と性欲って…似てるよな…」

何も考えずに『食つちまおう』かとも思つたが…。やめた。どつぶり後悔しそうだ。

彼女の着物の襟を合わせ、もう一度、頭を撫でる。

「子ども…探してやるつて言つといて、まだだつたな」

母親としての自覚を取り返してもらいたくて、そう言つた。そして、「姉貴たちのそばに戻してくれ」と頼んだ。

彼女は黙つて俺の顔を見ていたが、やがて、腕を差し出す。

細い指が俺の手首を握つた。その部分から真つ黒な粒子が沸き上がり、体内に侵入してきた。また意識が暗転する。

田覚めると、屍ヶ台に戻っていた。

「よかつた。戻れた…」

勇んで姉貴たちのところに行こうとして、違和感に気づく。視界が歪んでいる。大地が広く見通せない。

「…悪い方に戻つて…」

愕然となつた。女の骨を持つて戻つたときに払拭されていた圧迫感が、今、また周囲を覆つている。

一気に不安がせり上がつた。彼女には、わかつてもらつたつもりだつたが、想いを拒んだことで逆鱗に触れただけだつたんだろうか…。このまま、姉貴たちと一緒に屍ヶ台に閉じ込められちまつたりするんだろうか…。

すぐそばで気配を覗かせる女に、

「…もしかして、怒つてる？」

と恐る恐る聞くと、粒子が輪郭を作つて、細い肢体を生み出した。右腕が真つ直ぐに伸びて、ふやけた景色の中の丘を指さす。

「…あれって、最初に姉貴とミナミを見つけたあたりじゃ…？」確認すると、答えずにまた拡散していった。

行けつてことだよな？

歩きにくい感覺に舌打ちをしながら近づく。移動させた箇所に2人はいなかつた。まったく状況がわからない。すでに生き返つているなら嬉しいけど…。

丘を間近にして、姉貴の身につけていたエプロンの薄水色が目に飛び込んできた。やつぱりここに戻つてたんだ。でも、なぜ？ 近づくと。

話し声が聞こえ始めた。

「ミナミちゃん、もう泣かないで。泣くと水分が体から抜けちゃうの。だから、もう泣かないで」

姉貴の諭すような声には、力が残っていなかった。

「もう少しがんばろう。がんばって、もう一度おうちに帰る。おばさん、ミナミちゃんの好きなご飯、たくさん作ってあげるから」

嗚咽混じりの言葉に、慌てて走り寄ると、姉貴がミナミを強く抱きしめていた。

「ね。元気になつて。返事して」

繰り返す励ましに、でもミナミは反応しない。涙の筋をつけた顔は、緩く口を開けたまま、機能を停止していた。

俺は姉貴の目の前にしゃがんで、どう言葉をかけようか迷つた。そして、それが必要ないことに、すぐに気づいた。サチは俺をまつたく見なかつた。

「……これもミナミの回想の一つなのか？」

女に聞くと、空間から腕だけ伸ばして俺の首に巻き付いてきた。

「今から……」

と、また抽象的な言葉を残す。苛立つたが、感情を抑えて、続きを待つた。

サチの目から溢れた涙は、最初、透明だったが、徐々に血混じりの赤いものになつていった。それに比例して姿勢が崩れていき、髪の毛が顔を覆う。

我慢できずに、途中、何度も名前を呼んだり肩を揺さぶるうじてみたが、生命力が抜けていくのをどうすることもできなかつた。

最後にゆっくりと口が開き、長い呼吸を吐いた後、サチは死んでしまつた。

……まだだ。この場から逃げたくなる気持ちを奮つて、次の変化を待つた。骨の女は、俺に必ず活路を『えてくれる。それを盲信することで耐えた。

サチとミナミの肉体から、白い煙のよつたものが抜けてきた。とつさに捕まえようとしたが、質量も何も感じずに、そのまま空へと

逃げてしまつ。それはふらふらと空中を漂い、そして方向を定めると、丘の側面に沿つて離れ始めた。

後を追つていくると、数十歩先に口を開けている洞へと辿り着く。2mほどの高さにある入口から、黒い粒子が誘つていた。姉貴たちの魂は、その中に飛び込んだ。

「ここに入れば、あいつらを取り返せるんだな？」

女に聞くと、背中を押された。

「くそつたれ。もうちょっと親切なお膳立てができねえのかよ」「どこまでもこき使つ屍ヶ台の仕組みに、いい加減キレそうになつた。

真つ暗な洞の中は、あのマンションで起つた突然の闇と同質な空間だつた。上下の区別さえつかない。自分が立つてゐるのか浮いているのかも、よくわからない。

「…なんか日本神話みたいだな。先に死んだ妻こなみを迎えに行くために入つた黄泉路のイメージだ」

あの世とこの世の境目に踏み込んでいる感覚を伝えると、闇と同化した女が、手を握つてきた。

「早く…」

「え？ 時間制限あるの、これ？」

この悪条件で急かされるとは思つてなかつた。急がないと、姉貴たちは蘇生できなくなるんだろうか。

彼女の先導の仕草はたおやかで優しかつた。でも、ついついこのはかなり難しかつた。集中していないと、手の感触を見失うからだ。「抱きつかせてくれたほうが安心できそうだ」うつかり零すと、胸の辺りにすり寄つてきた。

「「めん。冗談」

慌てて引き離すと、名残惜しそうに、俺の手を自分の頬に擦りつけた。

…「ここに動搖してゐる場合じゃないんだけどなあ…。内心喜

んでる自分を自覚して、気を引き締める。

黒一色とはいえ、夜のような静寂は、ここにはない。粒子の流れるザラザラという音が耳障りだった。

「この粒…つていうか、霧…は、動いてないと駄目なもんなのか？」
答えを期待しないで尋ねると、

「魂だから」

と彼女は言った。

「へ…え…。…い、今、靈魂に囲まれてゐて…こと？」

居心地の悪さに、思わず手で周囲を払つと、意外なこと、笑い声が応えた。

「…あんたつて笑うんだ？」

なんだか楽しくなつて、そう指摘すると、また、俺の腕に身を寄せる気配を感じた。今度は拒絕せずにおく。

神経を使つているせいで、時間が長く感じた。足の疲れ具合からしたら、でもそれは歩かなかつただろ？

突然、雜音に紛れて子どもの声が聞こえた。かなり大きい。しかも喚いているように甲高い。

「もう…ないで…帰らな…ミナミ…」

切れ切れの言葉に応答するサチの声も、激高していた。

「いい加減にしなさいよつ！ 戻れないってのが死ぬことだつて、わからんないの？！」

「そうか…。こうやつて引き止めてくれてたから、姉貴とミナミの肉体は完全に終わらずに済んだんだな…。」

感謝と同時に、こんな状況でも変わらないサチの性格に苦笑した。やつぱり、こうこうしぶとい奴は長生きしないと。

声は近くなつたり遠くなつたりした。不安定な存在の姉貴たちは、今、俺の手を握っている彼女と同じような距離を保つているのかも知れない。そばにいると思つたら、急に消える。慌てて探すと現れる。

「姉貴！おーーー！」

呼びかけるこひのちの声が聞こえないのも、同じ原理なんだろ？

ミナミの声がすぐ傍らに現れた。

「ミナミ、もう帰らない！お母さんを殺しちやつたんだもん。帰れないーーー！」

サチの声が、俺と重なるぐらいの位置から怒鳴り返した。

「あんな母親が死んだぐらいで、ミナミちゃんまで死んじやうのはおかしいでしょ！なんなら私が育ててあげるわよつ。夜9時以降は一切叱らない。この条件なら生き返る気になるっ！」

不毛な言い争いに、伝わらないとは知りつつも、

「間部アリサは死んでないよ」

と思わず口を挟んだ。

会話がピタリと止まった。ミナミの、叫びかけた声を飲み込む息遣いを感じる。

…もしかして、俺の声が聞こえた？

「…お母さん、死んでないの…？」

女児の震える声が尋ねた。

「うん」

「ミコニケーションが取れたことに感動しながら、俺はミナミのほうに手を伸ばした。

闇の中で、俺の指から黒い粒子が伸びるのがはっきりと見える。その先に、少女の驚いた顔と、呆然としたサチの姿が浮かんだ。サチがハッとしたような表情で、

「な、泣いてないからねっ」

と顔を逸したのが、らしかつた。

「今さら遅いよ」

こつちも緩み始めた涙腺を必死にこまかした。

「へえ。ミナミは自分が母親を刺したと思ってたんだ」
俺は背中におぶつた小さな存在に聞き返した。腕に掴まつた姉貴の
ほうが、

「だつて、いきなり男の人が出てきて包丁を取り上げましたって、
説得力ないでしょ」
と答える。

「ああ、まあ、確かに」

小学生の柔軟な脳は、俺を、『母親に復讐したいと願つていたミナ
ミの本心が生んだ幻影』だと位置づけたらしい。

まだ洞の中だった。姉貴たちは自力では方向がわからないらしく、
俺のナビに合わせて動いている。俺のほうは、前方に伸びる黒い道
筋に従つていた。

「それにしても、よく生きてたな。サチたちがいなくなつて1ヶ月
経つんだぜ。普通なら衰弱死してる」

精神力の強さだけでは説明しきれない奇跡に感心すると、
「そんなに経つてた？4日ぐらいなものかと思つてたわ」
とあつさり否定された。

「え？つてことは、ここのは時間は、現代では何倍にも匹敵するわけ
か」

密かに冷や汗をかく。

俺がここに着いてから、恐らく1日近い時間が過ぎていた。向こ
うではどれだけの日数を費やしたんだろう…。

「…彩ちゃんに、あんなこと言わなきやよかつた…」

見合い相手と仲睦まじくしている彼女が思い浮かんで、一気にテン
ションが下がる。

姉貴との会話の間、じつと黙つていたミナミが、不意に口を開い

た。

「ねえ…あの、前を歩いている人、誰？」

「見えるのか？」

驚いた。俺の目にも、今は、女の姿は見えない。子どもならではの感覚だろうか。

「あの人、ミナミとサチの探し方を教えてくれたんだ。命の恩人だよ」

そう説明すると、女児は訝しげな声で、こう言つた。

「ミナミのうちに来た女人と一緒の着物着てる」

……。

別に不思議はない。彼女はずつとミナミを見ていた。普段は姿を消していくだろうが、たまには現れたのかも知れない。

そうだよ。夜中の訪問者のことを思い出した。軽い骨の音。複数の声が聞こえたことの説明はつかないが、実体として、彼女は俺たちの前にも存在を示していたんだ。

「お前のこと、見守つてたんだ」

とフオローすると、それでも少女は警戒心を解かない声で咎めた。

「ミナミ、お母さんと一緒に辛いなら連れていくてあげる、って言つた」

俺はミナミを下ろして、頭を撫でるイメージを伝えた。それから女に向かつて言つた。

「俺だって、あんな虐待の場面を見たら同じ事を言つたと思う。そういうことだつたんだろ？」

女の気配がゆっくりと戻ってきて、俺の隣で実体化した。姉貴が小さな悲鳴を上げる。

「あたしは子どもをなくしました」

彼女は淋しげな表情で、ミナミを見下ろした。

「ほら…」

自分の子を無碍にされた母親が、同じ場所で生死の危険に晒されたミナミに同情しただけのことだ。そう確信して後を引き継ぎう

とすると。

女は予想もしなかつたことを口にした。

「子どもはあたしが首を締めました。それから食べました。今もあたしの中にはいます」

「……」

言葉が出なくなってしまった。

精神的におかしなところがあるのは知っていたが、それも、みんな、この世界での不遇が彼女を追い込んだんだと思っていた。だから、「ミミコニケーションを取ることで、わずかずつ正常な状態を取り戻して、ミナミや姉貴を救う手助けをしてくれたのだと、……彼女のことを、本当は善人なんだと、期待していた。

女は狂氣を孕んだ微笑を浮かべて、ミナミの頬に手を近づけた。俺は女児を遠ざけた。

誘うような艶かしい声が、彼女の口から漏れる。

「あたしの子どもは男の子でした。可愛い子でした。遊び相手がいなくて可哀想です。一緒に暮らしてくれる女の子が欲しかった」

それから俺のほうを見て、

「一緒に暮らしてくれる人が欲しかった……」

と、もう一度繰り返した。

「……悪いけど、あんたにやる気はないから

ミナミのことも俺のことも、と言外に込めて跳ねつけると、彼女は焦点のぼけた目を逸らして、また誘導先に戻つていった。

「ねえ、どうこうこと?」

姉貴が耳元で囁く。

「今の女の人気が、ミナミちゃんをここに引っ張ってきたってことなの?」

「たぶん……」

ほぼ確信はしていたが、説明の仕方によつては、女の立場をひどく悪くすることになる。俺は慎重に言葉を繋いだ。

彼女はこの屍ヶ台の土地から魂が離れず、150年先の俺たちの世界に至るまで、ずっと空間を行き来していた。自身の殺害と同時に幼子を失ったことで、特に、子どもに对してのアンテナに敏感だつたんだろう。そこで激しい虐待に心身をすり減らしていた女兒を見つけ、…それから…。

「だつたら、あの鬼母に罰を与えて終わりじゃないの？」

サチの疑問は、俺たちにとつての理想しか考えていなかつた。

「あんたが鬼母を刺した時点でミナミちゃんは救われたんだから、ここに引っ張る必要はないじゃない」

割り切つた姉貴に苦笑する。

「彼女が寂しかつたんだろう。ミナミも精神的に限界が来てた。いつに引っ張つてやつたほうが幸せだと勘違いしたんじゃないか？」

空恐ろしいことだけど。

サチは少しの間考え込んでいたが、やがて口を開いた。

「さつき、リョウちゃんと再会したときに、なんとなくあの人感
情みたいなものを感じたんだけど、…あの人、泣いてたと思つ
は？」

泣いてたのはお前だろうが、とツツ口もうとして、サチが真剣な
に気づいた。軽口を引っ込める。

「私たち…ううん、私にはあんまり執着はないみたい。あんたとミ
ナミちゃんがいなくなることを、すごく怖がつてる気がする」

「…ん…」

彼女との微妙な関係を姉貴に言おうとしたが、なんだか照れくさく
てできなかつた。

「だからそれは…寂しがつてるんだつて
じこまかすと、

「その調子で、またここに引き止められるの、私たち?
不安そうな聲音が尋ねる。

そんなことはないと…信じたい。俺は帰りたいという意志を彼女
に伝えた。彼女はそれを受け止めて、こうやって協力してくれてい

る。

ただ…。もし『一緒に暮らしたかった』という女の願いが暴走したら…どうなるんだろ…。

「早く行動したほうがいいな。気が変わらないうちに」
そう呟くと、姉貴は、

「帰れるのね？」

と嬉しそうに俺の周りを飛び回った。

背負っていたミナミから寝息が漏れ始めた。子どもって肉体がなくとも眠くなるんだ。意外な習性を微笑ましく思つてみると、サチがミナミの体をさすつたような感触があつた。

「ねえ、あの鬼母、生きてるつて言つてたわよね」
声を低くしての確認に、俺も思わず声量を抑えた。

「ああ。ミナミを連れ帰つたら、またアリサが養育することになるのかな…」

その危惧は、ずっとあつた。ミナミに対して、あえて復活を強く望まなかつたのも、また始まるかも知れない虐待に晒したくなつたからだ。

「リョウちゃん、もう一回どどめ刺しにいって」

サチの発想は、俺の思考を上回つていた。

「阿呆」

短く悪態をつくと、盛大に溜息を吐く。

「あーあ。やっぱリョウちゃん、引き取ろつかな。こんな大騒ぎになつたんなら、間部さん、引っ越しやうだろ…。そしたら監視もできないものね」

「カイさんが承知するかあ？」

一応、旦那の顔を窺つてやると、サチは口を尖らせた。

「カイさんの承諾を得よつと思つたら、あと30年ぐらいかかるわよ」

「だけど、子どもを1人引き取るとなると、収入もなくちゃならな

いだろ。姉貴、今、専業主婦じゃないか

現実的に見て、カイさんの協力がなければ、その計画は頓挫する。するとサチは、声に笑みを含んで、俺の前に回り込んだ。

「じゃあ、リョウちゃんが結婚して引き取つたらいいじゃない。子どもを作る手間省けるよ」

「…そこはあんまり省きたくない…」

名案、とこりょうり、迷惑な案に、即却下を願い出た。

「じゃあ…私が離婚して実家に帰るから、養ってくれる？」

代替案も似たようなものだ。

「お前、その思いつきで行動する癖をやめろよ。ミナミを育てるつてこりうのは、簡単なことじやないんだぜ」

浅慮を叱りつけたつもりだが、姉貴は譲らなかつた。

「そつやつて、大人が自分の都合ばかりを優先しているから、子どもを見捨てる羽田になるんじょ。何ができるか、が重要じやないのよ。何をしてやらなきやいけないか、が大事なの。後の始末ばかり考えてたら、行動できなくなつちやうわよ」

「…………まつたく…」

呆れた。ふりをした。でも、本当に呆れたわけじやない。

『大丈夫。なんとかしてあげる』。それがサチの口癖だつた。実際に解決できてもできなくても、その言葉は、聞いた人間を勇気づけて、何らかの結果を産み出してきたんだ。

「…お前つて、姉つていうより親父みたいだ」

一応、賛辞のつもりでそう評価すると、姉貴は、嬉しそうにしながらも、

「あら。お父さんはリョウウチやんの中にいるんじょ？」

と言つた。

「どりこり…？」

意味がわからずに聞き返す。

「だつて、いつも言つてたじやない。家族を守るのはオレの仕事だ

つて。小中学生のセリフじゃないわよ、あれ」
サチは笑う。

「そんなのは、親父の受け売りだ。意味も知らずに使つていただけだ。

「でも…なんだろう、この感覚…。俺の中の何かが、確かに姉貴の言葉に呼応していた。

「それにね」

声を潜めたサチは、ちょっと思案してから、告白を続けた。

「私、お父さんに酷いことしちゃったの。お父さんが死んじゃったのは私のせいだね…。お葬式の時に、お父さんの亡骸を見ながら、あんたに言ったこと…覚えてないわよね…。私が殺したようなものつて。そしたら、リョウちゃん、なんて言つたと思う?」

『お姉ちゃんが絞め殺したの』。そう言つて泣き崩れていた姉貴のことは、完全に思い出している。でも、その後…? 何か言つたのか、俺?

「幸子は優しい子だね、つて、言つてくれたのよ」

姉貴の震え始めた声に、無邪気に膝に入ってきた幼女の姿が重なつた。制御できない愛情が溢れてくる。

「でも、私、結構、悪い子だつたと思つ。そんなふつに言つてくれたお父さんのこと、好きになることがずっとできなかつたもの。自分の苦労を全部お父さんのせいにして逃げてたのね。だからリョウちゃんにもハつ当たり的に無理を…」

そこまで言つて、姉貴は、突然、疑問符をぶつけた。

「お父さん? そこにいるの?」

「うん、と思わず答えてしまった」

俺は親父じやない。けどサチが行方不明になつて一人で心細かつた間、ずっと俺を突き動かしてきた不思議な原動力があつたことは感じていた。

涼一の『一』は2番目つて意味だよ。幸子の次つて意味だ。生前、親父は俺にそう言い含めてきた。自分を優先したくなることもある

だろう。家族を放つて自由になりたいと思つこともあるだろう。そういうときは姉の幸せを一番に考えなさい。それがお前の人生を安定させて、将来、いい父親へと導いてくれる。息子の手本となれないことを自覚していいた親父は、俺にそういう形で道しるべを残そうとしていた。

本当に親父が俺の中にいてくれればいいな、と思った。今回みたいに、家族のために必死にならなきゃいけないときに、手助けをしてほしい。俺をもつと強い人間にしてほしい。

「姉貴、俺、親父みたいになるんだ」

うまく言葉が見つからなかつたが、それで伝わるような気がした。

「リョウちゃんつて、なぜか自分から苦労するほうに向かっちゃうよね」

サチは苦笑しながら、でも嬉しそうに言つた。

風が吹き込む。粒子の密集が乱れて、出口と外の景色が見える。ミナミの気配が背中から消えた。同時に姉貴の存在も。急いで洞の口に走り出ると、クリアな視界の戻つた屍ヶ台の台地の上に、2人の体が折り重なつてているのが見えた。

そして、サチが…。

大きく弧を描いて手を振つた。

ミナミの小さな肉体も、もぞもぞと小刻みな動きを再開している。

「…よかつた…」

俺は脱力して、その場に座り込んだ。

女が真横に立つた。でも、その姿は消えそうに揺らいでいた。口元が微かに動き、物悲しい唄を紡ぐ。子守唄のようだった。

関節が鳴りそうなほど強張った肉体を、姉貴は四苦八苦して動かしていた。水はすでに水筒2本分が消えている。ミナミのほうは、まだほとんど動作ができない。補助して、やつと横になれる程度だつた。

「体が重い…。太つたのかしら…」

「そうだつたら、むしろ尊敬する」

口だけは元通りのサチは、さつきから冗談を連発している。

本当は、彼女たちを抱えてでも、すぐに屍ヶ台から出て行きたかった。女は姿を見せなくなつていたが、さつきの寂しそうな様子に、どうしても危機感が募る。

ただ。

「…安心したせいかな…。俺も、なんだかすごく眠い…」

俺自身に、2人の人間を担ぐ体力が残つていなかつた。気を抜くと、そのまま撃沈しそうだ。

「私たちが動けるようになるまで、ちょっと寝たらっ・置いていかないから」

笑いながら、偉そうに言つ姉貴に、

「馬鹿」

と返す間ももたないほど、急速に意識が途切れだ。

赤ん坊の泣き声がする。

目の覚めた感覚がなかつたから、これは夢なんだろう。俺は台地の端に腰かけて、外界の集落を見下ろしていた。蟻のように小さいはずの人間の行動や声が、なぜかくつきりと頭に映る。

60を越えたほどの男が2人、大きめの桶を運んで、集落から離れかけていた。火のついたような乳児の泣き声は、その中から聞こえる。まだ破損の進む前の家屋の窓から、暗い表情がいくつも覗いていた。

ていた。啜り泣きの聞こえる家もある。

男たちが辟易した様子で言った。

「よく泣くのう。煩くてかなわん」

「だが薬屋が言つておつたぞ。元気な赤子のほうが安心して引き取れると。小さいのは心臓も肝もわずかだしのう」

そのまま、女が殺された小屋のほうに向かっていく。

男たちが見えなくなつた後、粗末な家々から、家人が忍び出た。その中で、一際、弱つてゐる様子の若い女が見えた。

「もう忘れな。あの子は運がなかつたんだよ。また生もう」

慰めに、他の女たちが、その若い母親を囲む。

少し離れたところに、彼女が立つてゐた。2歳ぐらいの男児の手を引いてゐる。暗い目で、赤ん坊が消えた方向をじっと見てゐた。

「ああやつて、生まれてすぐに死ぬ子どももいる。お前は運が良かつた」

傍らの息子に囁きかける。

「早く大きくなつて、こんなことをやめやせんぐらこに力をつけておくれ」

意志の強い瞳で、幼児への言葉に思いを込める。

夢の中では、この土地にもちゃんと夜が來た。大きな蛾が白い鱗粉を撒き散らしながら、朧月の元を飛んでいく。俺はその蛾と同化して、女の家の天井の梁にくつついた。

囲炉裏は消え、燭台の火が細く闇を裂いてゐる。子どもは、部屋の隅で、すでに寝息を立ててゐた。女も薄い夜着に替えてゐる。夫の姿はなかつた。

突然、戸口がガタガタと音を立てた。一瞬、警戒した様子の彼女だつたが、すぐに走り寄つて戸を開く。

その先には20代後半と思われる体躯のいい男が立つてゐた。

「たえ、今日はおつとうは?」

当たり前のように家に上がり込む男を、女…たえさんは、戸惑つた表情で咎めた。

「おつとうは辻に行つてゐる。お前さまは行かなかつたのか?」
「どうやら予想外の訪問者だつたらしい。戸を開けたのは、夫だと思つたからかもしない。」

「土地主の息子の俺が畜生働きに出ることもあるまい」

横柄な態度の『息子』は、上り框に腰をかけた。

何の用かと焦れて待つていたたえさんに、充分な時間を置いてから、男は、

「酒を用意しろ」

と命じた。たえさんは首を振る。

「そんなものは買えない。あたしたちの暮らしを知らないのかい、お前さまは?」

集落の利益のほとんどを榨取する土地主でありながら、と言葉の裏には非難の響きがあつた。

「それなら」

土地主の息子は口角の釣り上がつた笑みを見せて、彼女の肢体を引き寄せた。

「酒代ぐらいい稼がせてやろ」

無理矢理、薄衣を剥がされていくたえさんを、俺は為す術もなく見ていた。

頭の中に割れた鐘のような大音響が鳴つている。

朝の陽光が差し込む部屋の中で、まだ熟睡中の幼児に寄り添い、たえさんは子守唄を唄つていた。

「平氣…」

その合間に呟きが漏れる。

「いんなことぐらには平氣…」

昼になり、殺氣立つた村の女たちが、たえさんの住居に押しかけた。

「お前のところだけ子どもを取られないと思つたら、土地主とできてやがつたのかい？」

「冗談じやないよ。あたしら、みんな眞面目に順番を守つてゐるんだ。そんなやり方は許されないよ！」

戸口を開けられないようにつつかえた棒に縋りつきながら、たえさんは震えた声で言い訳を繰り返した。

「違う。歳が行つてからの子どもだつたからだよ。次に生めないから堪忍してもらつただけだ」

「俺はたえなんかとできてはおらん。昨日は酔つ払つて家を間違えた」

外で土地主の息子の寝ぼけたような声が聞こえた。

たんだ」

救われた。そう思つたたえさんは、勢い込んで戸を開けた。

「そうだよ。あたしなんかがお前をまと何かあるわけがない」必死で嘘に便乗して、周囲を説得しようとした。

反論が小さくなり、気まずい空気が流れる。たえさんの顔に安堵の表情が浮かび始めた。

その時。

「みんながそんなに言つなら、公平にするために、たえの子どもも取り上げてやつてもいいぞ」

息子の非情な提案が下された。

狂つたように叫んで幼子にしがみついたえさんを、何人かが引き剥がそうと試みた。けれど常人離れした力に対抗することはできなかつた。

土地主の息子が耳元に寄つて、彼女に囁く。

「その子どもを手放したら、お前を俺のところに連れていつてやる。お荷物はさつさと片付けろ」

たえさんは激しく首を振つた。

呆れた様子の息子は、

「しばらく小屋に放り込んでおけ。そのうちに疲れて手を離すだろう」と言った。

葦の壁の隙間から、陰気な風が吹き込む。

昨日の赤ん坊の首のない遺体を見ながら、たえさんは放心状態で、自分の子どもを絞め殺していた。

人の手に任せれば、怖い思いをさせることになる。まだ片言しか話せないけれど、

「おつかあ

と懐いてくる息子を、笑顔のまま、送つてやりたかった。

「『』めんね」

泡を吹いた白い顔を撫で、それから、すぐにやつてくるだろう解体係たちのことを考えた。自分の命より大事にしていた存在を、金儲けのために使おうとする連中に、どうしても渡したくない。

「…『』めんね」

もう一度謝つて、たえさんは幼児の口に腕を差し入れた。柔らかい粘膜を破れば、素手でも臓器を取り出すことができる。

名前を呼ばれた気がした。

「リヨウちゃん、ちょっと一緒に起きなさいっ！」

姉貴が焦った声で叫んでいた。

「…なに？」

まだ夢の中から脱しきれていなかつた俺は、震えの止まらない手を額に当たた。驚くほど冷たい。

自分の体にたえさんの粒子が群がっているのを感じた。俺、食われてるんだ。ぼんやりと理解する。

「なに、じゃないわよ。何よ、それ。気持ち悪い」

姉貴は、未だに不自由な動きに阻まれつつ、俺のそばに寄ってきた。

「…ああ、大丈夫…」

答えになつてねえな、と自覚しながら、身を起こしてサチに言った。田を転じると、ミナミも不安そうな顔でこいつを見ている。

正常な2人を見たら、少し落ち着いた。

「急いだほうがよさそうだ。ミナミは俺が背負っていくから、サチ、歩ける?」

すぐに移動することを告げると、姉貴はふらふらと立ち上がりながら、

「無重力の宇宙から帰ってきた直後で、きっとこんな感じよね」と時事的なネタを口にした。気分じゃなかつたが、あえて笑つてみる。

「『じ』に行けばいいのかは…わかってるの?」

屍の散乱する大地から田を背けながら、姉貴が聞く。

「うん。見当はついてる」

俺は自分が入ってきた場所に向かっていた。あの黒い障壁の向こう側に、きっと元の世界がある。行き来の自由なたえさんに協力してもらえば、難なく脱出できる気がした。

たえさんは姿を現さない。ポケットの骨は短い間にカスカスになつていた。今では、うかつに触つたら折れそうだ。このまま消えて行くのかもしれない。

「『じ』で消滅するつてことは…成仏するつてことなのかな。それとも…」

ただ、無くなるつてことなんだろうか…。

この死者の世界を『優しい』と表現した彼女を思い出した。『希望のある現世』を、強い、恐らく彼女を虜めた生者たちに譲つて、自分はこの屍の台地に残ると微笑んだ顔が、今になつて、強烈に心臓を締めつけてくる。

「ハナハナ…帰らなきゃダメかな…」

唐突に女兒が呟いた。サチが、
「なんでそんなこと呟つの？」

と慌てる。ミナミはゆっくりと首を巡らせた。

「だつて…帰つたらお母さんと会わなきやいけないもん…。ミナミ
いたほうがいい…」

そう言つて、また力なく頭を預ける。

生きていく」とは戦うことだ。決して強勒ではないたえさんやミナミにも、その使命が課せられていることに、やりきれない思いが湧いた。弱い人間は、この停滞した世界に留まつたほうが、本当は幸せなんじゃないか？『現世』が苦痛にしかならないのなら、なぜ彼女たちは生まれてきたんだ？

サチがミナミの背中をポンポンと叩いた。

「それが大事なのよ。あんなお母さんと会いたくないつて、向こうつに戻つてからも、ちゃんとみんなに伝えるの。そうしたら、みんながミナミちゃんの味方になつてくれる」

その言葉に、ミナミよりも俺のほうが驚いた。

「ミナミ、イヤつて呟つてもいいの？」

少女が聞き返すと、姉貴は、

「もちろん」

と請け負つ。

「泣いてもいいの？お母さん、声出しちゃダメだつて呟ついたよ」姉貴のマンショソで聞いた幻聴で、ミナミの声が厚い布越しのようにつぐつぐもつていたことを思い出す。

「…それは私のせいね、きつと。私が中途半端にお母さん注意事项たせいで、ミナミちゃんが被害を被ることになつたんだと思つ…」サチは神妙な声で、

「「めんね」

と謝つた。

ミナミは涙声で謝罪を拒絶する。

「ミナミのお母さん、おばさんのこと、悪い人だつて呟ついた。ミ

ナリの声が聞こえると怒ってくのからだつて。だから、ミナミ、おばさんのこと嫌いだつた」
そう言つて。

でも、サチのまつに腕を伸ばした。

体力、ギリギリで踏ん張りながら、姉貴はミナミを抱きしめて、
「その調子よ」

と微笑んだ。

「今みたいな調子で、言こにいくことでもしかことまつのが
耳元で囁くと、小さな体がしがみついた。

「もう独りで我慢しないでね」

サチの願いに、ミナミは答へず、頭を何度も上下に揺らした。

熱い固まりが、体の中で、ひとつと冷えて沈んでいく。
口を開きかけて、俺は姉貴に伝えることをやめた。まだ早い。

前方に『出口』が見えてきた。

たえさんの骨をポケットから取り出すと、身を削るよつて粒子を
湧かせ、異界への道しるべを作ってくれる。

「よかつた。引き止められるじゃないかとひやひやしてたわ」

サチがほつとした表情で俺の手を握った。

「マンションの場所に正確に戻れなくて、いつもこれば離され
ことはないよね」

明るい笑顔に、俺も笑つて、

「うん」

と答えた。

それから、背負い直してミナミを下ろし、姉貴に預けた。

「連れてこつてやつて」

きよとんとした2人を黒い空間に押しやつた。
「もう少しだけここにいる。後で必ず帰るからー。」

そう大声で伝えると、姉貴が前後不覚な闇の中から叫ぶ。

「なに？！ちょ、ちょっと！馬鹿つ。なに考えてんの、あんた…」
声が小さくなつて途切れた。

…今なら、まだ間に合つ。一緒に帰れる。
もし…。俺は体力のもつ限界まで、ここで、たえさんと過ぐしてやるつもりだつた。だけど、もしその間に帰れない事態になつたら…とも思つ。帰るなら…今しかないんじやないか…。

冷えて揺るがないはずの固まりが、また熱を帯びて口元にせり上がつた。『俺はこんなところで死にたくない』。本音を口に出せば、たえさんより自分を優先できる気がする。とうの昔に死んでしまつた屍たちに遠慮せずに、堂々と生きることを選べる気がする。

けど…。

「現代があるのって、過去があつたからなんだよな…」

知らなければ先祖たちの生き様は否定できた。そんな過酷な時代があつたわけがないと。否定して、気楽に生きることができた。けど知つたから。俺の親の、そのまた前の、ほんの6代か7代遡つただけの人間が、苦しい時代から解放されずに、未だに因習の土地で彷徨つてゐることを。

茶色い皮膚に筋の浮いた痩せ細つた脚が、座り込んだ俺の隣に現れた。

「…一緒に暮らす…のは難しいけど…」

見上げると、複雑な表情を浮かべるたえさんの顔が透けていた。

「気が晴れるまで話に付き合つ。それで手を打つて」

笑いかけて手を差し出すと、静かに目を閉じた彼女は、隣に膝をついて、俺の手を自分の頬に当てた。

彼女の肌の感触は死人のままだつたが、それでも、濡れていて、ほんのり温かかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7532x/>

屍ヶ台

2011年12月1日17時02分発行